



荻窪倉兼田遺跡

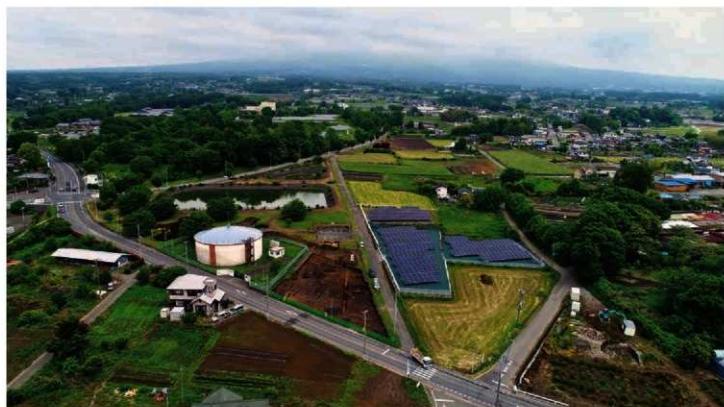
荻窪受水場 配水池築造に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

群馬県前橋市

# 荻窪倉兼三遺跡

ogikubo-kurakane san site

荻窪受水場 配水池築造に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



南上空から 薫む赤城山

2021.5  
前橋市教育委員会

群馬県前橋市

# 荻窪倉兼Ⅲ遺跡

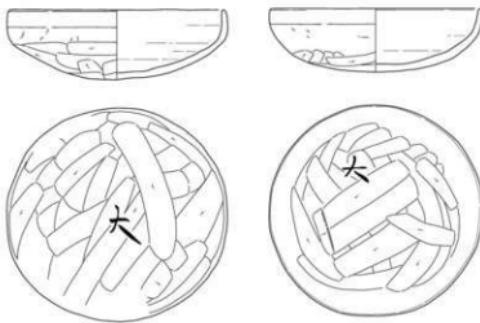
ogikubo-kurakane san site

荻窪受水場 配水池築造に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

赤城山南麓における奈良・平安時代遺跡群

7世紀末～8世紀中葉 有力者の居宅と推定される大形建物群と柵列

墨書き土器「大」の出土



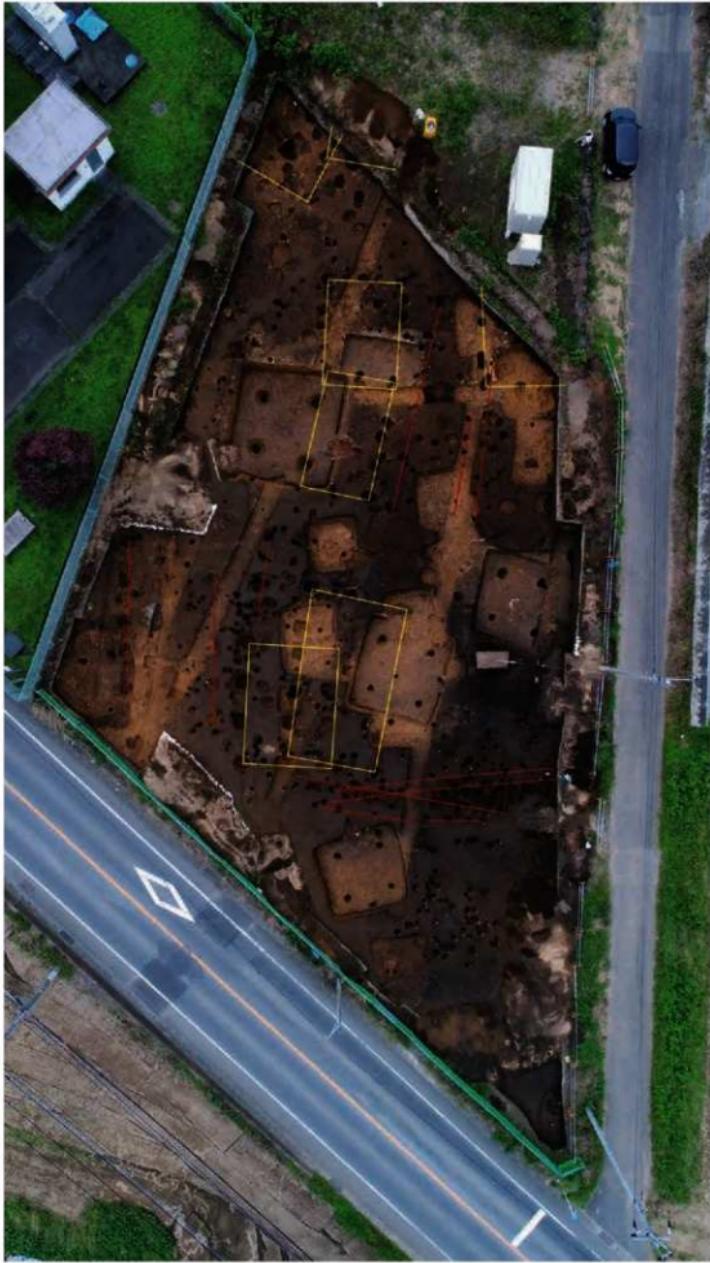
S = 1/3

19号竪穴建物跡出土土師器壺底外面の墨書き「大」

2021.5

前橋市教育委員会





荻窪倉兼III遺跡（垂直・上が北）



掘立柱建物跡群（南から）



X-1（柵列の累積）（東から）



D-24（斜め幡竿の柱穴）（南から）



斜め幡竿の柱穴（左下）と掘立柱建物跡群と柵列（南から）



H-19 (西から)

一辺 7 m の大形堅穴建物跡。東壁に立派な竈があり、竈穴部の中央には柱がある。四本の主柱穴以外に壁柱穴があり、その外側には棚状施設、さらにその外側には壁外柱穴が巡る。



H-19 の竈 全景（西から）

建物規模に応じて竈も大きく、空焚き時と使用時の壁が二面遺っていた。



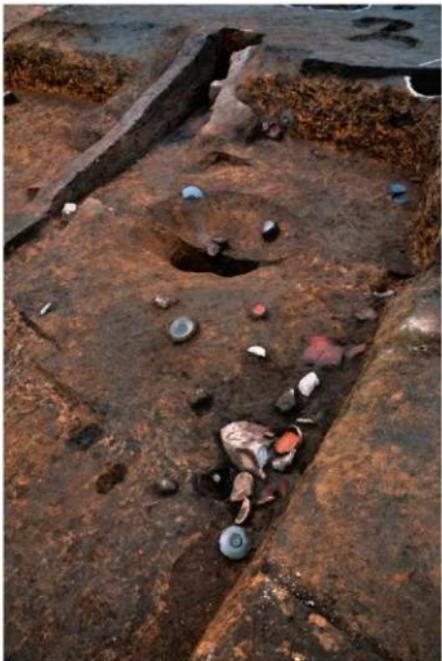
H-19 の竈 煙道部横断土層断面（西から）

天井の遺る空焚き時の煙道内には、使用時の煙道が入籠状に確認された。

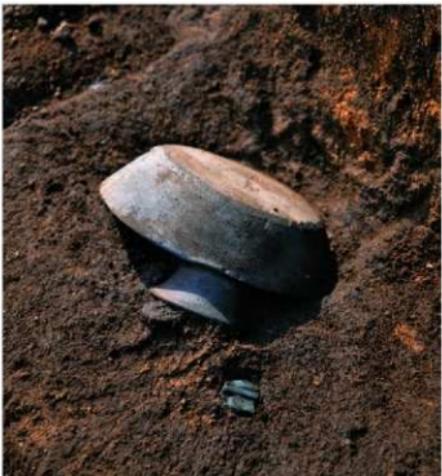


H-19 竈調査状況（西から）

使用時と空焚き時を可視化する調査方法を模索した。



H-19 の遺物出土状態（南西から）  
出入口（右手前）直下を中心に多数の土器が出土。



H-19 の遺物出土状態（南西から）  
北壁上の樋から転落したかのような平瓶の出土状態。隣からは銅片。



H-19 出土の銅片  
やや厚みのある様子からは、仏像の衣部や光背と思われる。



H-19 出土土器（一部）

## はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国を中心として栄えました。また、続く律令時代になってからは總社・元總社地区に山王庵寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野国の中枢をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた鷹橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する荻窪倉兼三遺跡は、本市中央部赤城山南麓の荻窪町にあり、周辺でも多くの遺構や遺物が見つかっています。今回の調査は、荻窪受水場の配水池築造に伴い実施されました。調査の結果、古墳時代から平安時代にかけての集落跡が検出されました。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進めることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和3年5月

前橋市教育委員会

教育長 吉川 真由美

## 例 言

1. 本書は、群馬県前橋市の荻窪受水場配水池築造に先立つ荻窪倉兼Ⅲ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。  
2. 発掘調査は、前橋市水道局の委託を受け、前橋市教育委員会事務局文化財保護課の指導・助言のもと、山下工業株式会社（代表取締役 山下尚）文化財事業部が実施した。

3. 発掘調査から報告書刊行までの作業は、前橋市水道局の費用負担で実施した。

4. 発掘調査の要項は、次のとおりである。

遺跡所在地 群馬県前橋市荻窪町 732番7、732番8

遺跡略称 2D30 調査面積 1,239m<sup>2</sup>

期間 【現地調査】令和2年5月10日～令和2年7月22日

【整理】 令和2年7月23日～令和3年5月31日

調査担当者 永井智教（山下工業株式会社 文化財事業部調査技術員）

調査員 外山政子（前榛名町史編纂室）

5. 遺構写真は永井、空撮は清水龍太、遺物写真は青木利文・川邊みずき、遺物集合写真は原誠二が撮影した。

6. 遺構測量及び平面図作成は、田中隆明（タナカ設計）が行った。

7. 現地調査作業員は、以下のとおり。（五十音順）

石関 清 岩崎のぞみ 川邊みずき 槙澤礼子 斎藤勝 斎藤茂二 中野光雄 野村高久

畠山孝四郎 横口久雄 楠下田千鶴 広瀬敏彦 村田勝司 和田進 渡辺寿美子

8. 整理作業は、永井指示のもと、石塚久則・青木(利)を中心に、青木ゆかり・川邊・槙澤・岡田萌・谷藤龍太郎・富田和美・楠下田が行った。

9. 本書の執筆については、Iが前橋市教育委員会事務局（文化財保護課 小峰篤）、VIは高橋敦（株式会社古生体研究所）、VIIのI、IIは外山、他は永井である。

10. 19号竪穴建物跡出土の銅片については、松田誠一郎氏（東京藝術大学美術学部教授）に写真鑑定頂いた。

11. 本書の編集は、永井監修のもと川邊・谷藤が行った。

12. 発掘調査資料及び出土遺物は、一括して前橋市教育委員会が保管している。

13. 調査及び報告書の作成にあたっては、下記の諸氏・機関からご助言・ご協力賜った。（五十音順・敬称略）

有山経代 五十嵐信 池田敏宏 井上尚明 出浦崇 岩井直人 大野義人 大橋泰夫 加部二生

川田馨秋 木村修 斎藤達也 真保昌弘 関口功一 関口修 高橋実果 田中広明 谷旬 谷川遼

知久裕昭 中村岳彦 中山晋 西川制 橋本博文 深澤敦仁 深澤みどり 南雲博文 野村満

前原豊 松田猛 三浦京子 三浦茂三郎 山崎芳春 山本良太 横澤真一

## 凡 例

1. 遺跡・全体図におけるX・Y値は、日本測地系の座標値、挿図中の北は座標北である。

2. 挿図中で用いる遺構等の略称は、以下のとおりである。

【竪穴建物跡】H 【掘立柱建物跡】B 【溝跡】W 【井戸跡】I 【土坑】D 【ピット】P 【柵列跡】V

3. 遺構図は、1/600・1/300・1/100・1/60・1/40を紙面に合わせて使い分け、各挿図中に明記した。

4. 遺物実測図は、土器1/3、鉄製品・石製品は1/1・1/2・1/3・1/4、遺物写真是1/1・1/2・1/4とした。

5. 遺構図・遺物図の網掛けについては、個々の図中に凡例を明示した。

6. 本書で用いる火山噴出物の略称と年代については、以下のとおりである。

【榛名山二ツ岳・渋川テフラ】 F A 5世紀末 【浅間山C軽石】 As-C 3世紀末～4世紀初頭

## 目 次

### 巻頭図版

巻頭1 萩窪倉兼Ⅲ遺跡（垂直・上が北）	巻頭3 H-19（西から） H-19の竈 全景（西から） H-19の竈 横道部横断上層断面（西から） H-19 竈調査状況（西から）
巻頭2 挖立柱建物跡群（南から） X-1（柵列の堆积）（東から） D-24（斜め桶半の柱穴）（南から） 斜め桶半の柱穴（左下）と掘立柱建物群と柵列（南から）	巻頭4 H-19の遺物出土状態（南西から） H-19の遺物出土状態（南東から） H-19 出土の副片 H-19 出土土器（一部）

### はじめに

#### 例言・凡例・目次

I 調査に至る経緯	1	
II 遺跡の位置と環境	1	
1. 遺跡の位置		
2. 地理的環境		
III 調査の方針と経過	7	
1. 調査範囲と基本方針		
2. 調査経過		
IV 基本崩廻	7	
V 検出された遺構と遺物	9	
① 竪穴建物跡	② 掘立柱建物跡	③ 柵列跡
④ 性格不明遺構	⑤ 溝跡	⑥ 土坑
⑦ ピット	⑧ 特徴的な出土遺物	
VI 萩窪倉兼Ⅲ遺跡から出土した炭化材の樹種	70	
VII 萩窪倉兼Ⅲ遺跡の竈について	73	
I 本遺跡の竈の概要		
II 萩窪倉兼Ⅲ遺跡の竈構造と構築技術について（OKH-19の検討から）		
余録「上泉・萩窪遺跡群」の円形有段遺構をめぐって		
VIII 成果と問題点	83	
① 遺構の変遷	② II期の遺構群について	
③ 古代赤城山南麓の開発と「上泉・萩窪遺跡群」（予察）		

### 参考文献

### 写真図版・報告書抄録

### 挿図目次

Fig.1 遺跡位置図	Fig.36 Pb 分布図（1）	48
Fig.2 調査地点と既往の調査	Fig.37 Pb 分布図（2）	49
Fig.3 周辺遺跡分布図	Fig.38 Pb 分布図（3）	50
Fig.4 調査区全体図	Fig.39 Pb 分布図（4）	51
Fig.5 斜め桶半 柵式圖	Fig.40 出土遺物（1）	53
Fig.6 1号型穴建物跡	Fig.41 出土遺物（2）	54
Fig.7 2・4・5号型穴建物跡	Fig.42 出土遺物（3）	55
Fig.8 3号型穴建物跡	Fig.43 出土遺物（4）	56
Fig.9 6号型穴建物跡	Fig.44 出土遺物（5）	57
Fig.10 7・8a号型穴建物跡及び3号土坑	Fig.45 出土遺物（6）	58
Fig.11 7・8a号型穴建物跡	Fig.46 出土遺物（7）	59
Fig.12 8b・9号型穴建物跡	Fig.47 出土遺物（8）	60
Fig.13 8b・8c・9号型穴建物跡	Fig.48 出土遺物（9）	61
Fig.14 8c・11c号型穴建物跡	Fig.49 出土遺物（10）	62
Fig.15 10・11a・11b号型穴建物跡	Fig.50 出土遺物（11）	63
Fig.16 10・11a・11b号型穴建物跡	Fig.51 出土遺物（12）	64
Fig.17 12～14号型穴建物跡及び4・8・10・15号土坑	Fig.52 出土遺物（13）	65
Fig.18 12～14・17号型穴建物跡	Fig.53 炭化材	72
Fig.19 15～18号型穴建物跡及び12～14号土坑	Fig.54 燃焼室と煙突の位置・桶斜角度面図	74
Fig.20 19号型穴建物跡	Fig.55 煙道出入口確認状況	74
Fig.21 19号型穴建物跡出土物出土状況	Fig.56 竈調査状況（竈セクションを優先した結果）	75
Fig.22 19号型穴建物跡掘方	Fig.57 竈使用時の火床面と袖位置	75
Fig.23 19号型穴建物跡	Fig.58 燃焼部奥部第三次空焚きの様子	76
Fig.24 20号型穴建物跡	Fig.59 三重に残る空焚き痕跡・煙道部	77
Fig.25 1号掘立柱建物跡	Fig.60 第一・二次空焚きの痕跡	77
Fig.26 2～4号掘立柱建物跡	Fig.61 右側面の附け土と赤色の様子	77
Fig.27 5号掘立柱建物跡（1）	Fig.62 貼付粘性にみえる植物繊維	78
Fig.28 5号掘立柱建物跡（2）	Fig.63 遺構構造の深入範囲	79
Fig.29 6号掘立柱建物跡	Fig.64 遺構構造の深入範囲（南から）	79
Fig.30 7号掘立柱建物跡	Fig.65 例災方式の模式図（OKH-19をモデルに）	79
Fig.31 1・2号柵列跡	Fig.66 円形有段遺構の諸例	各報文を元に作成
Fig.32 3～6号柵列跡	Fig.67 萩窪倉兼遺跡の変遷（1）	84
Fig.33 X-1	Fig.68 萩窪倉兼遺跡の変遷（2）	85
Fig.34 X-1（柱列推定）	Fig.69 II期の遺跡及び変遷案	86
Fig.35 17～19・22～24号土坑	Fig.70 萩窪倉兼遺跡全体図	88

## 挿表目次

Tab.1 周辺道路一覧表	5	Tab.10 ピット一覧表(2)	17
Tab.2 穴穴建物跡一覧表	8, 12	Tab.11 ピット一覧表(3)	18
Tab.3 挖立柱建物跡一覧表	13	Tab.12 出土遺物概要表(1)	66
Tab.4 棚列跡一覧表	13	Tab.13 出土遺物概要表(2)	67
Tab.5 溝跡一覧表	13	Tab.14 出土遺物概要表(3)	68
Tab.6 挖立柱建物跡ピット一覧表	14	Tab.15 出土遺物概要表(4)	69
Tab.7 棚列跡ピット一覧表	15	Tab.16 穴穴建物跡出土品・陶器一覧表(重複比)	69
Tab.8 土坑一覧表	15	Tab.17 樹種同定結果	70
Tab.9 ピット一覧表(1)	16	Tab.18 群馬県内の円形有段道構(円形大形土坑を含む)	81

## 写真図版目次

PL1 南方から見た荻窪倉兼山遺跡と赤堀山	PL11 H-11a・11b (西から)	PL20 B-5 (南から)
北方から見た荻窪倉兼山遺跡	H-11a (西から)	B-5, P5-6 (東から・合成)
	H-11a 電 (西から)	同左 土層断面 (東から)
PL2 赤堀倉兼山遺跡・道脇古墳群 (北が上)	H-11b 通水土塀跡 (西から)	B-5, P6 土層断面 (北から)
	H-11b 道脇古墳群 (西から)	B-5, P10 土層断面 (北から)
PL3 H-3+a・b (左) と H-2 (右) (南東から)	PL12 H-11c 土層断面 (西から)	B-5, P11 土層断面 (東から)
H-3a 電 (西から) 案出 (西から)	H-11c 土層断面 (北から)	B-5, P14 土層断面 (南から)
H-3b 電 (東から) 案出 (北から)	H-12 完成 (西から)	PL21 B-6 (南から)
H-3c 電 (東から) 案出 (南から)	H-12 電 (西から)	B-6, P1 (西から)
H-4 (西から)	H-13 (南から)	同左 P2 (西から)
H-4a 電付近 道脇古墳群 (西から)	H-14 土層断面 (北から)	B-6, P4 (左) と B-5, P7 (右) (南から)
H-5 (西から)	H-15 (西から)	B-6, P5 (左) と B-5 (右) (南から)
H-5a 道脇古墳群 (南から)	H-16 完成 (北から)	B-6, P6 (南から)
H-5b 道脇古墳群 (南から)	H-17 完成 (西から)	B-6, P7 (西から)
H-6 (西から)	H-17 電 (西から)	同左 P8 (西から)
PL4 H-3 遺物出土状況 (南東から)	PL13 H-18 遺物出土状況 (南西から)	PL22 B-7 (南) と B-1 (北から)
H-3a 電跡窪穴 全貌 (南西から)	H-18 遺物の被覆層 (西から)	B-7, P6-7 と H-1 (南から・合成)
H-3b 電 (南東から)	H-18 遺物の被覆層 (西から)	V-1 (北から)
H-3c 道脇古墳群 (南から)	H-19 遺物出土状況 (西から)	V-2 (北から)
PL5 H-4 (西から)	PL14 H-19 遺物出土状況 (西から)	V-3 (南から)
H-4a 電付近 道脇古墳群 (西から)	H-19 遺物の被覆層 (西から)	PL23 X-1 (西から)
H-5 (西から)	H-19 遺物の被覆層 (西から)	X-1 (東から)
H-6 道脇古墳群 (西から)	H-19 遺物出土状況 (西から)	X-1 土層断面 (北から)
H-6a 道脇造口 (西から)	H-19 遺物の被覆層 (西から)	X-1 土層断面 (西から・合成)
H-6b 道脇出土状況 (西から)	H-19 遺物の被覆層 (西から)	PL24 D-3 (東から)
H-6c 道脇造口 (西から)	H-19 遺物の被覆層 (西から)	D-4 土層断面 (南から)
H-6d 道脇出土状況 (西から)	H-19 遺物の被覆層 (西から)	D-4 (東から)
H-6e 道脇出土状況 (西から)	H-19 遺物の被覆層 (西から)	D-17 遺物出土状況 (南から)
H-6f 道脇出土状況 (西から)	H-19 遺物の被覆層 (西から)	D-22 土層断面 (南から)
H-6g 道脇出土状況 (西から)	H-19 遺物の被覆層 (西から)	D-24 斷ち切り (南から)
H-6h 道脇出土状況 (西から)	H-19 遺物の被覆層 (西から)	D-25 (北東から)
PL7 H-7 (西から)	PL15 H-19 遺物出土状況 (西から)	PL25 遺物写真 (H-1, H-2, H-3, H-4, H-5)
H-7 電 (西から)	H-19 床下土塀 土層断面 (西から)	PL26 遺物写真 (H-6, H-7, H-8a)
H-7a 遺物出土状況 (東から)	H-19 左方調査K区段 (西から)	PL27 遺物写真 (H-8a, H-8b, H-8c, H-9)
H-8a 電出 (東から)	H-19 右方調査K区段 (北から)	PL28 遺物写真 (H-10, H-11a・b, H-11c, H-12, H-14, H-15)
H-8b 電出 (東から)	H-19 右方調査K区段 (北から)	PL29 遺物写真 (H-16, H-17, H-18, H-19)
H-8c 断ち切り (北西から)	H-20 断ち切り (北から)	PL30 遺物写真 (H-19)
H-8d 断ち切り (南西から)	H-20 断ち切り (北から)	PL31 遺物写真 (H-20, B-1P5, B-5P10, B-6P6, B-6P付近, B-6P8, B-6P9, X-1, X-1地平, V-3P4, D-1, D-17, P-31, P-310, P-321, P-327)
PL8 H-8b (西から)	PL16 H-19 電 その1 (西から)	
H-8b 遺物出土状況 (南から)	H-19 電 その2 (西から)	
H-8b (西から)	H-19 床下土塀 土層断面 (西から)	
H-8c 電 (西から)	H-19 左方調査K区段 (西から)	
H-8d 断ち切り (北西から)	H-19 右方調査K区段 (北から)	
H-8e 断ち切り (南西から)	H-20 (西から)	
H-9b (西から)	H-20 断ち切り (北から)	
H-9c 遺物出土状況 (西から)	H-20 断ち切り (北から)	
H-9d 遺物出土状況 (東から)	H-20 断ち切り (北から)	
H-9e 遺物の被覆層 (北西から)	PL17 挖立柱建物跡群 (北から)	
H-9f 遺物の被覆層 (北西から)	B-3+4 (南東から)	
PL10 H-9 (西から)	PL18 挖立柱建物跡群 (北から)	
H-9 遺物出土状況 (西から)	B-3+4 (南東から)	
H-9 遺物の被覆層 (南から)		
H-10 完成 (南側)		
H-10 電 (西から)		



Fig. 1 遺跡位置図

「国土地理院発行 地図帳地図 1/200000」を改変

## I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市公営企業管理者 稲垣則行（浄水課）（以下「前橋市公営企業」という。）が施工する、荻窪受水場配水池築造に伴い実施されたものである。

当該工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地（前橋市 0060 遺跡）内であることから、試掘確認調査（以下「試掘調査」という。）を令和元年 10 月 31 日に実施した。試掘調査の結果、古代の竪穴住居跡等が検出されたため、埋蔵文化財の取り扱いについて前橋市公営企業と協議した。工事計画により遺構の現状保存は困難であることから、記録保存を目的とした発掘調査を実施することで、前橋市公営企業と合意した。

令和元年 12 月 17 日付で前橋市公営企業より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が、前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。市教委では既に他の発掘調査予定があるため、市教委直営による発掘調査実施は困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで前橋市公営企業と合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。令和 2 年 4 月 14 日付で前橋市公営企業と民間調査組織である山下工業株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。なお、遺跡名称「荻窪倉兼Ⅲ遺跡」（遺跡略コード：2D30）の「荻窪」は町名を採用し、「倉兼」は旧小字名を採用した。また、ローマ数字の「Ⅲ」は過年度に実施した発掘調査と区別するため付したものである。（文化財保護課）

## II 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置

今回発掘調査を実施した荻窪倉兼Ⅲ遺跡は、前橋市荻窪町内に所在する。群馬県庁の北東約 6.5km、標高は 173 m である。平成の市町村合併前から前橋市であった荻窪町は、1954 年（昭和 29 年）の前橋市への編入合併以前は、1889 年（明治 22 年）に荻窪・江木・堤・亀泉・堀之下・石閑・東片貝・西片貝・三保・幸塚・上沖之郷・下沖之郷・上泉各村の合併で成立した勢多郡桂萱村であった。また、本遺跡東側は南北の道路を挟んで旧勢多郡大胡町大字堀越に接し、西方は上泉町を挟んで旧勢多郡芳賀村に属していた小坂子町があり、南傾斜の地形に直行して細長く分割された旧村の境界が南北に入り組んだ地域である。

前橋市荻窪町北部に相当する今回の調査地点は典型的な赤城山南麓の農村景観を今も保つ反面、1973 年に建設された清掃工場を皮切りに、2011 年には同清掃工場の地元対策として設置された荻窪公園内に「道の駅赤城の恵」が開設、2017 年には国道 17 号上武道路が全線開通（それ以前から段階的に供用されていた）、南方の五代町には工業団地、西方の芳賀町には 1970 年代以降住宅・工業団地の造成というように、少しづつではあるが確実に都市化の波が近づいている地域もある。

### 2. 地理的環境

調査地点は赤城山南麓で一般的な台地性の南緩斜面上に位置し、寺沢川の支谷によって形成された緩やかな谷地形に東面し、南東方向へ緩やかに下っている。狹義の遺跡範囲はこの東面する谷を東限に、西は寺沢川の別の支谷、南は県道渋川大胡線まで、北は荻窪東爪遺跡に接している。

遺跡付近は近世以来広く畠地として土地利用されていたようで、水田は狭隘な谷津田が僅かであったことが陸軍迅速測図によって窺われるが、遺跡南方を東流する大正用水・遺跡北方約 1.5km をやはり東流する群馬用水の開鑿とそれに伴う土地改良事業の実施によって、現在では比較的広く整備された水田の比率も大きい。（永井）

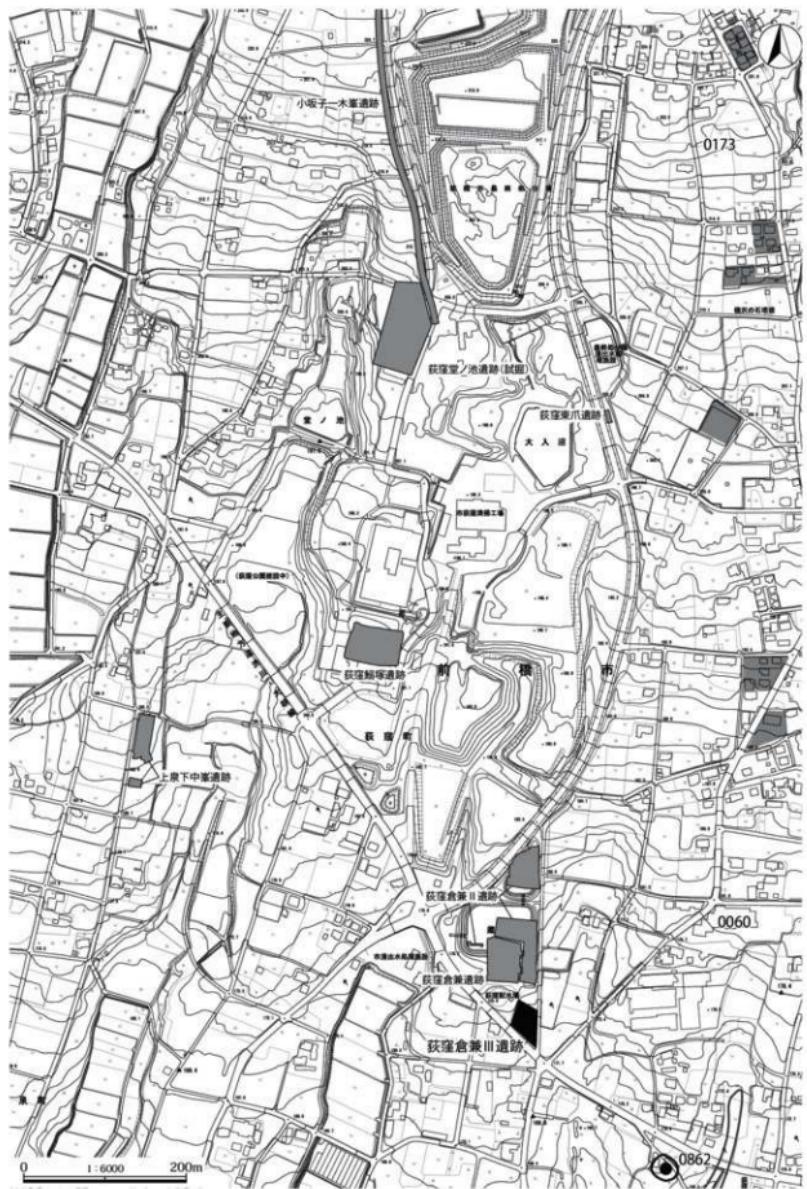


Fig.2 調査地点と既往の調査

「前橋市道路分布図(2013)」を改変

### 3. 歴史的環境

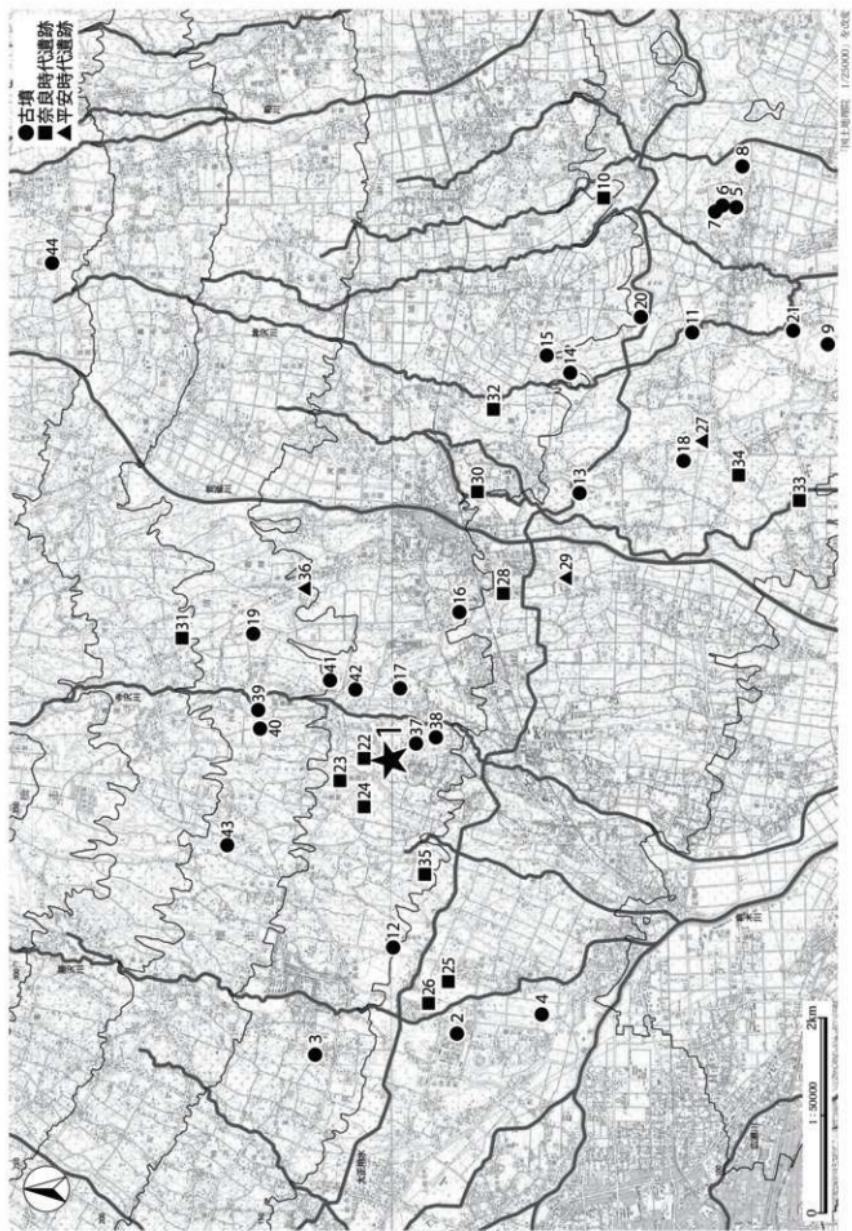
本遺跡は古墳時代後期から平安時代を中心とし、大形の竪穴・掘立柱建物や柵列など注目される遺構群が検出された。本節では遺跡が多く分布する赤城山南麓の遺跡の中でも、古墳時代後期から平安時代までの遺跡を整理することで、周辺の歴史的環境を示しておきたい。

**古墳時代後期の古墳など** 本遺跡の近くの古墳では、5世紀後半から6世紀初頭に形成された芳賀西部団地遺跡（2）の初期群集墳群、6世紀後半の前方後円墳であるオブ塚古墳（3）（約35m）や7世紀前半の前方後円墳である大日塚古墳（4）（約20m）が知られている。そして、東方の桂川流域では6世紀初頭の築造である前二子古墳（5）（94m）を皮切りに中二子古墳（6）（111m）、後二子古墳（7）（85m）といった大規模な前方後円墳が継続的に築かれ、周辺の小規模古墳も含め大室古墳群を形成する。これに近接する梅木遺跡（8）では「豪族居館」が確認されており、5世紀後半から6世紀前半に機能していたとされる。また、西大室丸山遺跡（9）では5世紀後半頃の祭祀跡が確認されており、赤城山の山体崩壊由来の「流れ山」を利用した巨石祭祀であることから、赤城山を信仰対象としていたと考えられる。

**古墳時代後葉・終末期の古墳** 7世紀初頭の伊勢山古墳（11）（約60m、埴輪なし）を最後に前方後円墳がみられなくなると、それに代わって中規模かつ単独的な円墳や小規模円墳等の群集墳が増加する。本遺跡東の寺沢川流域では、ほっこし塚古墳（37）、桂萱村63号墳（38）、横沢新屋敷遺跡（39）、横沢大塚遺跡（40）、横沢向田遺跡（41）、横沢向山遺跡（42）、やや離れて柴山古墳（19）等で7世紀代の古墳が調査され、広く墓域として利用されていたことがわかる。より広域に見ると、西方の藤沢川流域の芳賀東部団地遺跡群（12）、小坂子油田遺跡（43）、南方の荒砥川流域の谷津遺跡（13）でも7世紀代の古墳が確認されている。東方の神沢川流域では、上横岱古墳群（14）、熊の穴古墳群（15）から一部6世紀まで遡る約50基の群集墳が確認されている。終末期では、截石切組積石室をもつ堀越古墳（16）がよく知られているが、獅噛環頭大刀を出土したとされる大胡39号墳（17）も本遺跡の近傍である。東方の荒砥川右岸では、河原石積石室で方頭大刀を出土した向原古墳（18）、さらに東方の神沢川流域では、截石切組積石室をもち銅鏡を出土した荒砥富士山古墳（21）や截石切組積石室の小幡荷6号墳（20）がある。また、神沢川上流の標高がひと際高い宮城地区には、和開坏・蕨手刀・銅鏡を出土した白山古墳（44）があり、副葬品の組成から見ても典型的な「終末期古墳」といえるものである。

**奈良時代** 赤城山南麓は上野国勢多郡となる。本遺跡の北側隣接にある荻窪倉兼遺跡・同II遺跡（22）では8世紀初頭から10世紀の集落が検出され、周辺の遺跡である荻窪鰐塚遺跡（23）では7世紀後半から9世紀にかけての竪穴建物や掘立柱建物が検出され、鳥取福蔵寺I・II遺跡（25・26）でも7世紀中葉から11世紀までほとんど間断なく建物が存在し、長期間に亘って集落が営まれていた。上西原遺跡（27）は、8世紀後半に建立されたと考えられる寺院址である。溝に囲まれた寺域内から基壇建物跡や掘立柱建物跡が検出され、瓦塔や塑像片、墨書き土器、奈良三彩陶、鉄釘等が出土している。なお、上西原の寺域構成は伊勢崎市十三宝塚遺跡と類似していることが指摘されている。他に仏教関連遺跡として、本遺跡から寺沢川を挟んで東方の大胡地区にある天神風呂遺跡（28）では瓦塔片が出土しており、仏堂等の存在が予想される。この天神風呂遺跡南方の茂木山神II遺跡（29）からは、奈良時代末頃の墨書き土器「大兄万財口」が出土しており、終末期古墳である堀越古墳（16）の存在を踏まえて、山上碑に見える地方豪族「大兄臣」との関係が推定されている（山下2001）。

この時期の特色として、生産関連遺跡の出現が挙げられる。八ヶ峰生産址遺構（30）では製鉄炉や炭窯と共に須恵器窯が1基のみ確認され、坏や蓋以外に上野型短頸壺と言われる特異な器種を生産しているが、壺類を欠いた小型品にほぼ限定される生産品目からは、一般的な須恵器窯とは異なる特注品を焼く窯のような性格が想



起される。他に乙西尾引遺跡（31）でも製鉄炉と炭窯が検出されている。勢多郡では神沢川流域の三ヶ尻西遺跡（10）で東日本最古級の製鉄炉が確認されており、鉄生産は該期において勢多郡の主要産業となっていくようである。製鉄以外では、八ヶ峰の東方至近にある越南部遺跡群の東前沖遺跡（32）で漆痕を有する土器が多数出土しており、漆の生産・製品加工が想定される稀有な遺跡である。

**平安時代** 7世紀後半に集落が初出する荻窪倉兼・同II遺跡（22）と荻窪鰐塚遺跡（23）の竪穴建物が減少する一方、芳賀東部团地遺跡（12）では奈良時代に拡大した集落が平安時代に最盛期を迎えた。本遺跡の周囲には、9世紀前半から11世紀前半の集落を検出する鳥取福寺Ⅰ遺跡（25）で24軒の竪穴建物と、9世紀中頃と思われる精鍊・鍛冶関係の集団工人が存在していたと推測される。また荒砥川と神沢川の間に位置する柳久保遺跡群（33）では、浅間B輕石によって埋もれた水田址が検出された他、漆器碗や祭祀に用いられたと考えられている墨書き土器が出土した。特殊遺物も奈良時代と比べて多く出土するようになり、例えば荒子小学校校庭II遺跡（34）の3号建物跡からは銅印や墨書き土器「院」が出土し、松峯遺跡（35）では奈良時代とみられる奈良三彩小壺や灰釉陶器、匙状鉄製品が出土している。そして、堀越中道遺跡（36）では、「立」の墨書き土器と焼印、把手付鉄鍋、「九字」や五芒星の墨書き土器が出土しており、集落からは礎石や庇を伴う特大竪穴建物が検出される点も注目できる。

※本節は『上京下中峯遺跡』永井ほか 2021「II-3.歴史的環境」をもとに、永井が加除筆して作成したものである。

Tab.1 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	備考	No.	遺跡名	種別	備考
1	荻窪倉兼遺跡	集落	本遺跡	23	長井鰐塚遺跡	集落	奈良・平安時代
2	另西尾引地遺跡	古墳・集落	墳文・古墳時代・中・近世 初期酒造遺跡	24	上京下中峯遺跡	集落	奈良・平安時代
3	オフ塚古墳	古墳	6世紀後半の前方後円墳	25	鳥取福寺Ⅰ遺跡	集落・生産	鐵文・力耕文・奈良・平安時代・中世 精鍊・鍛冶
4	大日塚古墳	古墳	7世紀前半の円墳	26	鳥取福寺Ⅱ遺跡	集落・生産	日文・鐵文・古墳・奈良・平安時代・中世 精鍊・鍛冶
5	前二子古墳	古墳	6世紀初期の前方後円墳	27	上西原遺跡	寺院	奈良・平安時代・仏頂・密教土器・樂書土 器・金剛・玉向・銅鏡等
6	中二子古墳	古墳	6世紀前半の前方後円墳	28	天神川遺跡	集落・寺院	奈良時代 瓦燒
7	後二子古墳	古墳	6世紀後半の前方後円墳	29	荒木山神II遺跡	集落	奈良時代末 樂書土器「大兄万葉」
8	梅木遺跡	聚落・居館	5世紀後半～6世紀前半	30	八ヶ峰生産遺構	集落・生産	圓文・奈良・平安時代・近世 製鐵・農業・安土城・治田法遺跡
9	西大室丸山遺跡	古墳・點跡	5世紀前半	31	乙西尾引遺跡	生産	奈良時代 製鐵・炭窯
10	三ヶ所西遺跡	生産	7世紀後半の製鉄炉	32	東前沖遺跡	生産	奈良時代 漆の生産・加工
11	伊勢山古墳	古墳	7世紀初期の前方後円墳	33	柳久保遺跡群	集落・生産	平安時代 水田・墨書き土器
12	芳賀東部团地遺跡	古墳・集落	古墳・奈良・平安時代	34	荒子小学校校庭II遺跡	集落	平安時代 樂書土器「院」
13	谷原遺跡	古墳・集落	墳文・古墳時代	35	松峯遺跡	古墳	力耕文・奈良・平安時代 奈良・彩小字・灰釉陶器・匙状鉄製品
14	十櫻塚古墳群	古墳	6-7世紀代の古墳群	36	堀越中道遺跡	集落	圓文・大字・奈良・樂書 土器・金剛・玉向・灰釉陶器・匙状鉄製品
15	桃の穴古墳群	古墳	7世紀中期の古墳群	37	ほっこり塙古墳	古墳	7世紀代の円墳
16	福基古墳	古墳	鉢形・石引削植石室	38	新村63号墳	古墳	7世紀代の円墳
17	大河39号墳	古墳	鶴嘴型鋸大刀	39	横井新屋敷遺跡	古墳	7世紀代の円墳群
18	向原古墳	古墳	方頭大刀	40	横井大塚遺跡	古墳	7世紀代の円墳群
19	篠山古墳	古墳	7世紀代の小船形円墳	41	横井山遺跡	古墳	7世紀代の円墳群
20	小幡岡6号墳	古墳	7世紀代の円墳	42	横井山遺跡	古墳	7世紀代の円墳群
21	荒畠富士山古墳	古墳	古末期の人面埴輪(1頭 馬頭可倒面室・圓陶)	43	小坂油田遺跡	古墳	7世紀代の円墳
22	荻窪倉兼・同II遺跡	集落	奈良・平安時代	44	白山古墳	墳墓	斜面削 和田圓頭・薬手千人頭

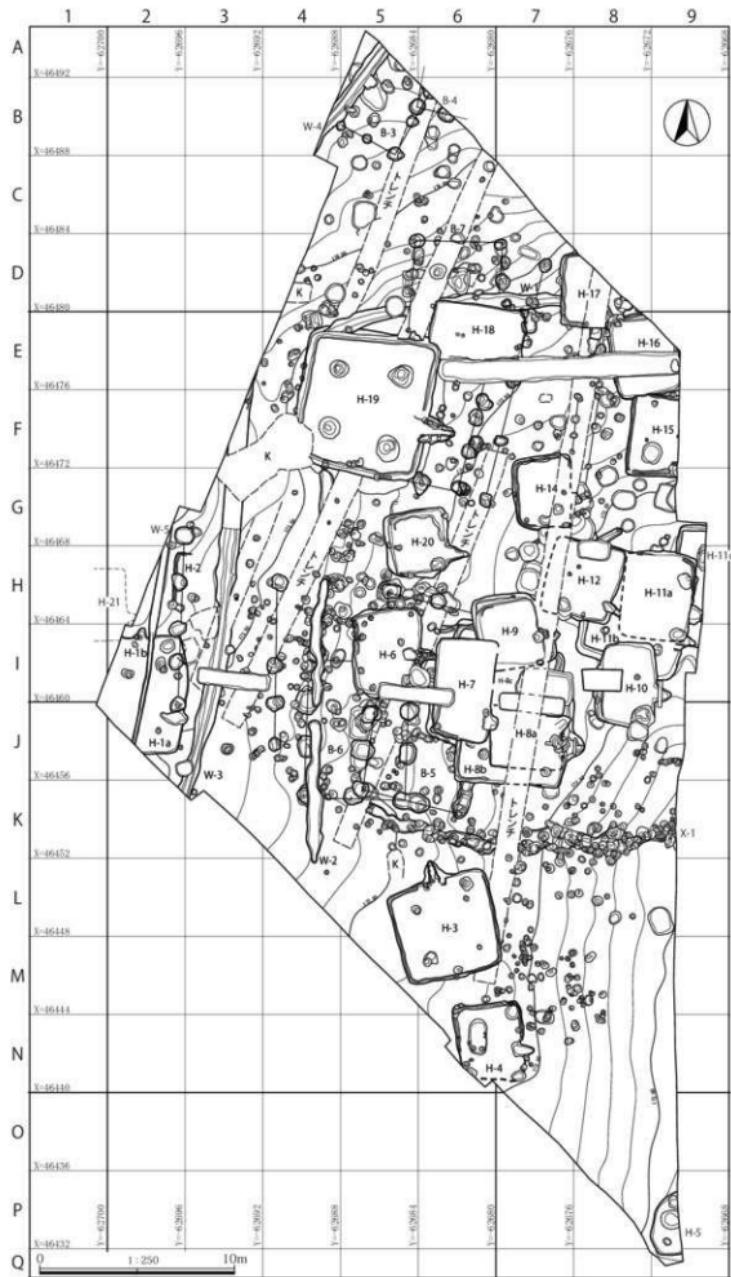


Fig.4 調査区全体図

### III 調査の方針と経過

#### 1. 調査範囲と基本方針

今回の発掘調査は、荻窓受水場配水池の増設予定地全域 1,239m<sup>2</sup>が調査対象となった。北側には平成 13 ~ 14 年度に荻窓公園整備に伴い実施された荻窓倉兼遺跡・荻窓倉兼 II 遺跡の調査区がほぼ接している。なお、今回調査対象地は市有地で、長く資材置場として利用されてきた経緯があり、轍状に硬くしまった土質変質範囲や、廃棄物の投棄された搅乱が見られた。特に土質変質域は遺構確認を困難にしただけでなく、遺構掘下げにも支障を来たす程であった。また、調査区内には今回の調査に先駆けて実施された確認調査のトレンチ痕跡 2 本以外にもう 2 本のトレンチ痕跡が確認された。このトレンチは文化財保護課に記録が現存していないようだが、荻窓倉兼遺跡・同 II 遺跡発掘調査の直前に実施された確認調査であることが、当時の関係者の証言によって明らかとなつた。この旧トレンチは主要遺構を激しく切断しており、遺構・遺物の一部が失われていた反面、今回の調査では重複遺構の前後関係を先行して把握することに好都合であり、確認調査の意味を改めて考えさせられるものであった。調査は想定以上の遺構数から、後半に至って大規模な掘立柱建物跡群や幾重にも巡る柵列が検出され経費面で苦戦した。重要遺構群との評価を得る中で、結果として変更契約を締結している。

#### 2. 調査経過

5 月 18 日 ~ 5 月 25 日、バックホウとクローラーダンプを投入して表土除去を実施。機械掘削を追いかけ、同時に鋤屨による遺構確認を開始した。5 月 27 日から、旧トレンチの排土を開始。激しい重複に迷いながら各遺構の掘下げに移行。遺構番号については、基本的に着手順とした。6 月 18 日には文化財保護課の内部研修を受け入れ。調査期間中にはドローンによる簡易空撮を 3 回実施した。7 月 17 日には文化財保護課監督員による完了確認、その後は残務処理を行なながら埋め戻し、原状復帰した。終盤には作業が日没まで及び、懐中電灯の灯りを頼りに柱穴を掘下げる等。作業員有志の奮闘によって支えられた現地調査であったことをここに明記しておく。

整理作業は現地調査終了と同時に着手、遺物の水洗・注記・接合の後、実測遺物の抽出を行い、その後は遺物実測図化・遺構図面の点検に明け暮れた。特に柱穴となるビットが多く、室内でエレベーション図を作成する作業に多くの時間を費やした。令和 3 年 5 月中旬には印刷業者へ全原稿を引き渡し、同年 5 月 31 日に本書の刊行をもって全業務は完了した。

### IV 基本層序

調査地点は赤城山南麓、標高 180 m の南面斜面に位置し、微視的には東側に南北方向に入る開析谷の影響を受けた東勾配である。風雨の浸食を受けた為か、赤城山南麓では一般的な黒ボク土は残存しておらず、表土下にはソフトロームが露呈してしまう状態ではあったが、遺構自体の保存状態は概ね良好であった。

I 層 現表土層	近年までの耕作土で、粘性・しまりを欠く。
II 層 黒褐色土	埋没谷の堆積土。縄文土器や石器を少量含む。
III 層 黄褐色土	ソフトローム層 細根の侵入によって柔らかい。I 層との層界は直線的な不整合面。
IV 層 黄褐色土	ハードローム層 II 層との層界は波状を呈し、自然搅乱の影響と思われる。
V 層 暗灰褐色土	ローム層中の暗色帶。粘性強い。

Tab.2 積分生物統一観察表(1) 観察(m) 型(0m・斜面・H)(深さ: 30cm以上: 高さ: 30cm以下: 幅さ: 10cm以下)

番号	地名	位置 (位置)	平面形	細部	長軸方向	要	柱穴	切り口/底盤 (位置/底盤)	切り口側 及び底盤 の状態	支柱	支柱材 (支柱)	カマド上端(柱 材)	カマド下端(柱 材)	方木上端(柱 材)
H.1a	古墳東~南東	J.2 (E,F,H)	(A) × (4.5) N.93°E	直・深	—	—	—	X.2に切られた。 柱穴(柱)	柱穴中央 V.2に切られた。 柱穴(柱)	—	—	壁面	壁面	壁面
H.1b	古墳東~南東	J.2 (E,F,H)	(A) × (-)	N.0°E	直・深	(2)	北端面/カマド下	V.2に切られた。 柱穴(柱)	柱穴中央 V.2に切られた。 柱穴(柱)	—	—	壁面	壁面	壁面
H.2	平安山裏~南北	H.2	—	—	直・深	(1)	—	V.2に切られた。 柱穴(柱)	柱穴中央 V.2に切られた。 柱穴(柱)	—	—	壁面	壁面	壁面
H.3	古墳東南	L.6	台形	5.2 × 4.7	N.10°W	直・深	4	北端面/カマド下	柱穴中央 V.2に切られた。 柱穴(柱)	—	—	壁面	壁面	壁面
H.4	平安山裏~南北	N.6	直方形	3.5 × (3.7)	N.88°E	直・深	—	D.2Hに切られた。 柱穴(柱)	柱穴中央 D.2Hに切られた。 柱穴(柱)	—	—	壁面	壁面	壁面
H.5	平安山裏~南北	P.9	不規則	3.6 × (-)	N.42°E	斜・深	—	床土坑2	—	—	—	壁面	壁面	壁面
H.6	平安山裏~南北	I.5	直方形突出	4.5 × 3.5	N.09°E	直・深	—	南端面/カマド下	柱穴中央 柱穴(柱)	—	—	壁面	壁面	壁面
H.7	平安山裏~南北	I.6	直方形	(5) × (3)	N.96°E	直・深	—	H.8H・8e・全剥出。 小剥出(柱)	柱穴中央 柱穴(柱)	—	—	壁面	壁面	壁面
H.8a	平安山裏~南北	J.7	直方形	(3.6) × (3.1)	N.90°E	直・深	—	H.8H・8e・全剥出。 小剥出(柱)	柱穴中央 柱穴(柱)	—	—	壁面	壁面	壁面
H.8b	古墳東~南東	I.6 J.7	直方形	5.5 × 5.6	N.96°E	直・深	4	H.8H・8e・2・3に切 られた。H.8e・B.5 全剥出。小剥出。	柱穴中央 柱穴(柱)	—	—	壁面	壁面	壁面
H.8c	古墳東~南東	I.6 J.7	正方形突出	6.0 × 6.2	N.105°E	直・深	4	H.7に切られた。 B.5・5切出。	柱穴中央 柱穴(柱)	—	—	壁面	壁面	壁面
H.9	平安山裏	I.7	(E,F,H)	3.9 × (3.7)	N.82°E	斜・深	—	H.7に切られた。 B.5・5切出	柱穴中央 柱穴(柱)	—	—	壁面	壁面	壁面

## V 検出された遺構と遺物

今回の発掘調査において確認された遺構は、縄文、古墳後期末～奈良・平安、中世と多岐にわたるが、主体となるのは古墳時代後期末～平安時代にかけての竪穴建物跡と掘立柱建物跡である。詳細は遺構一覧表に譲り、ここでは遺構種別ごとにその概要を説明する。なお、遺構番号のうち竪穴建物跡については、最終的に重複遺構相互の範囲が分離し切れなかったことと、遺物注記や遺構原図の記入の混乱を回避するという意味から、調査時の名称を本書でもそのまま踏襲している。結果として a・b・c の枝番を付した竪穴建物跡が存在しているが、これについては特に建物の建て替え等を意図したものでは無い点を予め断ると共に、お詫びしておきたい。

### ① 竪穴建物跡

26 軒確認され、切り合いが激しく明確な出土遺物が無かった H-13、カマド煙道部先のみ確認し大半は調査区外となる H-21 の 2 軒を除き、古墳時代後期末（7世紀後半）1 軒、古墳時代末（7世紀末）～奈良時代（8世紀中葉）7 軒、平安時代前半（9世紀）7 軒、平安時代中葉～後半（10～11世紀）9 軒という内訳となる。個別遺構の特徴や時期は一覧表に譲り、以下、時期別に遺構の構造特徴を瞥見する。

**古墳時代後期末** H-3 が該当する。竪穴部は概略 5m 四方のやや歪な正方形で、北壁ほぼ中央に竈、竈に向かって右側に貯蔵穴、対角線上に 4 口の柱穴、南壁下の中央に出口の梯子穴と思われる浅いピットが 1 ケ所ある。主軸は座標北に対してやや西に傾くが、これについては地形の勾配に応じたものと思われる。竈は馬蹄形で比較的大きいが単純な構造で、長財廻を 2 個体ソケット状に組み合わせたものを焚口上の構築材としている。

遺物が無く時期不詳の H-13 も、地形の影響を受けたと思われる軸方向で、当該期の可能性が高いように思われるが、東竈という点は H-3 とは異なっている。なお、東竈は関東地方北西部では一般的だが、北竈は本遺跡と近傍の上泉下中峯遺跡（永井ほか 2021）以外では一般的では無い。

**古墳時代末～奈良時代** H-1a・1b・8b・8c・11b・11c・19 が該当する。竪穴部は 5.5 m～7 m の概略正方形だが、H-11b では竈右側がやや張り出して不整形となっている。当該期の竪穴部は全体的に大きく、H-8c・11c・19 は一際大きく「大形竪穴建物」と言えるもので、殊更に深い。柱穴は対角線上に 4 口あり、竪穴部規模に比例して大規模なもので、H-19 では柱穴 1 口に対して 2 ケ所柱の当たりが確認され、柱の据替を思わせる不整形なものであった。竈は判明した 6 軒全てが東竈で、東壁中央よりやや南に寄った位置にあり、大規模で入念かつ複雑な構造である（竈については VII 章にて補足）。貯蔵穴は H-8b で竈右側に浅いものが確認されたが、それ以外では確認できなかった（H-19 では掘方でそれらしいものを確認したが、H-8c では掘方でも確認できなかった）。建物の主軸はほぼ座標東か僅かに南に振れたもので、地形に左右されずに比較的揃った印象を受ける。

他に H-19 では特記すべき特徴として、棚状施設と壁柱穴・壁外柱穴、竈両側の柱穴、竪穴部中央の地床炉とその下の床下土坑がある。棚状施設は四面にあり、遺物の出土状態はそこから転落したかのような状態を示し、単なる壁上端の崩壊とは考えられないものである。巻頭に示した須恵器平瓶と銅製品（仏像片か）もこの出土状態であった。壁柱穴と壁外柱穴は竪穴部南辺から東辺で確認されたもので、竈両側の柱穴も含めて出口から竈にかけて上屋構造が他とは異なっていたことは確かだろう。特に壁外柱穴は周堤帯の外側に対応する可能性が高く、竈両側のそれは竈構造やその使用方法と一体であった可能性が指摘できる。なお、竈両側の柱穴は掘方調査によって確認されたもので、主柱穴で想定される改修時に不要とされた点も興味深い。

**平安時代前半** H-6・9・10・11a・14・16・20 が該当する。竪穴部は 3.5 m × 4 m の概略長方形が主体だが、3.5 m 四方のやや不整な正方形のものもある。全体に竪穴部が小さい点は、当該期の一般的な傾向である。柱穴は明確な主柱穴と言えるようなものは無く、補助柱と思われるピットが数ヶ所確認される程度である。竈は全て東壁の南寄りにあり、竪穴部に似つかわしくない程に大きく、全て粘土によって構築されているようである。貯蔵穴

は竈に向かって右側に比較的しっかりしたものが認められるが、H-9・16には確認できなかった。

**平安時代中葉～後半** H-2・4・5・7・8a・12・15・17・18が該当する。竪穴部は3.5m×4mの概略長方形が基本となるようだが、横長のH-7や縦長のH-18(共に最大幅は約5m)もある。全体に竪穴部は不整形で浅く、H-5は竪穴建物跡であるか否かも疑わしい。柱穴は明確なものは確認できない。竈は基本石組で、全て東壁にあつて南に寄るが、北に寄る場合もある。貯蔵穴は竈に向かって右側に認められるものと、H-7・12のように確認できないものもある。なお、縦長のH-18は床を剥がしたところ3ヶ所の被熱痕が確認された。また、横長のH-7からは床面上で鉄滓小片が確認された。以上の点から、縦横に長い竪穴建物は鍛冶等の工房であった可能性が考えられるが、床下から被熱痕が確認されるH-18を見る限り、恒常的な工房では無かったようである。

#### ② 据立柱建物跡

---

建物として認定できたものは7棟ある。確実に伴う遺物によって時期決定できた建物は無いが、混入遺物は基本的に7世紀末～8世紀で、大半は平安時代の遺構に切られている。従って今回確認された据立柱建物跡は、基本的に奈良時代に属する遺構（一部に平安時代に下る可能性は排除し切れない）と考えられる。以下、全容の明らかとなった1・5・6号据立柱建物跡について、詳述しておきたい。

**1号据立柱建物跡(B-1)**は南北棟の側柱建物で、8世紀中頃の大形竪穴建物跡であるH-19に切られ、8世紀前半代の土師器環(192)が出土している。2×3間を基本とするが、桁行の柱穴はやや位置をずらして新旧があり、建物存続期間内での補修と思われる。廃絶時に柱を抜き取っていることが柱穴の平断面から窺われ、重複するH-19が廃絶の契機であった可能性がある。柱筋は柱痕跡が確認されない柱穴も多く不明だが、梁行と桁行が直角とならない、やや拉げた長方形プランで、柱間も等間ではない。

**5号据立柱建物跡(B-5)**は南北棟2×5間の側柱建物で、床束をもつ。今回調査で最大の建物で、7世紀末のH-8cを切り、8世紀前葉のH-8b、8世紀代のB-6、平安時代前半のH-6に切られる。遺物は8世紀中葉頃の土師器環(193)がP10より出土しているが、抜き取り等によってかなり変形した柱穴であり、重複する別遺構（可能性としてはB-6か）に伴う可能性が高い。柱穴は抜き取りによる変形も顕著だが、少なくとも東側のP5・6は鉄アレイ状に連結した「溝持ち」で、先行するH-8cの存在が影響している可能性がある。なお、同じく東側のP3はH-8cの床硬化面部に相当しているため、その床面を柱穴底面としたことが、明瞭な鈎先痕の範囲によつて判明した。また、柱痕が良く残っていた西側では比較的柱筋は揃っているが、柱間についてはかなり不揃いで、梁行も南北で幅が異なるために北側の幅広な長台形プランであった。床束の柱穴は建物の北寄りにあって、新旧2口、南北梁行中央の柱を結んだライン上にあることから、全面高床であった可能性がある。

**6号据立柱建物跡(B-6)**は南北棟2×3間の側柱建物で、B-5を切り、平安時代前半のH-6に切られる。今回の調査で最も整った建物で、柱筋は通り柱間もほぼ等間、柱穴も隅丸方形である。遺物は比較的多いが、7世紀末～9世紀中葉頃までの幅があることから基本混入と考えられる。

#### ③ 棚跡

---

現地段階で5条、整理段階で1条を認定したが、夥しいピットからはさらに増える可能性が高い。認定したもの全て南北方向であった。据立柱建物に比して浅く不揃いだが、V-6のように深いものもある。遺物は細片ばかりだが、須恵器表片(208)がある。

#### ④ 性格不明遺構

---

X-1として調査を開始、程なく東西方向の棚跡が累積した結果と判明したが、具体的な組み合わせが認定できずに今に至っている。溝状に蛇行する落ち込みを伴っており、垣根のような植栽を伴っていた時期もあるようだが、重複が激しく判然としなかった。遺物は7世紀末の完形土師器環(201)が時期の一端を示すが、他にも9世紀代までの土師器・須恵器片があり、図上復元とは言え須恵器横瓶(205)は注目される。

## ⑤ 溝跡

4 条を確認し、覆土の特徴からは全て中世と考えられる。調査区北寄りを東西方向に走る W-1 と調査区西寄りを南北に走る W-2 は、古代の堅穴建物跡である H-19 上面で不確定だが直角に曲がって連続すると思われ、L 字状の区画溝と思われる。また、調査区西側の W-3 と北西の W-4 は調査区外で連続すると思われ、地形の影響を受けて曲がっていると思われる。調査区西端の W-5 は、調査所見では耕作に関係するものと推定された。これらの溝跡は全て耕地に関係する造作と思われ、集落遺跡以降の本遺跡の土地利用を窺わせる。

## ⑥ 土坑

25 基を確認した。D-1・2・16・25 は東西方向の長方形土坑で、覆土特徴からは近世以降と判断され、畠脇に掘られた芋穴等と推定される。先述の耕地の区画溝と直行・平行の関係にある点から、何れかの溝とは同時存在であった可能性が高い。

D-24 は長方形土坑として調査したが、終盤で斜方向に深くピット状になる部分が確認され、切開して調査したものである。明確な遺物は伴わないが、覆土特徴は先述の X-1 と同質で、從て奈良時代のものと考えられた。

類例として伊勢崎市の佐位郡正倉である三軒屋遺跡で複数確認されている「斜め柱穴を伴う特殊遺構」がある。報告者の出浦崇は斜め幡竿の柱穴であると想定しており（出浦ほか 2013）、ここでも同種の機能を想定する。

なお、三軒屋遺跡の事例は、堅穴部も大きく、柱穴も深いもので 1.5 m もあり、2 基 1 対となるようである。一方で本遺構は全体に規模が小さく、単独の可能性が高いが、基本的な形態・構造はかなり似通っている。三軒屋遺跡の例が郡衙の正倉という公的かつ格式の高い施設に伴うものであることを考えれば無理からぬことと言えるだろう。なお、上記以外は覆土特徴から古代に属すると判断され、完形品の土師質小皿を出土した D-17 を根拠とすれば平安時代中葉～後半と考えられるが、D-22 は平安時代中葉～後半の H-15 下から確認されており、奈良時代に遡る可能性もある。なお、D-22 は円形で白色粘土粒子が堆積しており、甕や桶を据え付けた貯水施設の可能性がある。その他の土坑の平面形態は梢円・隅丸方形と安定しないが、D-3・4・14・23 は大きさ・深さ・堆積状態から見て墓坑の可能性がある。集落廃絶期の土地利用を考えるうえで興味深い。

## ⑦ ピット

調査区内からは計 494 口のピットが検出された。これらは全て覆土特徴から古代のものと判断され、現地調査終盤や整理段階で掘立柱建物跡や柵列跡を構成すると判断されたものもあるが、大半は組み合わない、性格不明とせざるを得ないのが実情である。細かい時期についても、僅かに出土している遺物は基本的に混入と思われるものであり、あまり参考とならない。

ピットは調査区内に満遍なく分布している訳ではなく、纏まる部分があるのが特徴である。1 ケ所は 5・6 号掘立柱建物跡周辺、もう一方は先に斜め幡竿と推定した D-24 周辺である。憶測を重ねれば、前者は掘立柱の建築に伴う足場であった可能性が、後者は幡竿の支柱や、斜めではない幡竿の柱穴である可能性が考えられる。

## ⑧ 特徴的な出土遺物

今回の調査では多量の土師器・須恵器を中心に、多種・多様な遺物が出土している。個々の観察については觀察表に譲り、ここでは特徴的な遺物（群）について取り上げておきたい。

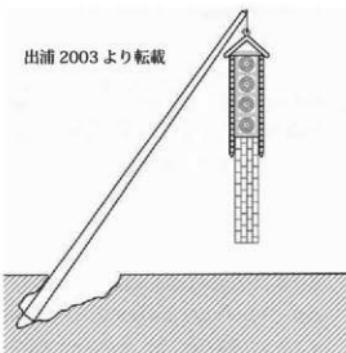


Fig.5 斜め幡竿 模式図

Tab.2 第六建筑群一至表(2)

Tab.3 捩立柱建物跡一覧表

番号	位置(グリッド)	建物規模・構造		柱間		面積(m <sup>2</sup> )	主軸	備考
		横造	向き	桁行×梁行	桁行			
B-1	E-5～G-6	側柱	南北棟	3×2	2.45/2.80/2.10	2.10/2.00	29.93	N-12°-E
B-2	E-8	側柱	南北棟	(2×2)	2.00/1.80	2.30/2.10	—	N-3°-E
B-3	B-5	側柱	南北棟	(2×2)	1.70/1.90	1.50/1.65	—	N-27°-E
B-4	B-5～B-6	側柱	南北棟	(—×1)	—	1.60	—	N-13°-E
B-5	H-5～K-6	側柱	南北棟	5×2	2.25/1.75/2.25/2.10/1.90	3.10/1.80	50.22	N-12°-E 布張り
B-6	I-4～K-5	側柱	南北棟	3×2	2.40/2.45/2.55	2.45/2.45	36.26	N-3°-E
B-7	D-5～E-6	側柱	南北棟	3×2	2.05/1.75/2.40	2.20/2.35	28.21	N-3°-E

註：柱間：桁行を北から、梁行は西から計測

Tab.4 棚列跡一覧表

番号	位置(グリッド)	建物規模・構造		柱間	主軸	備考
		柱穴	向き			
V-1	D-7～G-6	5	南北	P 1 - 2.80 - P 2 - 3.30 - P 3 - 3.25 - P 4 - 3.25 - P 5	N-15°-E	
V-2	G-2～J-2	5	南北	P 1 - 2.40 - P 2 - 2.30 - P 3 - 1.80 - P 4 - 2.00 - P 5	N-2°-E	
V-3	H-4～J-4	5	南北	P 1 - 2.10 - P 2 - 2.10 - P 3 - 2.15 - P 4 - 2.10 - P 5	N-3°-E	
V-4	E-8～G-8	5	南北	P 1 - 2.95 - P 2 - 1.90 - P 3 - 2.05 - P 4 - 2.95 - P 5	N-6°-E	
V-5	F-8～G-7	5	南北	P 1 - 1.25 - P 2 - 0.85 - P 3 - 0.85 - P 4 - 2.15 - P 5	N-8°-E	
V-6	G-5～H-5	4	南北	P 1 - 1.25 - P 2 - 1.55 - P 3 - 1.95 - P 4	N-16°-E	

※柱間は北から計測

Tab.5 溝跡一覧表

番号	位置(グリッド)	時間	主軸方向	幅模	出土遺物	備考
W-1	E-4, E-5, D-5, D-6, D-7, D-8	中近世	N-83°-E	上幅：15.3m 下幅：0m 下幅：3m 深さ：南/0.09, 中央/0.09, 西/0.20	—	P66・D-19・D-21と重複, P43・P46・P67・P73・P74・トレンチ・H-17・H-19・H-18の上半失う。W-2と同一。
W-2	G-4, H-4, I-4, J-4, K-4, L-4	中近世	N-1°-E	上幅：20.1m 下幅：6m 下幅：4m 深さ：北/0.07, 中央/0.05, 西/0.02	—	P280・P320・P324・P338・P360・P361・P391・P462・P464・B-61N・B-62T・B-69S・トレンチと重複, P274・P275・P276・P285・P313・P312・P559・P378・P392・P463・B-6P9・H-19の上半失う。W-1と同一。建中の感あり
W-3	E-3, F-3, G-3, H-3, I-3, J-3, K-3, L-3	中近世	N-10°-E	上幅：11m 下幅：0.2m 下幅：0.1m 深さ：北/0.10, 中央/0.28, 西/0.16	—	P474・D-25と重複, P428の上半失う。W-4と同一か。途中消滅あり
W-4	A-5, B-4, B-5	中近世	N-29°-E	上幅：6.6m 下幅：0.8m 下幅：0.3m 深さ：南/0.29, 中央/0.37, 西/0.29	—	P4・P5・P6と重複, W-3と同一か
W-5	G-2, H-2, I-2, J-2	中近世	N-10°-E	上幅：11.4m 下幅：3m 下幅：1m 深さ：北/0.31, 中央/0.06, 西/0.11	—	H-1の上半失う

( ) は現存値

Tab.6 捕立柱建物跡ピット一覧表

単位(m)

遺構名	柱穴番号	時期	直径 (mm)	長軸	短軸	深さ	平面形状	出土遺物	備考
B-1	P 1	8世紀中頃	E-6	0.60	0.50	0.65	不整方形	B-7P6と重複、H-18によって上半失う、H-18の床面から計測	
	P 2		F-6	0.93	0.67	0.73	不整形	土師器 鉢片・坪片	
	P 3		F-6	0.83	0.70	0.74	不整長方形	土師器 鉢片	
	P 4		F-6	1.30	0.65	0.74	不整形	土師器 鉢片	
	P 5		G-6	1.00	0.70	0.86	不整長方形	土師器 鉢片・坪片	
	P 6		G-6	1.05	0.92	0.74	不整方形	土師器 鉢片・坪片	
	P 7		G-5	(0.56)	(0.13)	0.47	不整形	H-19と重複	
	P 8		F-5	(0.36)	(0.20)	0.17	(円形)	H-19によって上半失う、H-19の床面から計測	
	P 9		F-5	(0.30)	0.30	0.14	(楕円形)	H-19によって上半失う、H-19の床面から計測	
	P10		E-5	0.58	0.42	0.66	不整形	H-19と重複、トレンチ面から計測	
	P11		E-6	0.50	0.45	0.55	不整方形	H-18によって上半失う、H-18の床面から計測	
B-2	P 1	—	E-9	0.26	(0.06)	(0.34)	(円形)	H-16と重複、D-1によって上半失う、H-16の床面から計測	
	P 2		E-8	1.08	0.70	0.29	不整形	H-16と重複、D-1によって上半失う、H-16の床面から計測	
	P 3		E-8	1.00	0.50	0.93	楕円形	P9Bと重複、D-1によって上半失う、トレンチ面から計測	
	P 4		E-8	1.07	0.56	0.72	不整長方形	P9Cと重複、H-17によって上半失う、トレンチ面から計測	
	P 5		D-8	0.55	0.54	0.79	方形	H-17によって上半失う、トレンチ面から計測	
	P 1		B-6	(0.83)	(0.27)	0.50	不整椭円形	旧P17、トレンチによって上半失う	
B-3	P 2	—	B-5	0.61	0.57	0.26	不整方形	旧P15、トレンチによって上半失う	
	P 3		B-5	0.86	0.66	0.16	不整台形	旧P12、トレンチによって上半失う	
	P 4		B-5	0.50	0.45	0.30	方形	旧P13	
	P 5		B-4・5	0.54	0.47	0.27	不整方形	旧P6、W-2と重複	
	P 6		B-6	0.88	(0.44)	0.62	方形	旧P18	
B-5	P 2	8世紀後半	B-5・6	0.83	0.73	0.48	楕円形	旧P16、トレンチによって上半失う	
	P 1		H-7	1.57	(1.08)	0.26	不整形	H-9によって上半失う、H-9の床面から計測	
	P 2		I-6	1.16	1.16	0.26	不整形	H-7、H-9によって上半失う、H-8cの床面から計測	
	P 3		I-6	1.08	0.45	(0.02)	不整形	H-8cと重複、H-7・H-8b・H-8cによって上半失う、H-8cの床面から計測	
	P 4		J-6	0.43	(0.38)	0.10	(不整形)	H-10によって切られる、H-8bによって上半失う、H-8c、H-8bの床面から計測	
	P 5		J-6	0.98	0.93	0.24	方形	H-8bによって上半失う、H-8bの床面から計測	
	P 6		K-6	(2.81)	0.72	1.05	不整長方形	H-8bによって切られる	
	P 7		K-5	(1.27)	0.99	1.05	不整椭円形	旧P48と重複	
	P 8		K-5	1.36	0.79	0.81	不整形	旧P49と重複、トレンチによって上半失う	
	P 9		J-5	1.24	1.11	0.80	方形	P417と重複、トレンチによって上半失う	
	P 10		J-5	1.55	1.11	1.11	不整形	旧P50、壇・塙 土師器 磁・灰化物	P251と重複
	P 11		I-5	1.25	0.90	0.54	不整形	B-6P10と重複、H-6によって上半失う、H-6の床面から計測	
	P 12		I-5	1.06	1.03	0.36	不整形	H-6によって上半失う、H-6の床面から計測	
	P 13		H-5	0.70	0.44	0.89	不整椭円形	旧P46と重複	
	P 14		H-6	0.76	0.75	0.68	不整円形	旧P402、P403と重複、トレンチによって上半失う	
	P 15		I-6	1.03	0.76	0.44	楕円形	D-16・D-17・H-7・H-8cと重複	
B-6	P 1	7世紀末～8世紀中頃	I-5	0.99	0.59	(0.34)	小整椭円形	D-17と重複、H-6・トレンチによって上半失う、D-17の床面から計測	
	P 2		J-5	1.17	0.87	0.52	不整形	P248と重複、トレンチによって破壊	
	P 3		J-5	1.12	0.82	0.53	楕円形	P259・P260と重複	
	P 4		K-5	(1.02)	0.85	0.66	(楕円形)	B-SP7と重複	
	P 5		K-5	(1.05)	0.86	0.65	(楕円形)	B-SP8と重複、トレンチによって上半失う	
	P 6		K-4	1.06	0.29	1.15	不整形	旧P52、壇・塙 土師器 磁・灰化物	W-2と重複
	P 7		J-4	1.10	0.88	0.80	楕円形	P285・W-2と重複	
	P 8		J-4	1.36	1.13	1.02	不整椭円形	P307・P310・W-2と重複	
	P 9		I-4	0.98	0.73	0.71	長方形	旧P47、W-2・B-SP11と重複 土師器 磁・灰・石製品	旧P473、W-2・B-SP11と重複
	P 10		I-5	—	—	—	—	H-6によって上半失う	
B-7	P 1	—	D-7	0.90	0.56	0.59	楕円形	旧P71、P490と重複	
	P 2		D-7	0.65	0.48	0.84	楕円形	旧P69	
	P 3		D-7	1.13	0.82	0.77	楕円形	旧P68、P489と重複	
	P 4		D-7	0.46	0.40	0.40	楕円形	旧P67、W-1と重複	
	P 5		E-7	0.52	0.32	0.09	楕円形	H-18によって上半失う	
	P 6		E-6	0.61	0.57	0.68	不整形	B-1P1・D-1と重複、H-18によって上半失う	
	P 7		E-6	0.71	0.67	0.11	不整椭円形	D-1と重複、H-18によって上半失う	
	P 8		E-5	—	—	—	—	H-19無刀面	
	P 9		E-5	0.23	0.23	0.18	不整円形	旧P51、H-4P16と共に、トレンチによって上半失う	
	P 10		E-5	0.40	0.32	0.30	円形	旧P268、トレンチによって上半失う、W-1と重複	
	P 11		D-5	0.67	0.50	0.47	不整方形	旧P49	
	P 12		D-5	1.04	0.70	0.74	不整形	旧P50、P491と重複	
	P 13		D-5	0.90	0.60	0.49	不整形	旧P32	
	P 14		D-5	0.81	0.66	0.75	円形	旧P31	
	P 15		D-6	0.80	0.55	0.47	不整椭円形	旧P53、トレンチによって上半失う	
	P 16		D-6	0.68	0.48	0.24	楕円形	旧P61	
	P 17		D-6	0.82	0.76	0.25	円形	旧P52、トレンチによって上半失う	
	P 18		D-6	0.26	0.18	(0.30) (0.19 下から)	不整椭円形	旧P62、D-19と重複	
	P 19		D-6	0.70	0.50	0.62	不整椭円形	旧P63、D-19と重複	

Tab.7 棚列跡ピット一覧表

単位(m)

遺構名	柱穴番号	時期	位置 (グリッド)	長軸	短軸	深さ	平面形状	出土遺物	備考
V-1	P 1	—	D-7	0.70	0.62	0.68	不整方形		
	P 2	—	E-7	0.43	0.32	0.54	不整形		
	P 3	—	E-7	(0.70)	(0.40)	(0.75)	不整形		D-1によって切られる
	P 4	—	F-7	0.65	0.47	0.49	不整方形		
	P 5	—	G-6	0.78	0.65	0.61	不整方形		トレンチによって上半失う
V-2	P 1	—	G-2	1.00	0.85	0.30	不整方形		
	P 2	—	H-2	0.88	0.70	0.41	不整椭円形	土師器：甕・环	H-2によって上半失う
	P 3	—	I-2	0.95	0.68	0.35	不整椭円形		H-1と重複
	P 4	—	I-2	0.85	0.68	0.16	椭円形		H-1によって上半失う
	P 5	—	I-2	0.85	0.65	0.39	不整円形		H-1によって上半失う
V-3	P 1	—	H-4	1.05	0.75	0.38	不整形	埴造器：环	P455と重複
	P 2	—	H-4	(0.50)	(0.35)	0.28	椭円形		トレンチによって破壊
	P 3	—	I-4	0.80	0.80	0.29	不整形	土師器：甕	トレンチによって破壊
	P 4	—	I-4	0.90	0.75	0.44	不整椭円形	埴造器：甕・土師器：环	
	P 5	—	J-4	0.70	0.57	0.33	不整円形		
V-4	P 1	—	E-8	0.35	0.29	0.20	不整円形		H1 P85, H-16と重複、トレンチによって破壊
	P 2	—	E-8	0.37	0.30	0.21	不整長方形		H1 P88, トレンチによって破壊
	P 3	—	F-8	0.67	0.30	0.57	不整長方形		H1 P89, P91と重複、トレンチによって破壊
	P 4	—	F-8	0.27	0.23	0.25	不整方形		H1 P90, P91と重複、トレンチによって破壊
	P 5	—	F-8	0.52	0.48	0.66	不整方形		H1 P95
	P 6	—	F-8	0.30	0.25	0.24	椭円形		
	P 7	—	G-8	0.42	0.36	0.59	不整方形		H1 P123, P122・D-10と重複
V-5	P 1	—	F-8	0.50	0.30	0.47	椭円形		H1 P101, トレンチによって上半失う
	P 2	—	F-8	0.40	0.38	0.30	方形		H1 P102, トレンチによって上半失う
	P 3	—	F-8	0.40	0.30	0.46	不整椭円形		H1 P103, トレンチによって上半失う
	P 4	—	F-7	0.27	0.20	0.21	椭円形		
	P 5	—	G-7	0.25	0.20	0.23	椭円形		H1 P120, H-14・トレンチによって上半失う
V-6	P 1	—	G-5	0.54	0.52	1.05	不整椭円形	土師器：甕・甕	H1 F416
	P 2	—	H-5	0.51	0.45	1.07	不整形		H1 P409, F411・F410と重複
	P 3	—	H-4	0.60	0.44	0.98	椭円形		H1 P379
	P 4	—	H-4	0.47	0.62	0.97	椭円形		H1 P466, P361・P364・P365・P465と重複

Tab.8 土坑一覧表

単位(m)

番号	位置 (グリッド)	長軸	短軸	深さ	平面形状	出土遺物	備考
D-1	E-6 ~ E-9	(1.20)	1.24	0.98	長方形	埴造器：土師片瓦の腹・蓋・甕・环・甕・蓋・蓋・环 土師器：甕・环	P111・B-2P1・B-2P2・E-2P3・B-2P6・B-2P7・V-1P3・H-16・H-18・H-19と重複、トレンチによって破壊、穴六等分
D-2	I-1 ~ J-7	3.37	0.90	0.88	長方形	埴造器：环・甕・蓋・土師器：甕・环・羽笛 石	H1 ハ所 深さ (0.34), H8a・H8b・H8c・D-3と重複、羽笛か
D-3	I-7	3.00	1.70	0.77	長方形	埴造器：甕・环・蓋？ 土師器：甕・环	H1 ハ所 深さ (0.63), H8a・H8b・H8c・D-2と重複、羽笛か
D-4	G-8	1.70	1.00	0.38	長方形	埴造器：甕・环・蓋？ 土師器：甕・环	H-13・H-12・H-11bと重複、墓坑か
D-5	H-7	1.33	1.25	0.51	長方形		H-13と重複
D-6	H-7	0.98	0.97	0.16	円形		H-13と重複
D-7	H-7	0.70	0.65	0.11	円形		
D-8	G-7	0.92	0.85	0.22	(椭円形)		H-14と重複
D-9	H-7	1.16	(0.90)	0.28	(椭円形)	埴造器：环・盖？ 土師器：甕・环	H-12と重複
D-10	G-8	2.80	1.20	0.12	不整形	灰陶器：甕	P123 (V-4P7), P122・H-13・H-4と重複、トレンチによって破壊
D-11	G-8	1.08	0.96	0.13	不整長方形	埴造器：甕・环・土師器：甕・环	P1 ハ所 深さ (0.46)
D-12	G-8	1.27	0.97	0.23	長方形	埴造器：甕・环・蓋？ 土師器：甕・环・石	
D-13	G-8	0.70	0.67	0.09	円形		
D-14	G-9	1.37	(1.04)	0.22	不整形	埴造器：蓋？・环・甕・土師器：甕・环	墓坑か
D-15	G-8	0.70	0.65	0.05	円形		
D-16	I-5・6	3.92	0.83	0.36	長方形		D-17・H-6・P249・B-5P15と重複、トレンチによって破壊、穴六等分
D-17	I-5・6	0.99	0.17	0.20	椭円形	埴造器：甕・环・土師器：甕・环・石	D-16・H-6・B-5P15・B-6P1と重複、トレンチによって破壊
D-18	C-5	1.43	1.13	0.16	長方形	土師器：甕・蓋	試掘トレンチ
D-19	D-6	1.40	1.15	0.32	不整方形	埴造器：甕・环・土師器：甕	P62・P63・W-1と重複、トレンチによって上半失う
D-20	D-4	1.04	1.03	0.27	円形	埴造器：环・土師器：甕	トレンチによって上半失う
D-21	D-5	1.11	1.02	0.34	円形		W-1と重複
D-22	F-8・9	1.14	1.02	0.17	不整円形		H-15内、町水施設か
D-23	L-9	1.45	1.12	0.39	椭円形	土師器：甕・甕	墓坑か
D-24	N-7	1.00	0.67	0.33	不整方形	埴造器：环・土師器：甕	P168と同一、P201と重複、井め棒穴か
D-25	I-3	3.37	0.85	0.43	長方形		P321・P322・W-3と重複、トレンチによって破壊、穴六等分
D-26	N-6	1.80	0.90	0.21	長方形		H-4内、P状のくぼみ2ヶ所 深さ (0.25 / 0.38)
D-27	B-5	2.78	1.18	—	不整長方形		P3・P4・W-2と重複、闇文階六

Tab.9 ピット一覧表(1)

局番	出力端子名	回路	初期	現時	平滑化	出力端子	端子
P1	A5	0.000	0.00	0.37	—		
P2	B5	0.07	0.50	0.26	0.26	0.26	0.17 + トランジスタによって上半身
P3	B5	0.75	0.55	0.33	0.33	0.33	0.17 + トランジスタによって上半身
P4	B5	0.68	0.61	0.29	0.29	0.29	0.17 + トランジスタによって上半身
P5	B5	0.76	0.30	0.19	0.19	0.19	0.17 + トランジスタによって上半身
P6	B-4×5	0.54	0.47	0.27	0.27	0.27	0.17 + トランジスタによって上半身
P7	B5	0.47	0.30	0.17	0.17	0.17	0.17 + トランジスタによって上半身
P8	B5	0.32	0.30	0.17	0.17	0.17	0.17 + トランジスタによって上半身
P9	B5	0.35	0.39	0.21	0.21	0.21	0.17 + トランジスタによって上半身
P10	C5	0.82	0.78	0.22	0.22	0.22	0.17 + トランジスタによって上半身
P11	C5	0.43	0.40	0.26	0.26	0.26	0.17 + トランジスタによって上半身
P12	B5	0.98	0.66	0.16	0.16	0.16	0.17 + トランジスタによって上半身
P13	B5	0.95	0.45	0.26	0.26	0.26	0.17 + トランジスタによって上半身
P14	B5	0.74	0.64	0.23	0.23	0.23	0.17 + トランジスタによって上半身
P15	B5	0.6	0.57	0.26	0.26	0.26	0.17 + トランジスタによって上半身
P16	B5	0.3	0.3	0.18	0.18	0.18	0.17 + トランジスタによって上半身
P17	B5	0.60	0.27	0.17	0.17	0.17	0.17 + トランジスタによって上半身
P18	B5	0.66	0.64	0.21	0.21	0.21	0.17 + トランジスタによって上半身
P19	B5	1.25	0.60	0.19	0.19	0.19	0.17 + トランジスタによって上半身
P20	B5	0.60	0.60	0.19	0.19	0.19	0.17 + トランジスタによって上半身
P21	C5	1.30	0.42	0.36	0.36	0.36	0.17 + トランジスタによって上半身
P22	C5	0.67	0.45	0.18	0.18	0.18	0.17 + トランジスタによって上半身
P23	C5	0.65	0.50	0.20	0.20	0.20	0.17 + トランジスタによって上半身
P24	C5	0.34	0.29	0.19	0.19	0.19	0.17 + トランジスタによって上半身
P25	C5	0.74	0.45	0.22	0.22	0.22	0.17 + トランジスタによって上半身
P26	C5	0.45	0.35	0.22	0.22	0.22	0.17 + トランジスタによって上半身
P27	C5	0.46	0.34	0.17	0.17	0.17	0.17 + トランジスタによって上半身
P28	C5	0.37	0.32	0.17	0.17	0.17	0.17 + トランジスタによって上半身
P29	C5	0.31	0.28	0.17	0.17	0.17	0.17 + トランジスタによって上半身
P30	D5	0.25	0.09	0.21	0.21	0.21	トランジスタによって腰
P31	D5	0.82	0.80	0.25	0.25	0.25	トランジスタによって腰
P32	D5	0.96	0.60	0.43	0.43	0.43	トランジスタによって腰
P33	D5	0.29	0.29	0.21	0.21	0.21	トランジスタによって腰
P34	D5	0.80	0.28	0.19	0.19	0.19	トランジスタによって腰
P35	D5	1.30	0.40	0.31	0.31	0.31	トランジスタによって腰
P36	D5	0.30	0.30	0.14	0.14	0.14	トランジスタによって腰
P37	D5	0.26	0.26	0.25	0.25	0.25	トランジスタによって腰
P38	D5	0.33	0.32	0.27	0.27	0.27	トランジスタによって腰
P39	D5	0.26	0.14	0.10	—	—	トランジスタによって腰
P40	D5	0.30	0.30	0.16	0.16	0.16	トランジスタによって腰
P41	E4	0.93	0.90	0.34	0.34	0.34	トランジスタによって腰
P42	E4	1.02	0.64	0.85	0.85	0.85	トランジスタによって腰
P43	E5	0.40	0.35	0.24	0.24	0.24	トランジスタによって腰
P44	E5	0.28	0.24	0.17	0.17	0.17	トランジスタによって腰
P45	E5	0.27	0.27	0.42	0.42	0.42	トランジスタによって腰
P46	E5	0.47	0.35	0.30	0.30	0.30	トランジスタによって腰
P47	D5	0.32	0.32	0.51	0.51	0.51	トランジスタによって腰
P48	D5	0.36	0.24	0.11	0.11	0.11	トランジスタによって腰
P49	D5	0.62	0.50	0.47	0.47	0.47	トランジスタによって腰
P50	D5	1.06	0.70	0.74	0.74	0.74	トランジスタによって腰
P51	E5	0.23	0.18	0.18	0.18	0.18	トランジスタによって腰
P52	D5	0.80	0.26	0.25	0.25	0.25	トランジスタによって腰
P53	D5	0.49	0.50	0.41	0.41	0.41	トランジスタによって腰
P54	D5	0.35	0.23	0.07	0.07	0.07	トランジスタによって腰
P55	C5	0.32	0.26	0.31	0.31	0.31	トランジスタによって腰
P56	C5	0.19	0.14	0.11	0.11	0.11	トランジスタによって腰
P57	C5	0.30	0.22	0.22	0.22	0.22	トランジスタによって腰
P58	D5	0.40	0.34	0.21	0.21	0.21	トランジスタによって腰
P59	D5	0.40	0.23	0.09	0.09	0.09	トランジスタによって腰
P60	D5	0.30	0.27	0.12	0.12	0.12	トランジスタによって腰
P61	D5	0.68	0.48	0.24	0.24	0.24	トランジスタによって腰
P62	D5	0.26	0.18	0.18	0.18	0.18	トランジスタによって腰
P63	D5	0.70	0.50	0.62	0.62	0.62	トランジスタによって腰
P64	D5	0.40	0.35	0.15	0.15	0.15	トランジスタによって腰
P65	D5	0.36	0.24	0.15	0.15	0.15	トランジスタによって腰
P66	D5	0.30	0.30	0.17	0.17	0.17	トランジスタによって腰
P67	D5	0.46	0.40	0.40	0.40	0.40	トランジスタによって腰
P68	D5	1.13	0.82	0.77	0.77	0.77	トランジスタによって腰
P69	D5	0.65	0.48	0.64	0.64	0.64	トランジスタによって腰
P70	D5	0.42	0.40	0.14	0.14	0.14	トランジスタによって腰
P71	D5	0.80	0.55	0.55	0.55	0.55	トランジスタによって腰
P72	D5	0.50	0.44	0.22	0.22	0.22	トランジスタによって腰
P73	D5	0.30	0.47	0.31	0.31	0.31	トランジスタによって腰
P74	D5	0.27	0.22	0.45	0.45	0.45	トランジスタによって腰
P75	E7	1.07	0.64	0.36	0.36	0.36	トランジスタによって腰
P76	E7	1.32	0.20	0.33	0.33	0.33	トランジスタによって腰
P77	E7	0.23	0.15	0.15	0.15	0.15	トランジスタによって腰
P78	E7	0.46	0.37	0.44	0.44	0.44	トランジスタによって腰
P79	E7	0.60	0.55	0.57	0.57	0.57	トランジスタによって腰
P80	D5	0.30	0.10	0.09	0.09	0.09	トランジスタによって腰
P81	D5	0.20	0.09	0.35	0.35	0.35	トランジスタによって腰
P82	E7	0.32	0.25	0.31	0.31	0.31	トランジスタによって腰
P83	F7	0.27	0.27	0.27	0.27	0.27	トランジスタによって腰
P84	F7	0.42	0.27	0.12	0.12	0.12	トランジスタによって腰
P85	F7	0.35	0.29	0.20	0.20	0.20	トランジスタによって腰
P86	F7	0.67	0.60	0.18	0.18	0.18	トランジスタによって腰
P87	F7	0.35	0.35	0.25	0.25	0.25	トランジスタによって腰
P88	F7	0.46	0.37	0.30	0.30	0.30	トランジスタによって腰
P89	F7	0.67	0.67	0.30	0.30	0.30	トランジスタによって腰
P90	F7	0.27	0.27	0.25	0.25	0.25	トランジスタによって腰
P91	F7	0.78	0.77	0.29	0.29	0.29	トランジスタによって腰
P92	F7	0.55	0.47	0.40	0.40	0.40	トランジスタによって腰
P93	F7	0.36	0.30	0.21	0.21	0.21	トランジスタによって腰
P94	F7	0.40	0.42	0.26	0.26	0.26	トランジスタによって腰
P95	F7	0.32	0.49	0.65	0.65	0.65	トランジスタによって腰
P96	F7	0.64	0.59	0.24	0.24	0.24	トランジスタによって腰
P97	F7	0.30	0.30	0.26	0.26	0.26	トランジスタによって腰
P98	F7	0.34	0.27	0.21	0.21	0.21	トランジスタによって腰
P99	F7	0.20	0.20	0.03	—	—	トランジスタによって腰
P100	F7	0.23	0.17	0.17	0.17	0.17	トランジスタによって腰
P101	F7	0.4	0.40	0.36	0.36	0.36	トランジスタによって腰
P102	F7	0.40	0.36	0.30	0.30	0.30	トランジスタによって腰
P103	F7	0.45	0.41	0.13	0.13	0.13	トランジスタによって腰
P111	E7	0.55	0.31	0.08	0.08	0.08	トランジスタによって腰
P112	E7	0.22	0.18	0.06	0.06	0.06	トランジスタによって腰
P113	E7	0.70	0.58	0.13	0.13	0.13	トランジスタによって腰
P114	E7	0.44	0.42	0.15	0.15	0.15	トランジスタによって腰
P115	E7	0.35	0.35	0.16	0.16	0.16	トランジスタによって腰
P116	E7	0.40	0.45	0.24	0.24	0.24	トランジスタによって腰
P117	E7	0.43	0.36	0.22	0.22	0.22	トランジスタによって腰
P118	E7	0.49	0.28	0.22	0.22	0.22	トランジスタによって腰
P119	E7	0.30	0.32	0.05	0.05	0.05	トランジスタによって腰
P120	E7	0.25	0.20	0.03	0.03	0.03	トランジスタによって腰
P121	E7	0.42	0.27	0.11	0.11	0.11	トランジスタによって腰
P122	E7	0.45	0.25	0.30	0.30	0.30	トランジスタによって腰
P123	E7	0.42	0.26	0.09	0.09	0.09	トランジスタによって腰
P124	H7	0.67	0.30	0.11	0.11	0.11	トランジスタによって腰
P125	H7	0.46	0.42	0.15	0.15	0.15	トランジスタによって腰
P126	H7	0.28	0.28	0.22	0.22	0.22	トランジスタによって腰
P127	H8	0.26	0.26	0.26	0.26	0.26	トランジスタによって腰
P128	H8	0.28	0.28	0.15	0.15	0.15	トランジスタによって腰
P129	H8	0.32	0.32	0.30	0.30	0.30	トランジスタによって腰
P130	H8	0.32	0.32	0.27	0.27	0.27	トランジスタによって腰
P131	H8	1.0	0.79	0.50	0.51	0.51	トランジスタによって腰
P132	H8	1.0	1.27	0.27	0.28	0.28	トランジスタによって腰
P133	H8	1.0	0.32	0.27	0.27	0.27	トランジスタによって腰
P134	H8	1.0	0.35	0.50	0.31	0.31	トランジスタによって腰
P135	H8	0.0	0.32	0.0	0.24	0.24	トランジスタによって腰
P140	I4	0.9	0.22	0.19	0.19	0.19	トランジスタによって腰
P141	I4	0.9	0.37	0.31	0.30	0.30	トランジスタによって腰
P142	I4	0.9	0.35	0.25	0.25	0.25	トランジスタによって腰
P143	I4	0.9	0.24	0.21	0.21	0.21	トランジスタによって腰
P144	I4	0.9	0.25	0.23	0.23	0.23	トランジスタによって腰
P145	I4	0.9	0.30	0.2	0.2	0.2	トランジスタによって腰
P146	I4	0.9	0.34	0.3	0.3	0.3	トランジスタによって腰
P147	I4	0.9	0.30	0.28	0.28	0.28	トランジスタによって腰
P148	I4	0.9	0.25	0.24	0.24	0.24	トランジスタによって腰
P149	I4	0.9	0.24	0.09	0.11	0.11	トランジスタによって腰
P150	I4	0.8	0.40	0.30	0.31	0.31	トランジスタによって腰
P151	I4	0.8	0.28	0.28	0.28	0.28	トランジスタによって腰
P152	I4	0.8	0.32	0.27	0.34	0.34	トランジスタによって腰
P153	I4	0.8	0.33	0.37	0.37	0.37	トランジスタによって腰
P154	I4	0.8	0.35	0.30	0.31	0.31	トランジスタによって腰
P155	I4	0.8	0.29	0.29	0.34	0.34	トランジスタによって腰
P156	I4	0.8	0.29	0.29	0.11	0.11	トランジスタによって腰
P157	I4	0.8	0.25	0.25	0.26	0.26	トランジスタによって腰
P158	I4	0.8	0.28	0.33	0.33	0.33	トランジスタによって腰
P159	I4	0.8	0.25	0.25	0.26	0.26	トランジスタによって腰
P160	I4	0.8	0.32	0.30	0.32	0.32	トランジスタによって腰
P161	I4	0.7	0.32	0.27	0.31	0.31	トランジスタによって腰
P162	I4	0.7	0.27	0.27	0.15	0.15	トランジスタによって腰
P163	I4	0.7	0.37	0.21	0.40	0.40	トランジスタによって腰
P164	I4	0.7	0.37	0.29	0.29	0.29	トランジスタによって腰
P165	I4	0.8	0.37	0.30	0.04	0.04	トランジスタによって腰

Tab.10 ビット一覧表(2)

Table 11 ピット一覧表(3)

番号	位置	回転	初期	現在	平均値	出し物語	端子
P-332	L5	0.38	0.37	0.30	0.30	不整形	自車によって上半身L
P-333	H5	0.25	0.25	0.13	0.13	内凹	自車によって上半身L
P-334	H5	0.25	0.24	0.21	0.21	内凹	自車によって上半身L
P-335	L5	0.36	0.31	0.25	0.25	不整形	自車によって上半身L
P-336	G2	0.45	0.36	0.36	0.36	不整形	
P-337	G3	0.55	0.48	0.29	0.29	不整形	
P-338	H3	0.39	0.30	0.14	0.14	内凹	P-337と並列、H2と並列
P-339	H2	0.46	0.45	0.36	0.36	不整形	P-408と並列、H2と並列
P-340	G3	0.35	0.30	0.49	0.49	不整形	トレンジによって上半身L
P-341	H3	0.41	0.40	0.59	0.59	内凹	トレンジによって上半身L
P-342	H2	0.26	0.20	0.20	0.20	不整形	
P-343	H2	0.23	0.18	0.18	0.18	不整形	トレンジによって上半身L
P-344	H2	0.38	0.34	0.17	0.17	不整形	
P-345	H3	0.43	0.42	0.45	0.45	内凹	
P-346	H5	0.25	0.27	0.11	0.11	内凹	
P-347	H5	0.26	0.27	0.37	0.37	内凹	
P-348	H2	0.20	0.17	0.26	0.26	不整形	
P-349	H3	0.35	0.30	0.22	0.22	不整形	
P-350	I3	0.26	0.22	0.22	0.22	内凹	トレンジによって上半身L
P-351	I3	0.30	0.37	0.10	0.10	不整形	
P-352	I3	0.29	0.26	0.14	0.14	不整形	トレンジによって頭部
P-353	I3	0.24	0.22	0.08	0.08	内凹	
P-354	I3	0.35	0.24	0.19	0.19	不整形	
P-355	I3	0.35	0.47	0.11	0.11	不整形	W3と並列
P-356	I3	0.28	0.28	0.10	0.10	内凹	
P-357	I4	0.28	0.25	0.26	0.26	内凹	
P-358	H4	0.54	0.55	0.47	0.47	不整形	トレンジと並列、W2と並列
P-359	H4	0.40	0.35	0.72	0.72	不整形	P-263と並列、W2と並列で上半身L
P-360	I4	0.57	0.40	0.31	0.31	不整形	トレンジと並列、W2と並列
P-361	I4	0.50	0.43	0.28	0.28	不整形	P-360と並列、P-359と並列
P-362	I4	0.36	0.31	0.13	0.13	内凹	
P-363	H5	0.45	0.47	0.24	0.24	不整形	トレンジと並列、H2と並列
P-364	H4	0.28	0.22	0.05	0.05	内凹	トレンジと並列、H2と並列
P-365	H4	0.35	0.22	1.02	1.02	不整形	P-263と並列、P-360と並列で上半身L
P-366	H4	0.29	0.29	0.09	0.09	内凹	トレンジと並列、H2と並列
P-367	H4	0.46	0.42	0.18	0.18	相内凹	トレンジと並列、H2と並列
P-368	I5	0.26	0.20	0.23	0.23	内凹	トレンジによって上半身L
P-369	C6	0.36	0.36	0.27	0.27	内凹	トレンジによって上半身L
P-370						矢	
P-371	B2	0.55	1.07	0.11	0.11	丸	
P-372						矢	
P-373	H5	0.58	0.53	0.10	0.10	内凹	
P-374	H5	0.43	0.29	0.22	0.22	不整形	W3と並列、H2と並列
P-375	H5	0.55	0.48	0.16	0.16	内凹	P-374と並列、H2と並列
P-376	H5	0.55	0.47	0.20	0.20	内凹	
P-377	H5	0.45	0.48	0.16	0.16	不整形	H2と並列
P-378	H4	0.64	0.45	0.28	0.28	内凹	P-376と並列、W2と並列で上半身L
P-379	H4	0.60	0.44	0.08	0.08	相内凹	トレンジと並列、H2と並列
P-380	H5	0.38	0.28	0.17	0.17	内凹	
P-381						矢	
P-382						矢	
P-383						矢	
P-384						矢	
P-385						矢	
P-386						矢	
P-387						矢	
P-388						矢	
P-389						矢	
P-390						矢	
P-391	H4	0.38	0.38	0.15	0.15	不整形	P-252とW2と並列
P-392	H4	0.36	0.36	0.38	0.38	不整形	P-393とW1と並列で上半身L
P-393	H4	0.25	0.24	0.33	0.33	内凹	
P-394	H5	0.35	0.31	0.02	0.02	内凹	
P-395	H5	0.30	0.26	0.36	0.36	内凹	トレンジと並列、H2と並列
P-396	H5	0.36	0.32	0.19	0.19	相内凹	W3と並列、H2と並列
P-397	H5	0.37	0.34	0.04	0.04	相内凹	H2と並列
P-398	H6	0.26	0.26	0.39	0.39	内凹	H2と並列
P-399	H6	0.73	0.48	0.07	0.07	不整形	P-400と並列
P-400	H6	0.09	0.50	0.23	0.23	不整形	P-399と並列、トレンジによって上半身L
P-401	H6	0.54	0.50	0.26	0.26	不整形	P-400と並列、トレンジによって上半身L
P-402	H6	0.76	0.75	0.68	0.68	内凹	P-399と並列、トレンジによって上半身L
P-403	H6	1.23	0.83	0.27	0.27	相内凹	P-399と並列、トレンジによって上半身L
P-404	I6	0.44	0.43	0.12	0.12	相内凹	トレンジによって上半身L
P-405	I6	0.36	0.25	0.14	0.14	相内凹	P-404と並列、トレンジによって上半身L
P-406	I6	0.39	0.25	0.26	0.26	内凹	W3と並列
P-407	G5	0.40	0.43	0.15	0.15	相内凹	
P-408	G5	0.30	0.19	0.21	0.21	半球形	W3と並列
P-409	H5	0.51	0.43	1.07	1.07	不整形	P-410とP-411と並列
P-410	H5	0.40	0.40	0.23	0.23	相内凹	P-409とP-411と並列
P-411	H5	0.32	0.16	0.63	0.63	不整形	P-409とP-410と並列
P-412	H4	0.53	0.51	0.36	0.36	相内凹	P-409とP-413と並列
P-413	H4	0.34	0.26	0.35	0.35	相内凹	P-412と並列

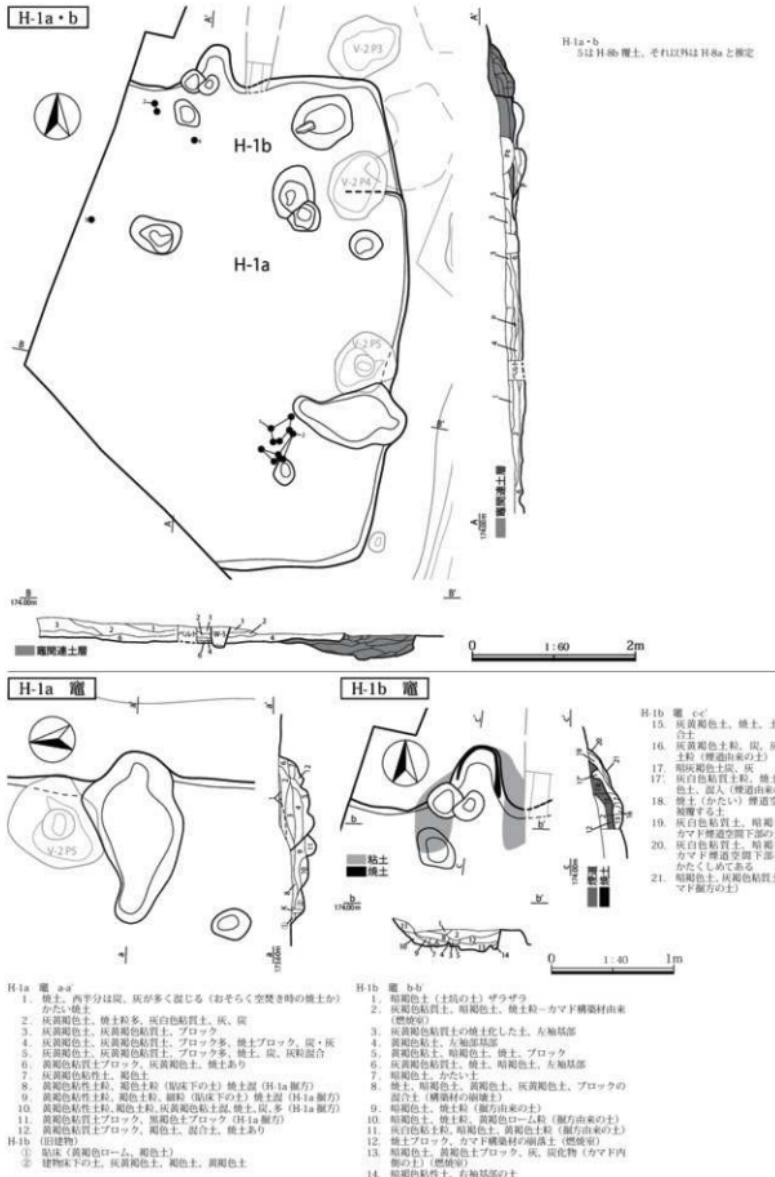
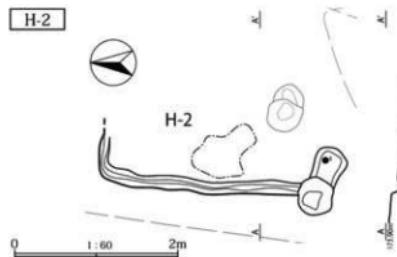
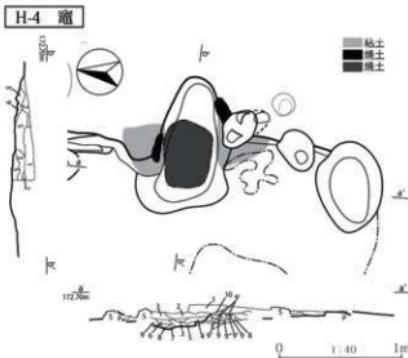
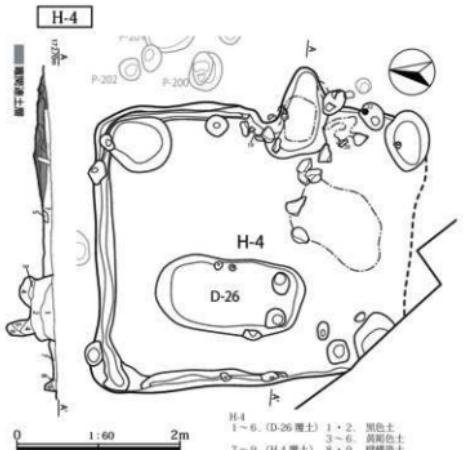


Fig.6 1号竪穴建物跡

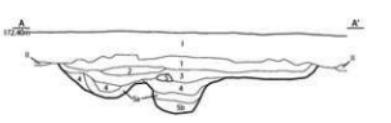
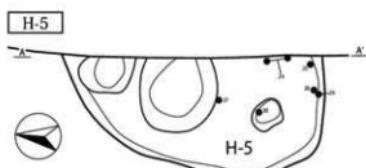


H-2 全景(北から)



H-4 窟 調査状況(東から)

- H-4 窟**
- 暗褐色土、バミス多量
  - 暗褐色土、バミス少、斑土粒、灰黃褐色土
  - 黃褐色土ブロック、礫土、灰黃褐色土
  - 灰褐色土、バミス少
  - 灰白色粘土の焼成した地土ブロック、灰黃褐色土
  - 5層にバミス多く含む
  - 灰、炭化物の層
  - 灰黃褐色土の焼成した層
  - 灰褐色土、灰褐色土(右側部、互層にたいたい層)
  - 黄褐色土、灰褐色土、灰黃褐色土ブロック、灰、炭屑
  - 黄褐色土、褐褐色土の混合土、9と10層にて産ねた土
  - 灰黃褐色土、黄褐色土の混合土(9~9'は軸の基礎を作る土)
  - 灰黃褐色土、礫土、バミス(充填土)



- H-5**
- 黒褐色土
  3. 灰黄褐色土
  4. 黑褐色土
  5. 灰黄褐色土、ローム粒子

Fig.7 2・4・5号竪穴建物跡

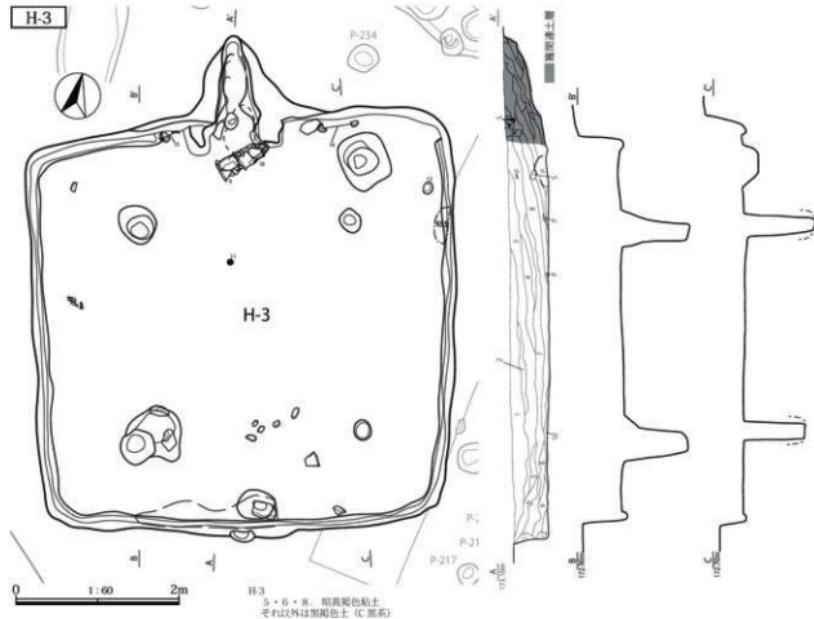
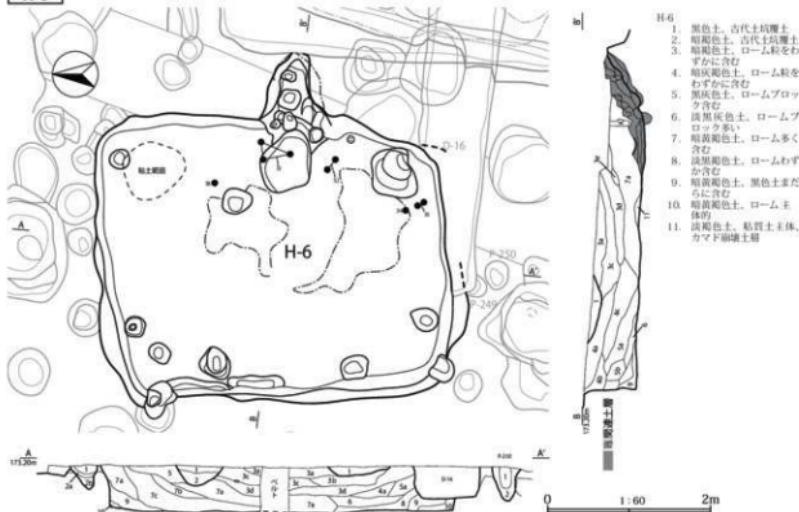
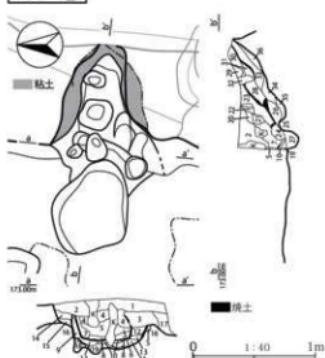


Fig.8 3号竖穴建物跡

H-6



H-6 窟



H-6 窟検出状況（西から）

H-6

1. 黒色土、古代土壌層土
2. 明褐色土、古代土壌層土
3. 明褐色土、ローム粒をわずかに含む
4. 淡灰褐色土、ローム粒を含む
5. 黒灰褐色土、ロームブロック含む
6. 淡黒褐色土、ロームブロック含む
7. 淡黃褐色土、ローム多く含む
8. 淡黒褐色土、ロームわずか含む
9. 明黃褐色土、黒色土まだら
10. 明褐色土、ローム主体的
11. 淡褐色土、粘質土主体、カマド前壁部



H-6 窟 土層断面（南西から）



H-6 窟 完掘（西から）

1. 明褐色土、バミス、灰黃褐色土-土坑の土?
- or 廃物坑の土?
2. 明褐色土、明褐色土、灰黃褐色土混合土-カマド火曲の土
3. 明褐色土、灰黃褐色土、礁土ブロック、右斜上部の土
4. 淡黄褐色土、暗褐色土、礁土ブロック
5. 灰黃褐色土、灰白色土、礁土、カマド構築材の崩落土
6. 灰黃褐色土、灰白色土、暗褐色土、カマド構築材の崩落土
7. 淡白色粘土土、右、暗褐色土、カマド構築材の崩落土
8. 黄褐色土、白色土ロック、灰、炭化物、火床直上の土、下部に土
9. 淡褐色土、灰、炭化物、左側壁内側の土
10. 明褐色土、灰、炭化物、カマド前壁部の土
11. 煤土、灰黃褐色土-粘土、下部に炭化物層。空気吹き出しがある
12. 灰褐色土、礁土、灰、灰、充填土
13. 淡褐色土、礁土、カマド土
14. 明褐色土、灰褐色土、右側赤泥
15. 从黄褐色土、右側赤泥
16. 黄褐色土、明褐色土ブロック、礁基部の土
17. 黄褐色土、礁土
18. 灰黃褐色土、壁土
19. 灰黃褐色土、礁土-支撐か
20. 脆褐色土、白色土、礁土（カマド装飾の土）
21. 淡褐色土、礁土
22. 淡褐色土、礁土（カマド被覆の土）
23. 灰黃褐色土の焼成化した土（煙道まわりの土）
24. 明褐色土（礁土、崩落土）
25. 淡褐色土
26. 灰黃褐色土（埋没の土）
27. 灰黃褐色土
28. 煤土、灰黃褐色土（煙道上部）
29. 从淡褐色土（礁土を含む）（煙道上部）
30. 从淡褐色土（礁土を含む）（煙道まわりの土）
31. 从灰褐色土、黃褐色土（煙道まわりの土）
32. 硫土ブロックの多い灰褐色土（煙道まわりの土）
33. 黄褐色粘土土、上面燒土化（側方充填土、燃えき特有の土）
34. 从灰褐色粘土土ロック、灰褐色土ブロック、崩方の土
35. 灰黃褐色粘土土ブロック、灰褐色土ブロック
36. 灰黃褐色土、礁土（側方の土、充填土）

Fig.9 6号竖穴建物跡

H-7・8a 及び D-3

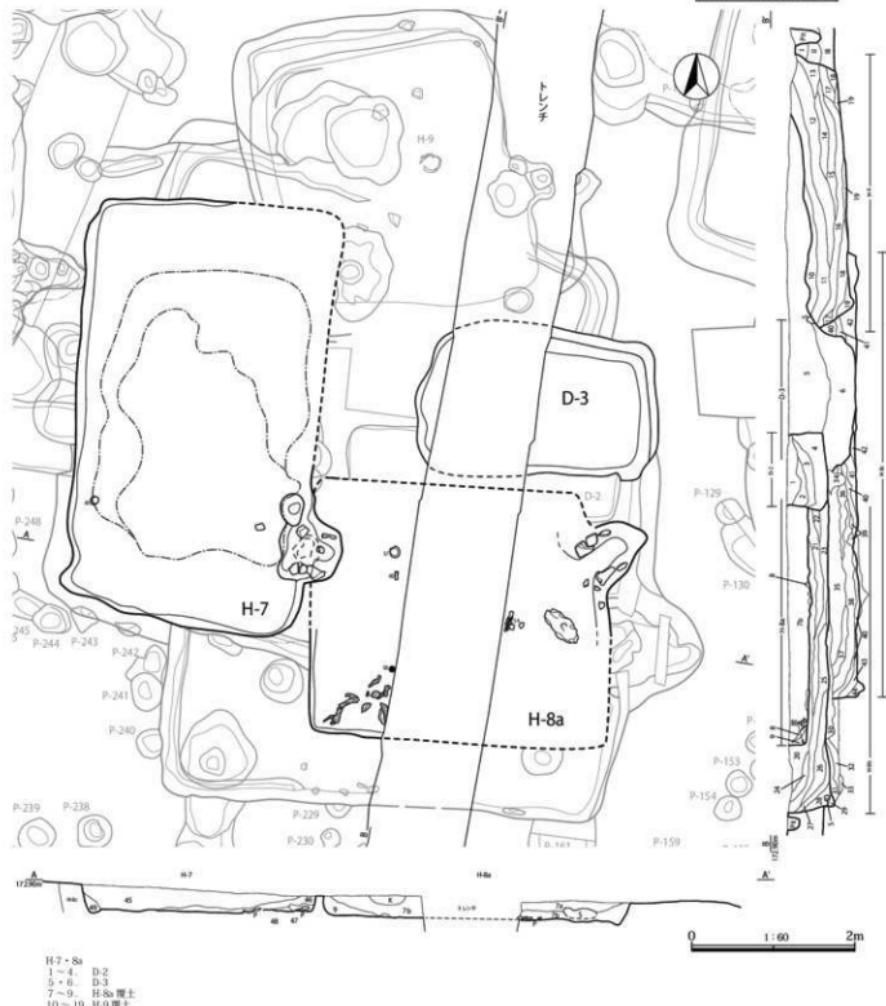
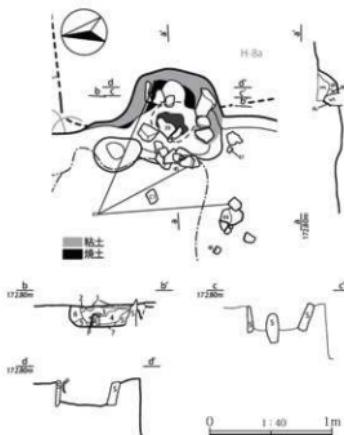


Fig.10 7・8a号窓穴建物跡及び3号土坑

H-7 窟

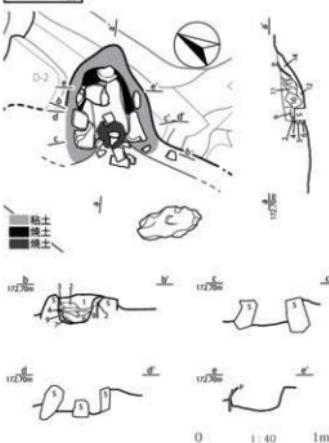


H-7 窟（南から）



H-7 窟 完掘（西から）

H-8a 窟



H-8a 窟 遺物出土状況



H-8a 窟

1. 嵌土板、黄褐色、埴土とカマド被覆土
2. 嵌土板、ローブル。被覆土、始掘覆土
3. 被覆土
4. 3、4の褐色土
5. 灰褐色、埴土多
6. 灰褐色土、埴土多、灰
7. 灰褐
8. 灰褐色土、埴土、灰化物、かたくしまる
9. 灰黄褐色粘土土、埴土ブロック（支廊の土）
10. 灰白色粘土。黄褐色粘土。土灰（火灰）
11. 灰褐色土。灰褐色土。埴土（火灰土）（褐色土多）
12. 灰褐色土、褐色土、埴土、灰积、煙道空間の埴土土
13. 灰黄褐色土、埴土、煙道空間の埴土（煙道灰土）
14. 灰白色粘土。黄褐色粘土ブロック。埴土（灰灰）

Fig.11 7・8a号窓穴建物跡

H-8b・9

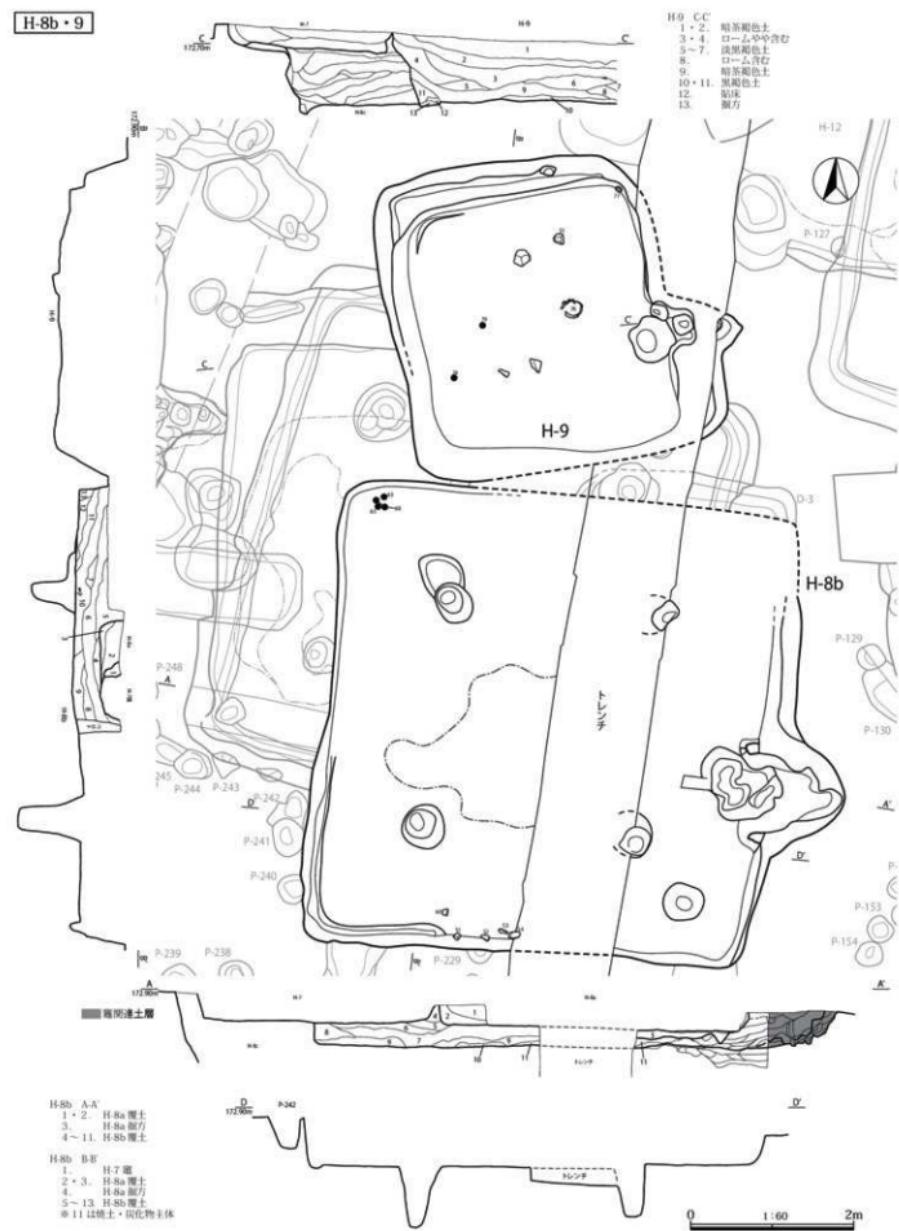
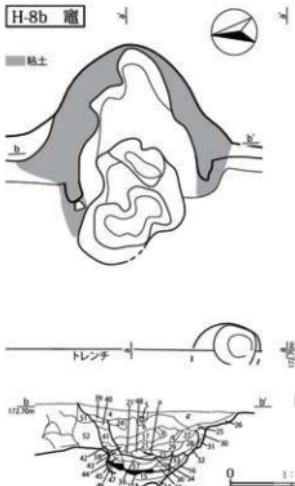


Fig.12 8b・9号竪穴建物跡



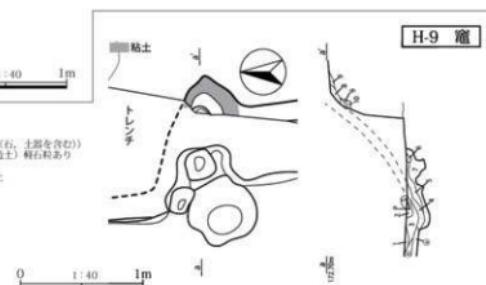
47. 塗覆色土。空焚き底面  
48. 塗覆色土。底面付近。壁面付近。  
49. 地上部にした塗覆色土。(埴土塊ブリッジを構成する土)  
50. 壱土ブロックよりの塗覆色土。(隙道空間保持材-埴土塊ブリッジの一部)  
51. 塗覆色活性土。埴土。塗色活性土。(埴土部及び埴方舟土)  
52. 塗色活性土主体の土。塗色土を含む(埴土部及び埴方舟土)



- H-9 窓  
1. 塗覆色土, 塗覆色土ブロック  
2. 明灰褐色粘土, 壱土ブロック (煙突室と煙道部の端の天井部 (石, 土部を含む))  
3. 帆船形土, 明灰褐色粘土ブロック, 壱土ブロック (カマド構造土) 軸石あり  
4. 灰褐色 (埴土を含む)  
5. 上部に塗化物あり (煙突部, 被熱部) 粘性のつよい灰褐色土  
6. 塗覆色土, 壱土, 壱の混合土 (隙道空間の土)  
7. 灰褐色土, 壱土ブロック, ロームブロック, 開方の土  
8. 下面に熱石, 塗化物あり (煙道, 下面)  
9. 灰褐色土, 開方の土  
10. ロームの底付土 (煙道, 燥熱の土)  
11. 塗覆色土, 壱土 (空焚きの土)  
12. 壱, 灰褐色土 (空焚きの土)  
13. 塗覆色土, 壱土, 壱の混合土, 壱, 空焚き床面 (空焚きの土)  
14. 塗化した粘土, 空焚き壁面 (空焚きの土)  
15. 黄褐色の土 (空焚きの土)

16. 黑褐色土, 壱, 壱, 壱土 (空焚き時の土)  
17. 矢番  
18. 壱  
19. 壱  
20. 壱  
21. 壱  
22. 壱  
23. 壱  
24. 壱  
25. 壱  
26. 壱  
27. 壱  
28. 壱  
29. 黑褐色土, 壱, 壱  
30. 壱  
31. 壱  
32. 壱  
33. 壱  
34. 壱

16. 黑褐色土, 壱, 壱, 壱土 (空焚きの土)  
17. 矢番  
18. 壱  
19. 壱  
20. 壱  
21. 壱  
22. 壱  
23. 壱  
24. 壱  
25. 壱  
26. 壱  
27. 壱  
28. 壱  
29. 黑褐色土, 壱, 壱  
30. 壱  
31. 壱  
32. 壱  
33. 壱  
34. 壱



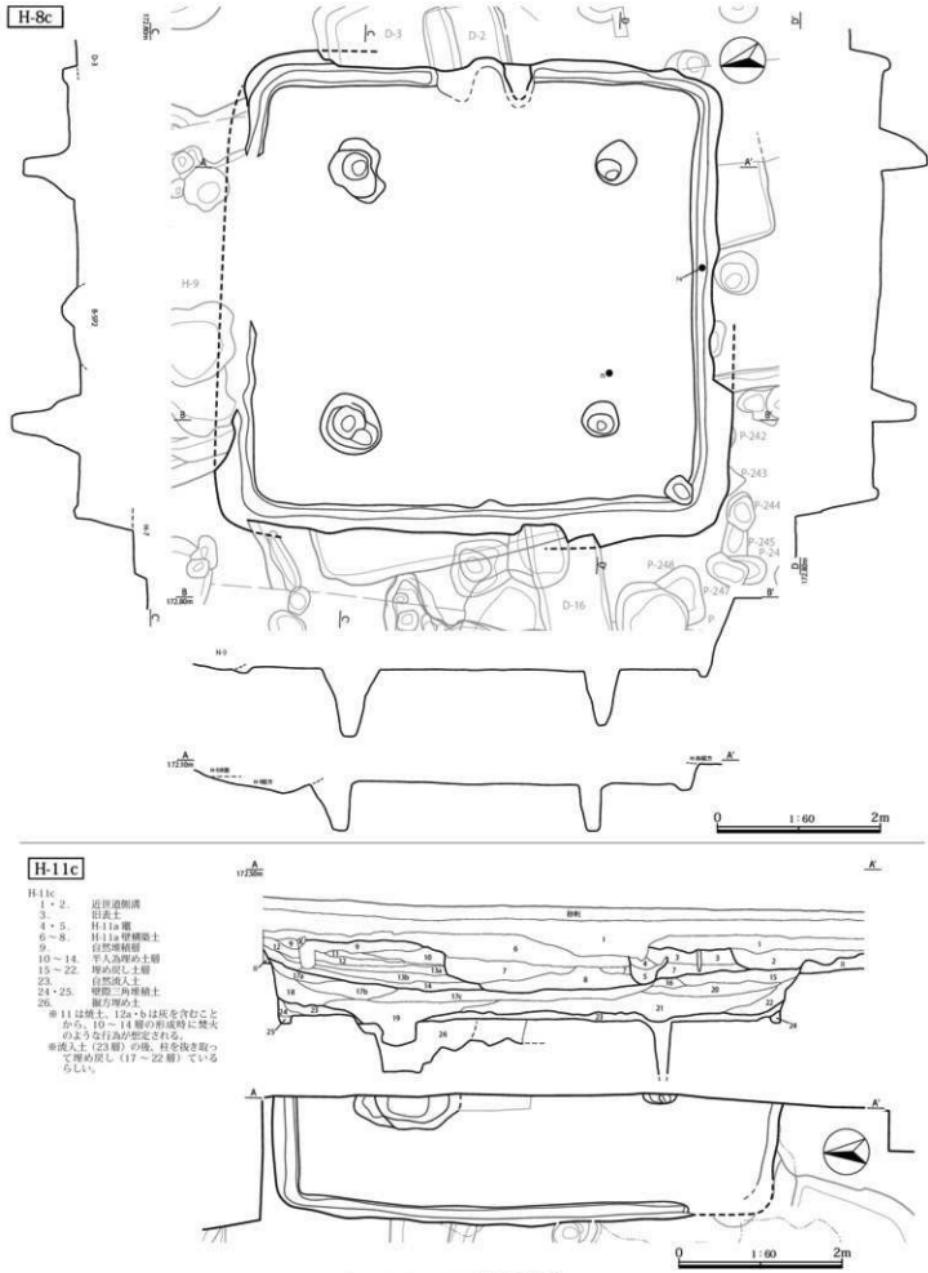


Fig.14 8c・11c 号竪穴建物跡

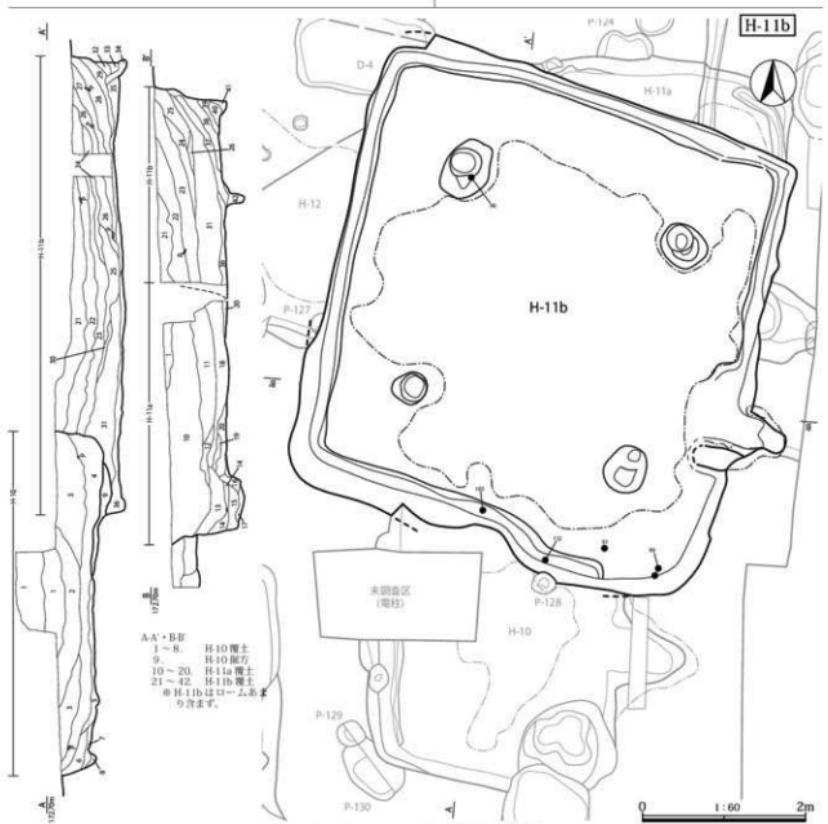
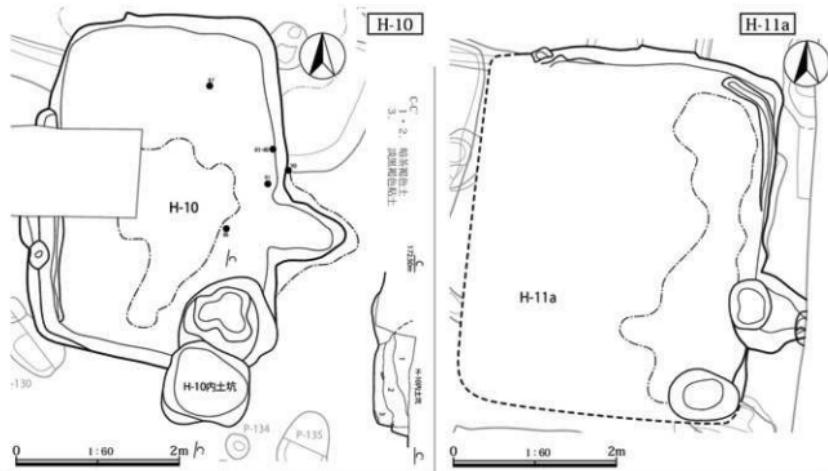


Fig.15 10・11a・11b 号竪穴建物跡

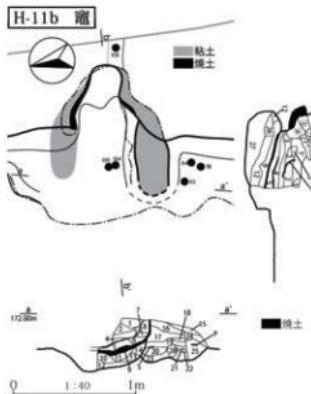
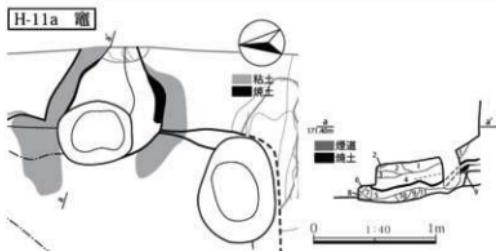
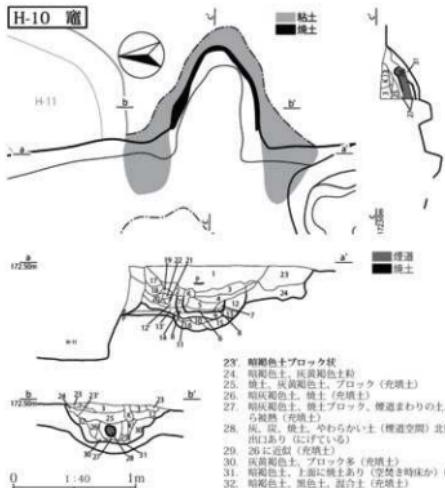


Fig.16 10·11a·11b号竖穴建物跡

- H-10 園

  - 1) 黄葉黃土色土。褐色土。バニス。黄葉色土 (カマド被覆土が崩壊、すった部)。
  - 2) 黄葉色土。褐色土。黄葉色土ブロック、混合土 (カマド被覆土が崩壊、すった部)。
  - 3) 黄葉黃土色土。黄葉黃土色土。褐色土和 (カマド被覆土が崩壊、すった部)。
  - 4) 黄葉黃土色土。褐色土。黄葉色土小ブロック (カマド被覆土が崩壊、すった部)。
  - 5) 塩土。黄葉黃土色土。褐化物。ブロックの凹凸部 (カマド被覆土崩壊による土の凹凸、削除などの上)。
  - 6) 黄葉黃土色土。土壌土。土壌土で使用する被覆土の空隙率の上)。
  - 7) 黄葉黃土色土。土壌土。土壌土で使用する被覆土の空隙率の上)。
  - 8) 黄葉黃土色土。黄葉色土。ブロック状。空焚き時一帯砂砾点で固った土 (大きさ変形)。
  - 9) 砂質土を土母とす。上面は黄葉黃土色土ブロックをたたいたり、砂質土を充填する (充填用の穴)。空焚き。
  - 10) 塩土。空焚き時土の凹凸。
  - 11) チュコレー色 (紅褐色) 土。赤、かくらこぼした土。赤土粒 カマド被覆土。石の土。土壌土したくほじした土。赤褐色土。
  - 12) カマド被覆土。石の土。土壌土したくほじした土。赤褐色土。
  - 13) カマド被覆土。石の土。土壌土。赤褐色土。赤褐色土。
  - 14) カマド被覆土。土の土。土壌土したくほじした土。赤褐色土ブロック (瓶(瓶)及び一部の瓶(瓶)を構成する)。
  - 15) カマド被覆土。土の土。土壌土。赤褐色土 (瓶(瓶)及び一部の瓶(瓶)を構成する)。
  - 16) 剥離土。土壌土。土壌土。やわらかうす (焼造土) 土の土。褐色土。黒褐色土。黒褐色土。ブロック (瓶(瓶)又は土の土)。
  - 17) 黑褐色土。土。黒褐色土。黒褐色土。かいたい (左側、及び空焚き左側の土)。ブロック (瓶(瓶)についた土)。
  - 18) 黑褐色土。土。黒褐色土。黒褐色土 (左側、及び空焚き左側の土)。ブロック (瓶(瓶)についた土)。
  - 19) 黄褐色土 (左側) (左側、及び空焚き左側の土)。ブロック (瓶(瓶)についた土)。
  - 20) 黄褐色土。土。黒褐色土 (左側、及び空焚き左側の土)。ブロック (瓶(瓶)についた土)。
  - 21) 剥離土 (左側) (左側、及び空焚き左側の土)。ブロック (瓶(瓶)についた土)。
  - 22) 黄褐色土 (左側) (左側、及び空焚き時左側の土)。ブロック (瓶(瓶)についた土)。
  - 23) 剥離土 (左側) (左側、及び空焚き時左側の土)。ブロック (瓶(瓶)についた土)。



- |       |  |  |
|-------|--|--|
| H1b 圖 | 1. 灰色粘质土，暗褐色土粒（燃燒室構成物假說）<br>2. 灰褐色粘土，巴米斯，石，灰白色粘土<br>3. 灰褐色粘土，巴米斯，石，灰白色粘土<br>4. 灰褐色粘土，灰白色粘土四粒（燃燒室構成物假說）<br>5. 灰色粘土，燒土<br>6. 灰色粘土，石，燒土<br>7. 灰土，他土壤土（使用時的內部）<br>8. 他土壤土，灰色粘土，上面有燒土（使用時的內部）<br>9. 灰褐色粘土，灰白色粘土四粒（使用時的內部）<br>10. 灰褐色粘土，灰白色粘土<br>11. 灰褐色粘土，灰白色粘土<br>12. 灰褐色粘土，燒土，黃褐色粘土<br>13. 灰色，黃褐色粘土，燒土<br>14. 灰褐色粘土，灰白色粘土，石<br>15. 灰褐色粘土，灰白色粘土四粒（卡マド上部）<br>16. 灰白粘质土，燒土，巴米克（袖の土（構築土））<br>17. 灰色粘质土，炭化物粘土，燒土（カマド下部）<br>18. 灰褐色粘土，燒土，灰白色粘土（土壁）<br>19. 灰白粘质土，燒土，灰白色粘土（袖の土（構築土））<br>20. 灰白粘质土，暗褐色土，黃褐色土（土壁） | 21. 黃褐色土（ブロック），燒土色（たいたい土）<br>22. 黃褐色土（ブロック）（袖の土（構築土））<br>23. 黃褐色土，燒土，黃褐色土（袖の土（構築土））<br>24. 灰褐色粘土，灰白色土（袖外側の土）<br>25. 灰褐色粘土，黃褐色土（袖外側の土）<br>26. 黑色土，燒土，黃褐色土，黃褐色粘质土（ローカルカド擬方かH1c建物に属するかの仮説）<br>28. 蘭褐色土（ローラック）<br> |
| 土坑    | 1. 灰褐色粘土，巴米斯多，燒土，黃褐色土<br>2. 底灰褐色土，巴米斯粘土（カマド部分の可能性あり）<br>3. 烧土，灰褐色粘土，灰白色粘土（カマド下部の可能性あり）<br>4. 底灰褐色粘土，燒土，黃褐色粘质土（ローカル粘土層に構造土が土だった）（カマド部分の可能性あり）   |  |

H-12～14 及び D-4～8・10・15

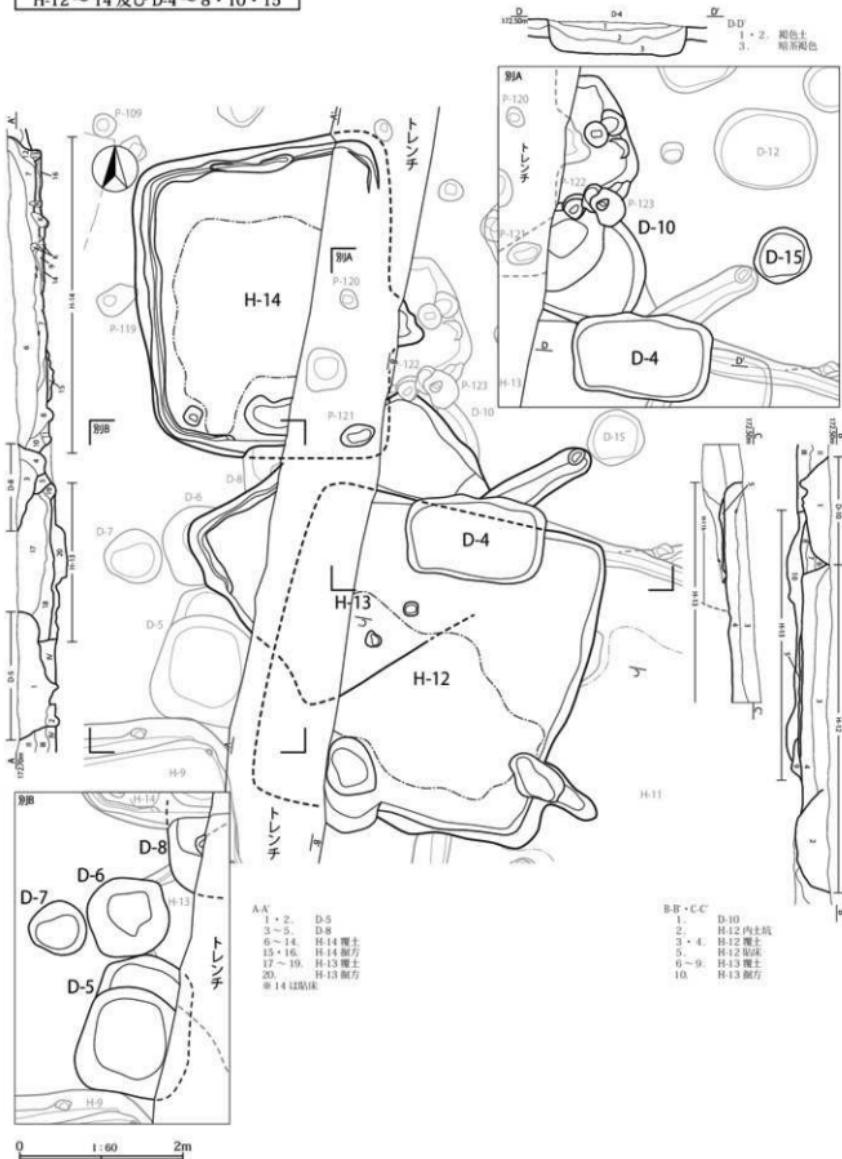
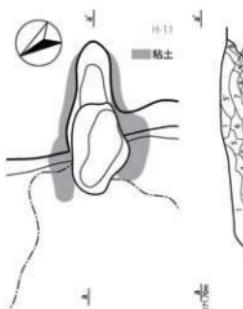


Fig.17 12～14号竪穴建物跡及び4～8・10・15号土坑

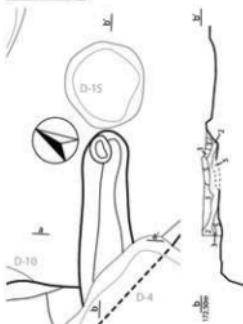
### H-12 窓



### H-12 窓

1. 伝熱遮断土層、ローム粒、バミスを多く含む（建物裏土）
2. 黄褐色土、人便土を含む
3. 伝熱遮断土、灰、植生土、バミス（カマド燃焼室及び構造材の廃棄土）
4. 伝熱遮断土、バミス（カマド燃焼室及び構造材の廃棄土）
5. 伝熱遮断土、ローム（カマド後退（煙道構造部）構造材、瓦礫の土）
- 5'. 伝熱遮断土、瓦礫の土（カマド後退（煙道構造部）構造材、瓦礫の土）
- 5'' よりやわらかい、廃棄土（カマド後退）
6. 伝熱遮断土（構造材）
7. 伝熱遮断土、煙道空間内、灰土
8. 伝熱遮断土、瓦を含む
9. 伝熱遮断土、植生土、灰、瓦ブロックを含む
10. 地上プロトク（煙道室蓋）
11. 伝熱遮断土、灰、瓦の混合土（煙道室構造材廃棄土）
12. 伝熱遮断土、瓦を含む
13. 伝熱遮断土の土
14. 炭化物ローム

### H-13 窓

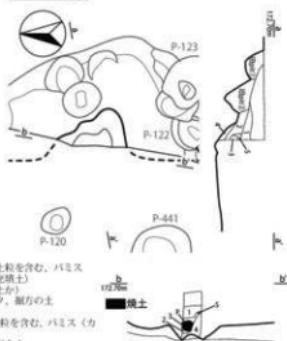


### H-13 窓

カマド 東側、左袖部のみ

1. 蒸気色土（やわらかい土）、灰褐色土、蒸気色土（煙道空間の廃棄土）
2. 灰褐色土、植生土、灰、瓦ブロックを含む
3. 灰褐色土、粘性あり、灰褐色瓦ブロック（瓦地）
- 4'. 灰褐色瓦ブロック（充填土）
4. 瓦ブロックト体の階層化土
5. 灰褐色土、灰褐色土、ブロックの混合土、無分の土

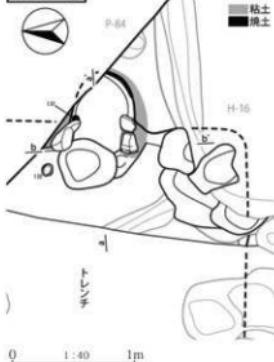
### H-14 窓



### H-14 窓

1. 伝熱遮断土、灰褐色色土細粒、灰、植生土を含む、バミス
2. 伝熱遮断土、灰、灰褐色土（やそらく瓦礫土）
3. 伝熱遮断土、礁石多、灰土、煙道空間の土か？
4. 伝熱遮断土、瓦ブロックを含む、瓦の土
5. 煙道天井の土（廃棄物）、瓦の土、土塊
6. 土塊の土、灰褐色土、灰褐色土、灰褐色土、植生土を含む、バミス（カマド上部の土をまぜ込む）
- 旧Pm①. 伝熱遮断土、灰褐色瓦質土ブロック、混合土
- 旧Pm⑤. 伝熱遮断土、灰褐色瓦質土ブロック、灰褐色粘性土ブロック、混合土

### H-17 窓

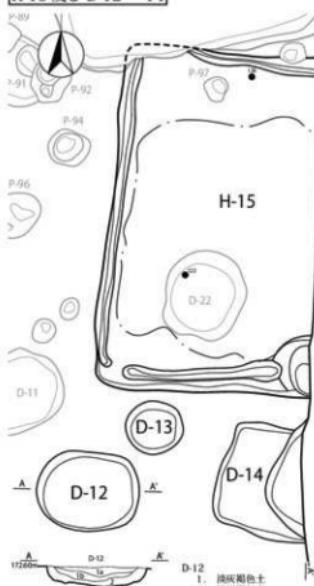


### H-17 窓 a-a'

1. 伝熱遮断土、ローム小ブロック、少量の灰、バミス少量含む、植生土（カマド構造材の一部混入カマド廃棄土）
2. 伝熱遮断土ロームブロック（煙道構造材）
3. 伝熱遮断土、ローム小ブロック、バミス少量、青灰色の灰をブロック灰に含む（煙道天井構造）
4. 伝熱遮断土、ローム粒子、植生粒子少額、煙道空間内
5. 伝熱遮断土、ローム粒子、植生粒子混在、上面がやわらか（煙道構造土）
6. 伝熱遮断土、ローム粒子、植生粒子少額、青灰色の灰をブロック灰に多量に含む（空焚き時の使用面）
7. 伝熱遮断土、瓦ブロック、瓦質物、青灰色の灰をブロック灰に含む（空焚き時の使用面）
8. 伝熱遮断土、瓦ブロックを多量に含む（空焚き時の使用面）
9. 伝熱遮断土、植生、ロームブロックを多量に含む（カマド構造前の造作土）
10. 伝熱遮断土、瓦の土
11. 伝熱遮断土、カマド床下の土、植生土、瓦、同化物質を含む
12. 伝熱遮断土、植生土、ロームを多く含む
13. 伝熱遮断土、おそらく廻し構成する土、ロームブロック、灰褐色土の混合土
14. 伝熱遮断土、バーム、ローム灰を含む建物裏土
15. 伝熱遮断土、植生、床土のおさえた土、粘性土
16. 伝熱遮断土、植生、床土のおさえた土、同化物質を含むに対応する

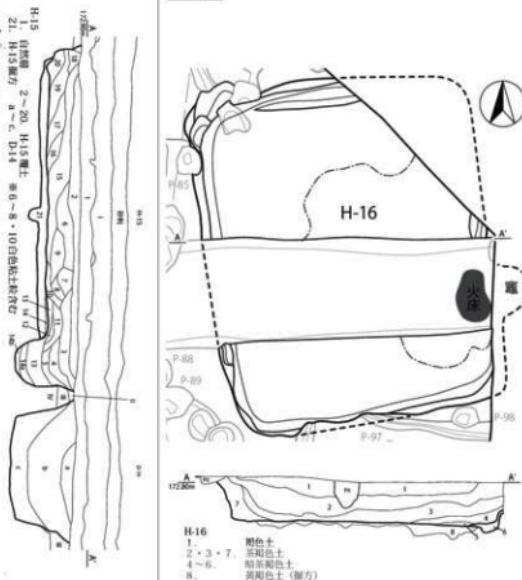
Fig.18 12 ~ 14・17号堅穴建物跡図

H-15 及び D-12 ~ 14



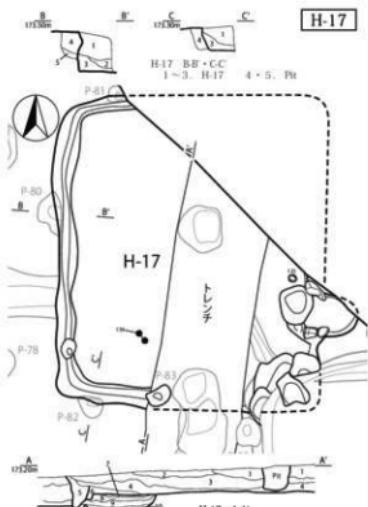
D-12  
1. 淡灰褐色土  
2. 深灰褐色土

H-16



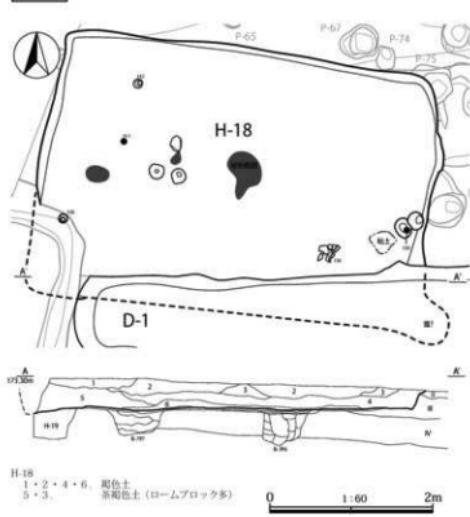
H-16  
1. 開白色土  
2~3. 開白色土  
4~6. 茶褐色土  
8. 黄褐色土(糊方)

H-17



H-17  
A-A'  
1~3. H-17 覆土  
4~5. Pte  
5~7. H-17 壁方

H-18



H-18  
1~2+4+6. 開白色土  
5~3. 茶褐色土(ロームブロック多)

Fig.19 15 ~ 18号竪穴建物跡及び12 ~ 14号土坑

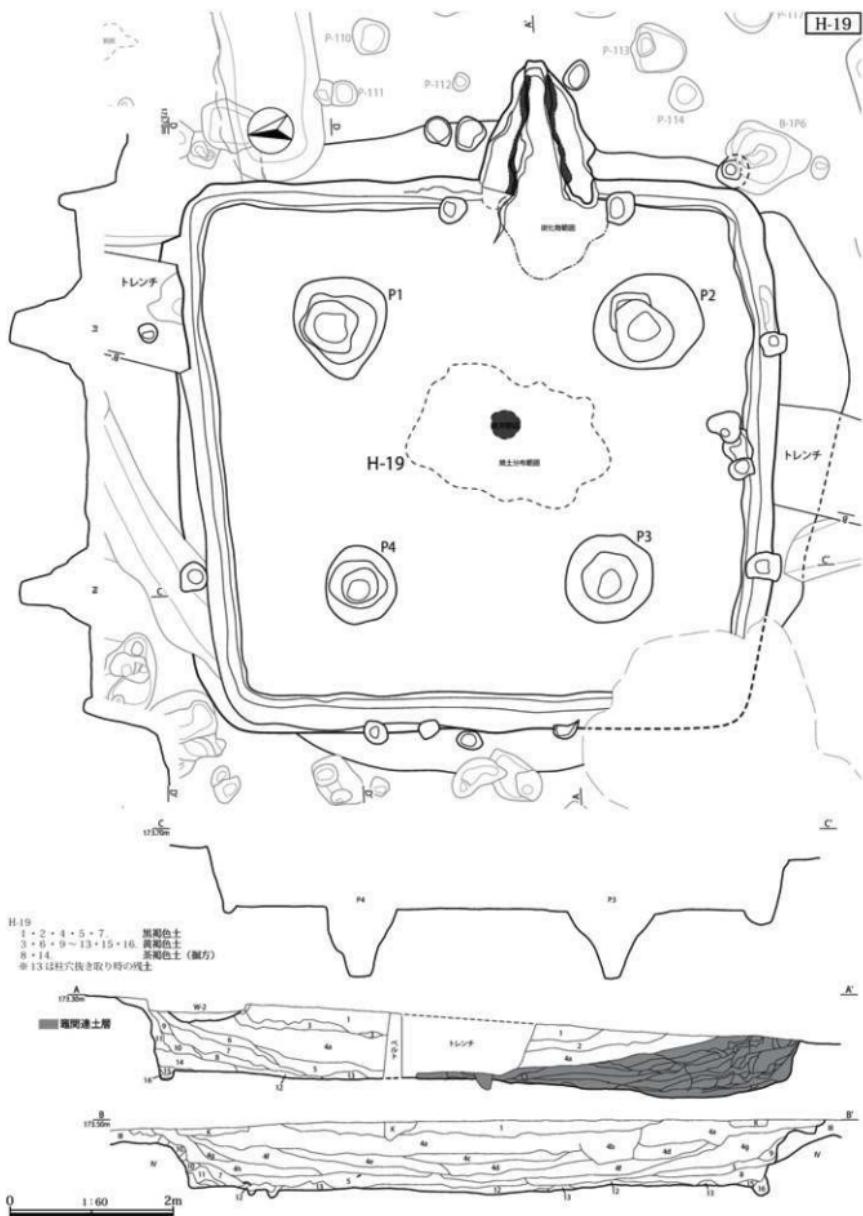


Fig.20 19号竖穴建物跡

H-19 遺物出土状況

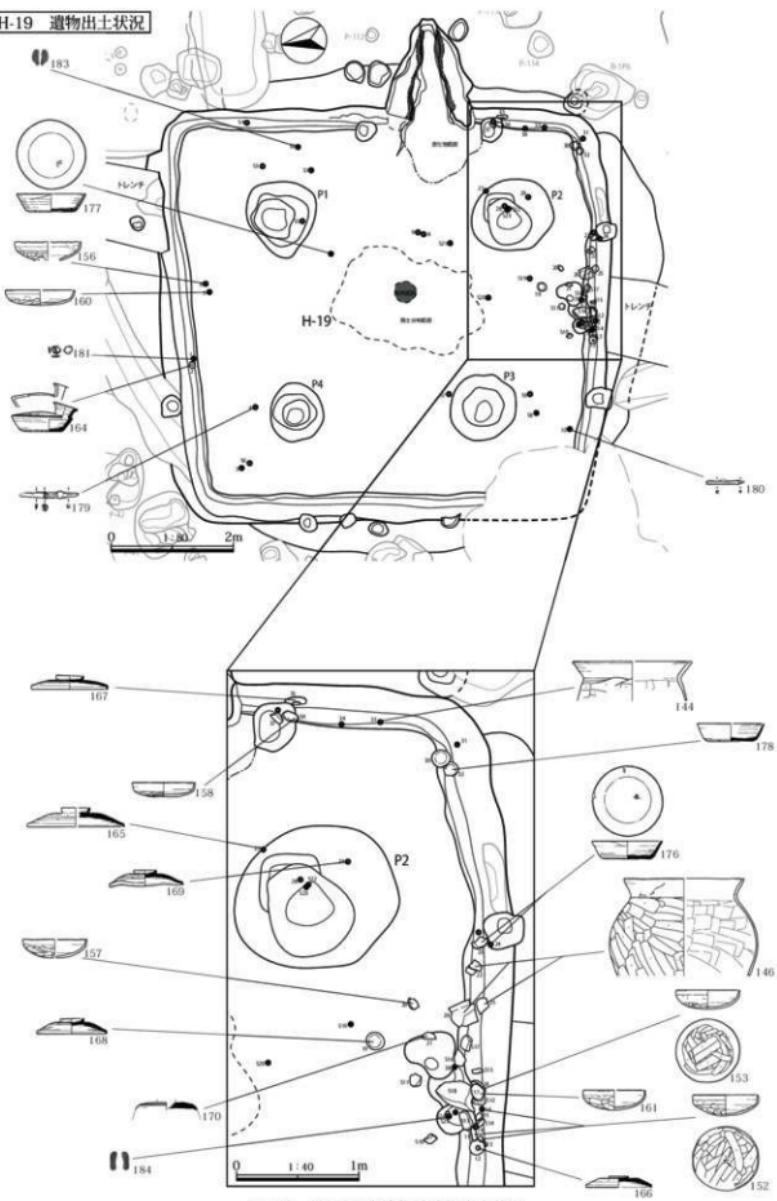


Fig.21 19号竪穴建物跡遺物出土状況

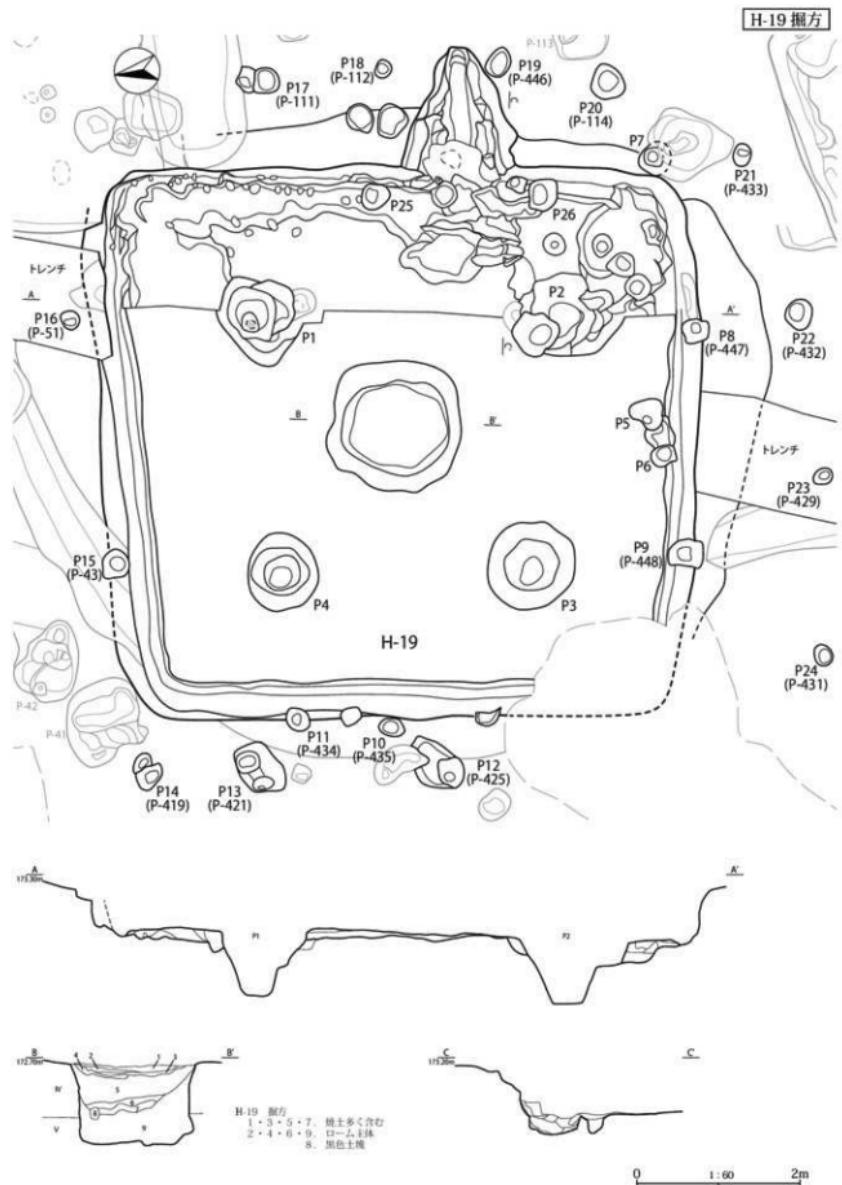
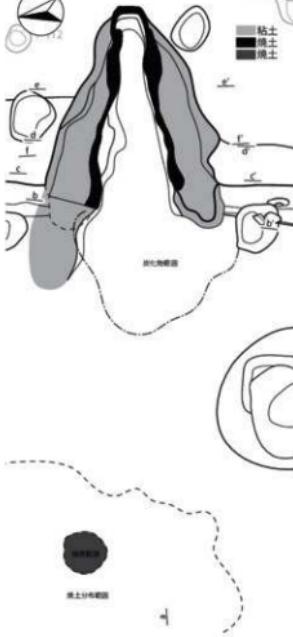


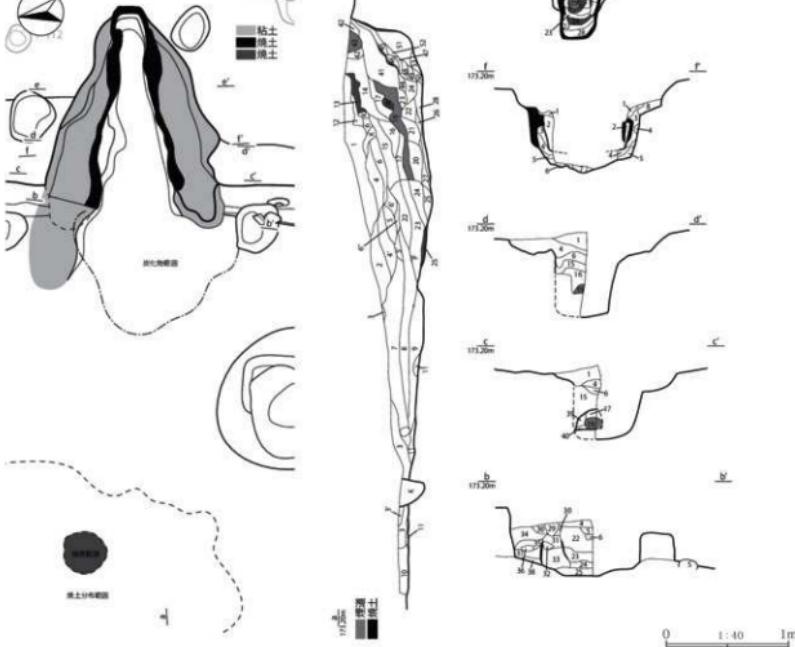
Fig.22 19号竪穴建物跡掘方

H-19 窟



p-113

■ 黄褐色土  
■ 灰黄褐色土  
■ 黑土



0 1:40 1m

H-19 窟 a-a'・b-b'・c-c'・d-d'・e-e'

1. 黄褐色土。灰黄褐色土粘土 (カマド残滓をまきこんだ底土)
  2. 黄褐色土。
  3. 黄褐色土。灰黄褐色土ブロック (火)
  4. 黄褐色土。灰黄褐色土。砂。焼土。4層より粒子大きい。
  5. 黑土。炭化物灰黄褐色土。
  6. 灰黄褐色粘土。灰褐色土。埋め覆土の上。灰黄褐色粘土質土。燒土。灰土。
  7. 灰白色粘土質土。燒土混合土。(カマド本体構造土の崩落したもの)
  8. 灰黄褐色土。灰白色粘土質土。細かい粒子。
  9. 灰黄褐色土。灰白色粘土質土。底土の土。及びカマド底盤時の構築材を含む。
  10. 黄褐色土。灰黄褐色土ブロック (柱根きどり時の土)
  11. 黄褐色土。灰黄褐色土ブロック質土 (一部溶出化)
  12. 黄褐色土粘質土 (6に近似する)
  13. 黄褐色土粘質土 (6に近似する)
  14. 黄褐色土粘質土。燒土。人ブロック。灰白色灰土一灰燒土。
  15. 黄褐色土粘質土。燒土。人ブロック。灰白色灰土。
  16. 黄褐色土粘質土。活性。暗褐色土下部に下からの被熱による燒土をみとめる (煙道天井?)
  17. 灰灰褐色土。灰。灰。燒土等。やうらか土 (煙道下部の土)
  18. 灰褐色土。灰。燒土等。やうらか土 (煙道下部の土)
  19. 黄褐色土粘質土。燒土。燒土混合土 (燒土したものの土)
  20. 黄褐色土粘質土。土塊が焼土質。灰を含む (煙道下部の土)
  21. 灰。陶物を多く含む。燒土ブロック
  22. 灰褐色土。灰。燒土等の焼土質。
  23. 黄褐色土粘質土。燒土。燒土混合土。より粘性つよい。
  24. 灰灰褐色土。
  25. 灰灰褐色。空燒合時。灰火及び直上の土。
  26. 灰。灰。黃褐色土混合土ブロック
  27. 黄褐色土。燒土。
  28. 黄褐色土粘質土。灰。灰。灰を含む
  29. 黄褐色土。
  30. 黄褐色土粘質土。灰白色粘土
  31. 灰白。灰黄。燒土。粘土
  32. 灰黄褐色土。燒土。ブロック状
  33. 黄褐色土。燒土
  34. 黄褐色土。灰黄褐色土粘土
  35. 灰黄褐色土粘土
  36. 黄褐色土
  37. 黄褐色土。灰黄。粘土
  38. 灰褐色土
  39. 烧土。燒土ブロック。灰黄褐色土
  40. 烧土。灰。燒土
  41. 烧土。燒土空間に巻き付ける土。燒土ブロック。灰黄褐色土。粘性あり
  42. 灰褐色土。灰。灰。灰褐色土。灰褐色土。細粒で均質
  43. 灰褐色土 (火)。黑色土。灰。灰黄褐色土
  44. 灰褐色土を作ると。灰黄褐色土。粘性土
  45. 灰黄褐色土。しまったかたい土
  46. 烧土。強い焼土。燒土化
  47. 灰褐色土。灰。多
  48. 灰黄褐色土。赤褐色土
  49. 灰。灰。灰。灰白色土
  50. 灰白色土。53層との間に灰・植土層あり
  51. 灰黄褐色土ブロック。細粒。粘性あり。外側空焼き後灰土を充填
  52. 灰褐色土。灰。灰。多
  53. 灰白色土
- H-19 窟 f-f'
1. 灰白色粘土質土。カマド残滓土
  2. 灰白色粘土質土。灰黄褐色粘土質土。灰黄褐色粘土混合土。崩落した内側焼結 (焼色) (右側は少し削りすぎ断面跡で焼化粧が剥落)
  3. 活化した灰黄褐色粘土土。上面赤紫色に変色。被熱か否か? 削い被熱? バミス、薪分離の異なる小段
  4. 灰褐色土。燒土ブロック。焼付面の底面を構成する
  5. 灰褐色土質土。燒土小粒。黄褐色土小土を含む
  6. 灰黄褐色土。炭化物質
  7. 灰黄褐色土。炭化物質。燒土ブロック
  8. 灰黄褐色土。バミス含む

Fig.23 19号竪穴建物跡窟

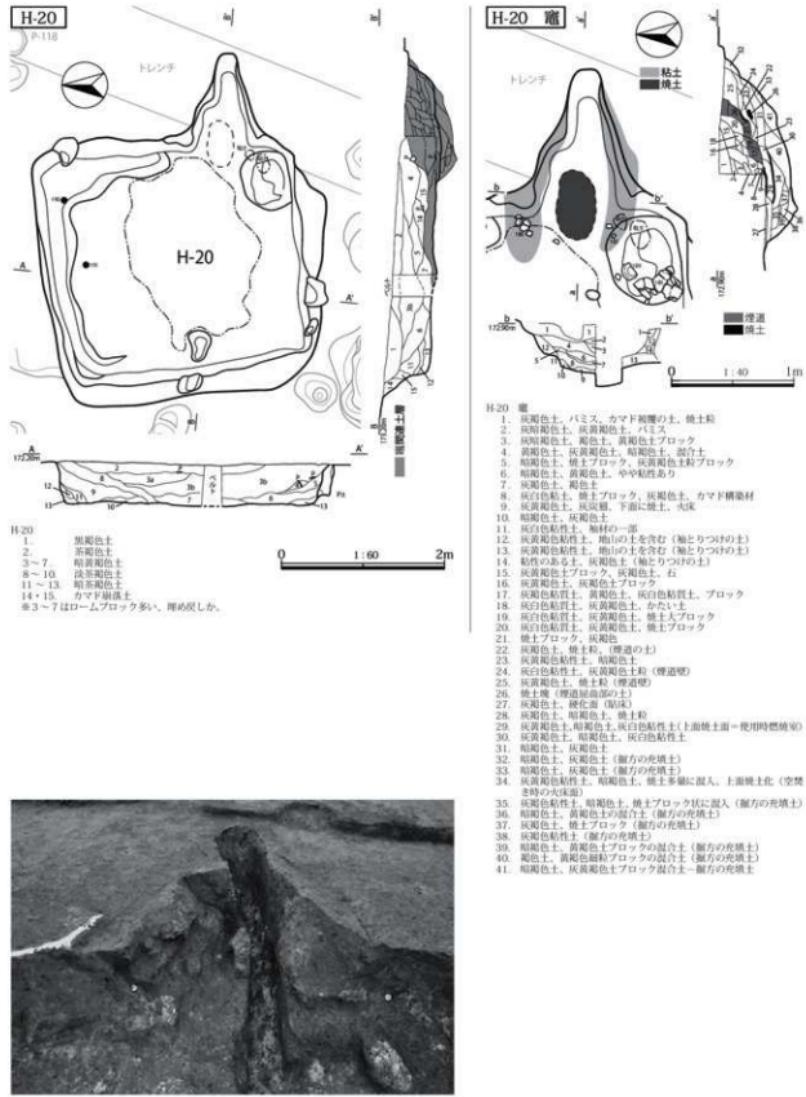


Fig.24 20号竪穴建物跡

B-1

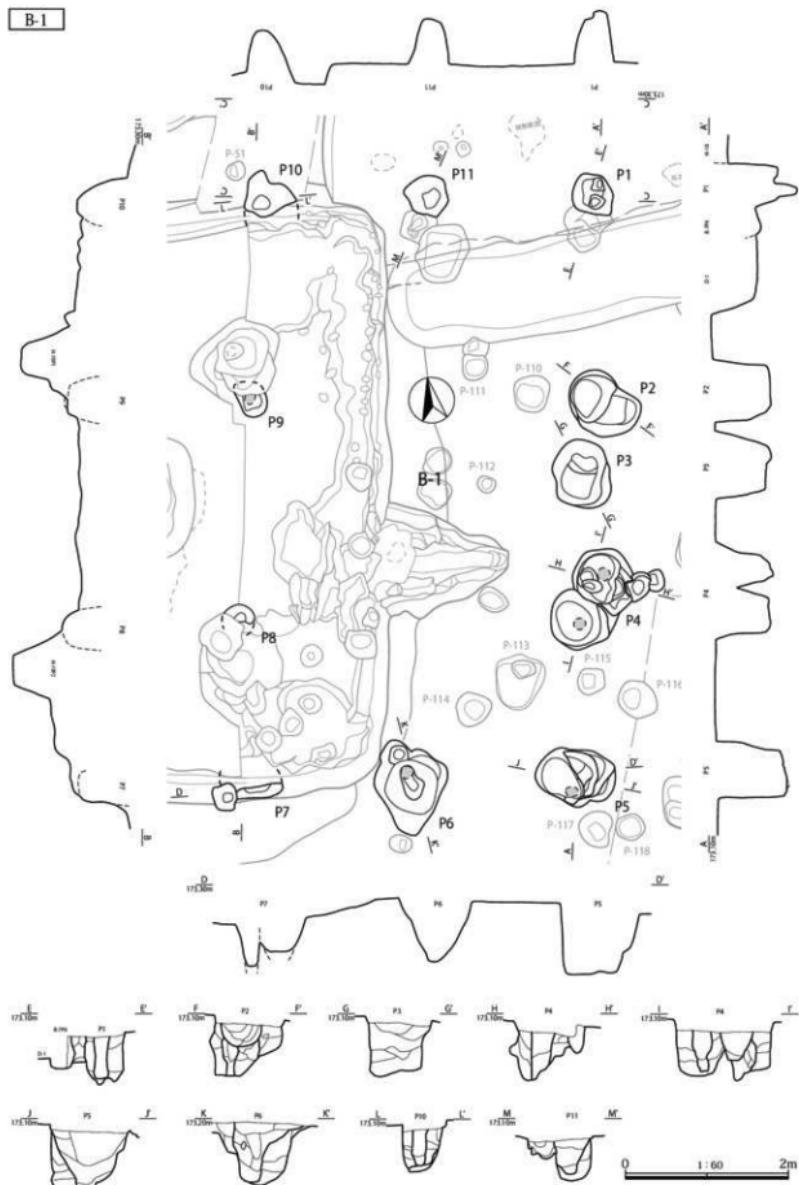
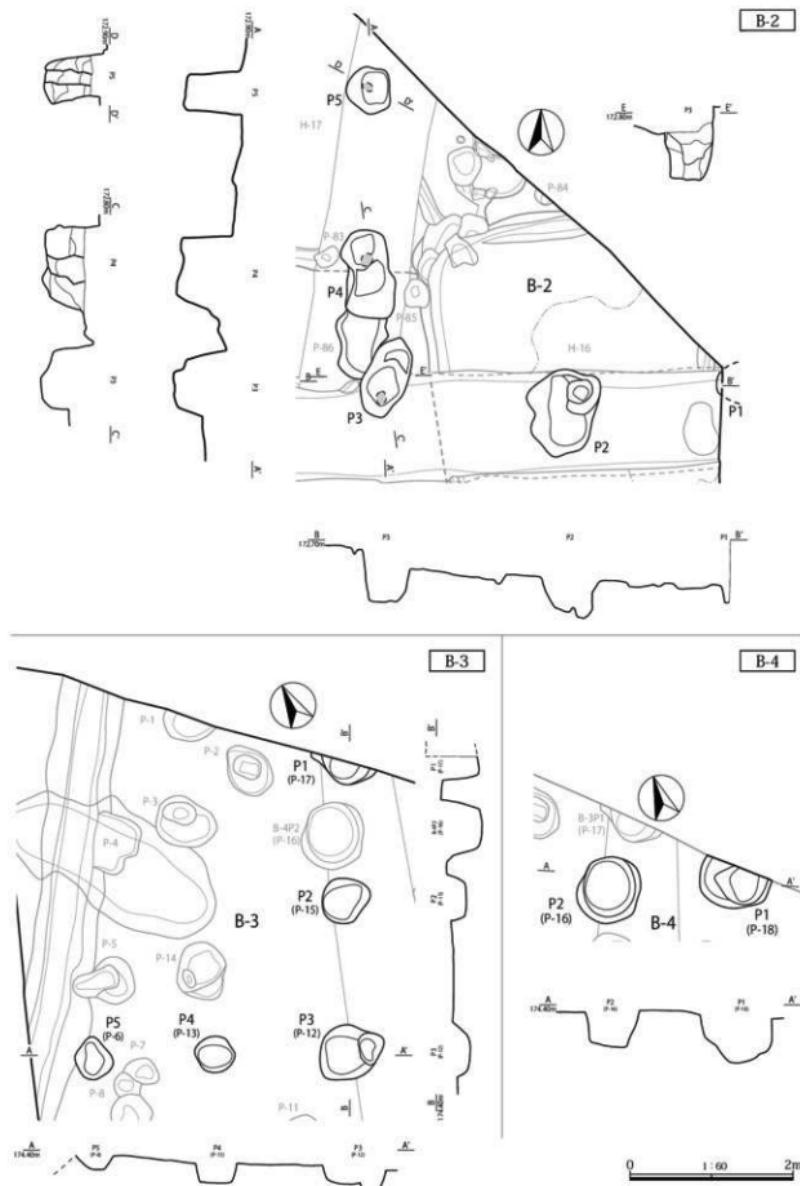


Fig.25 1号掘立柱建物跡



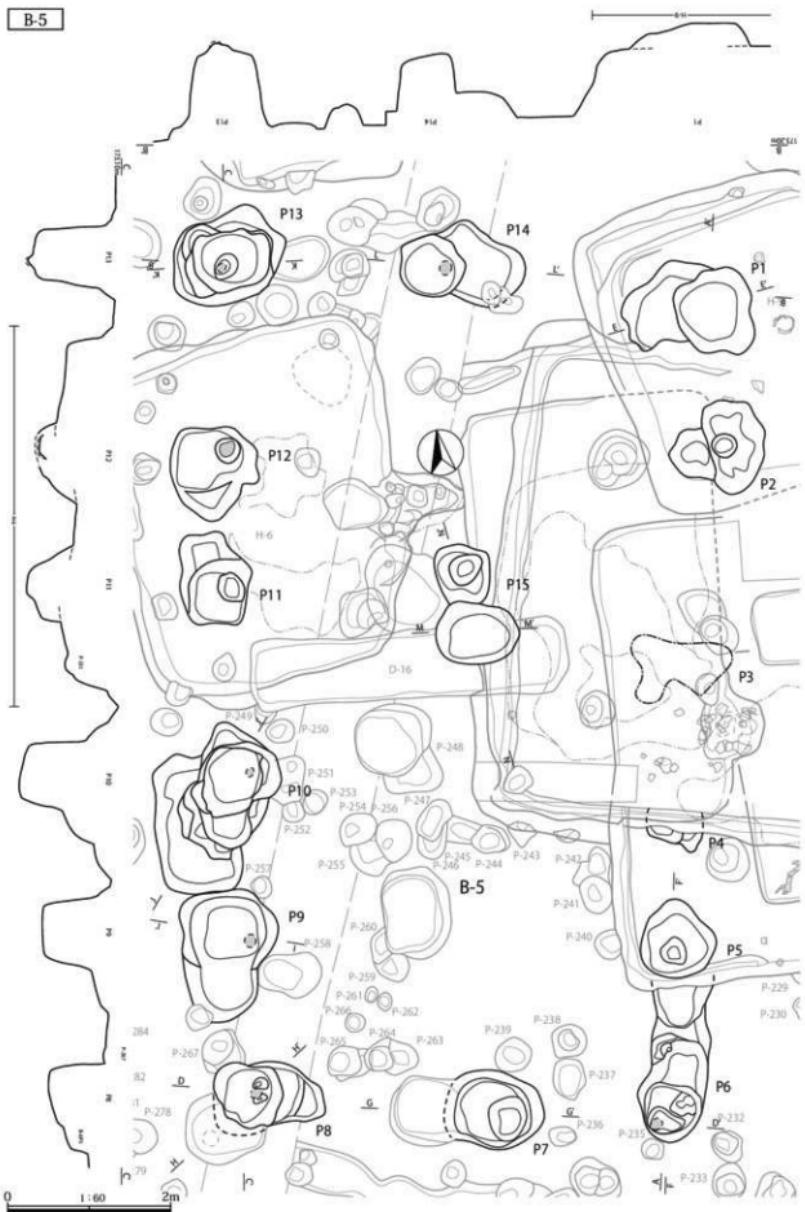
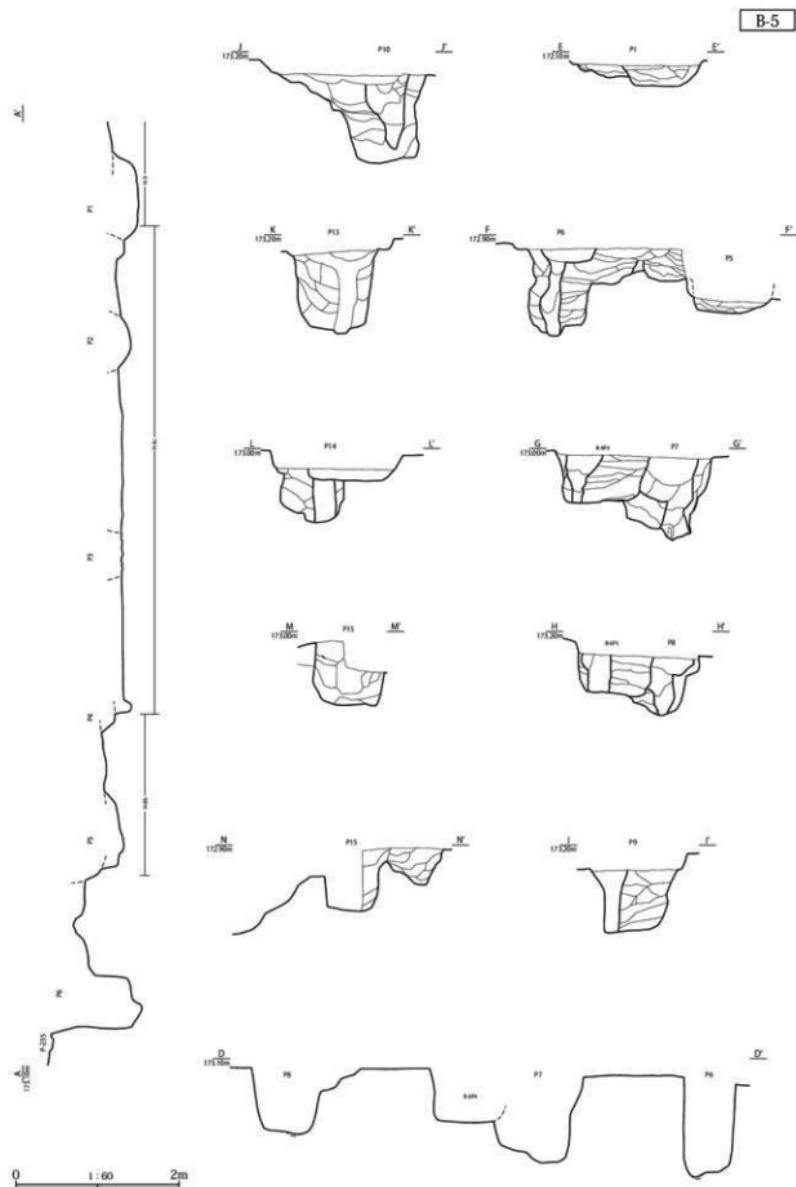


Fig.27 5号掘立柱建物跡（1）



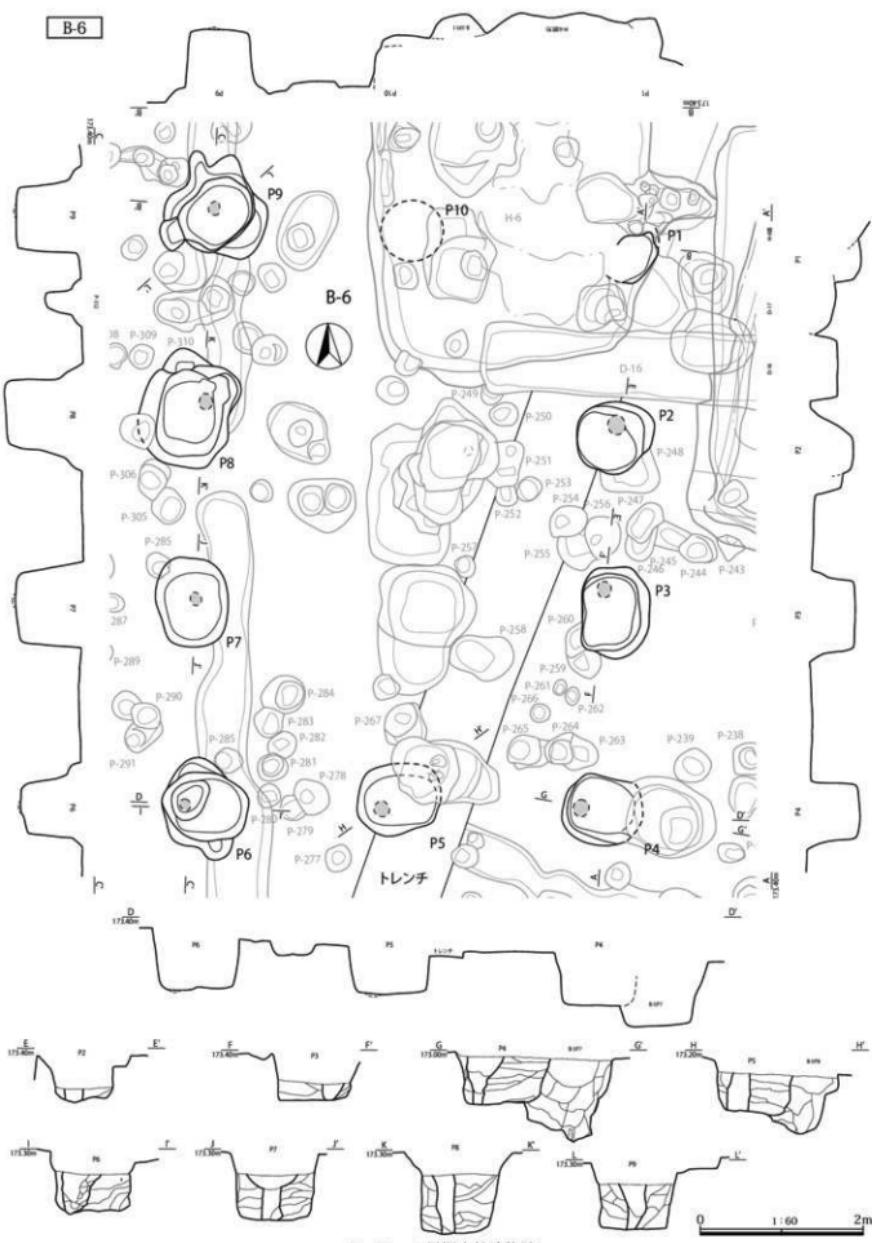


Fig.29 6号掘立柱建物跡

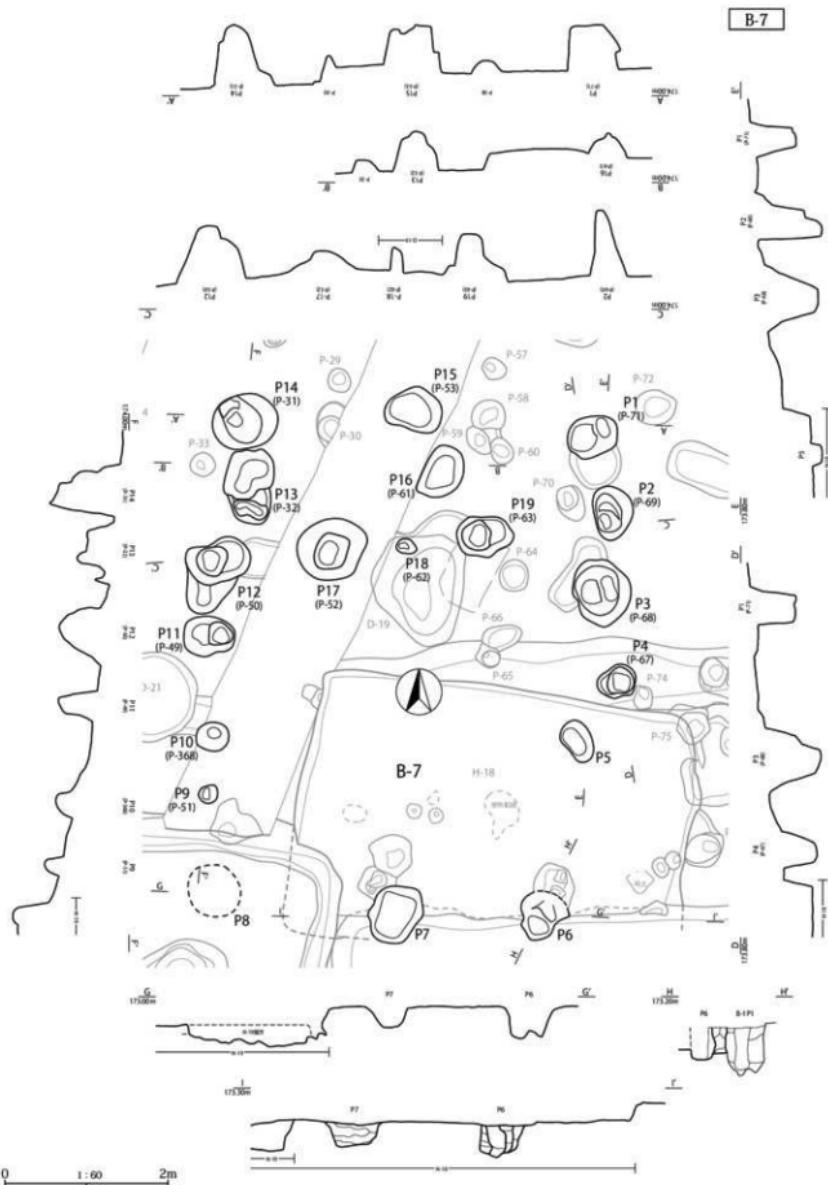


Fig.30 7号掘立柱建物跡

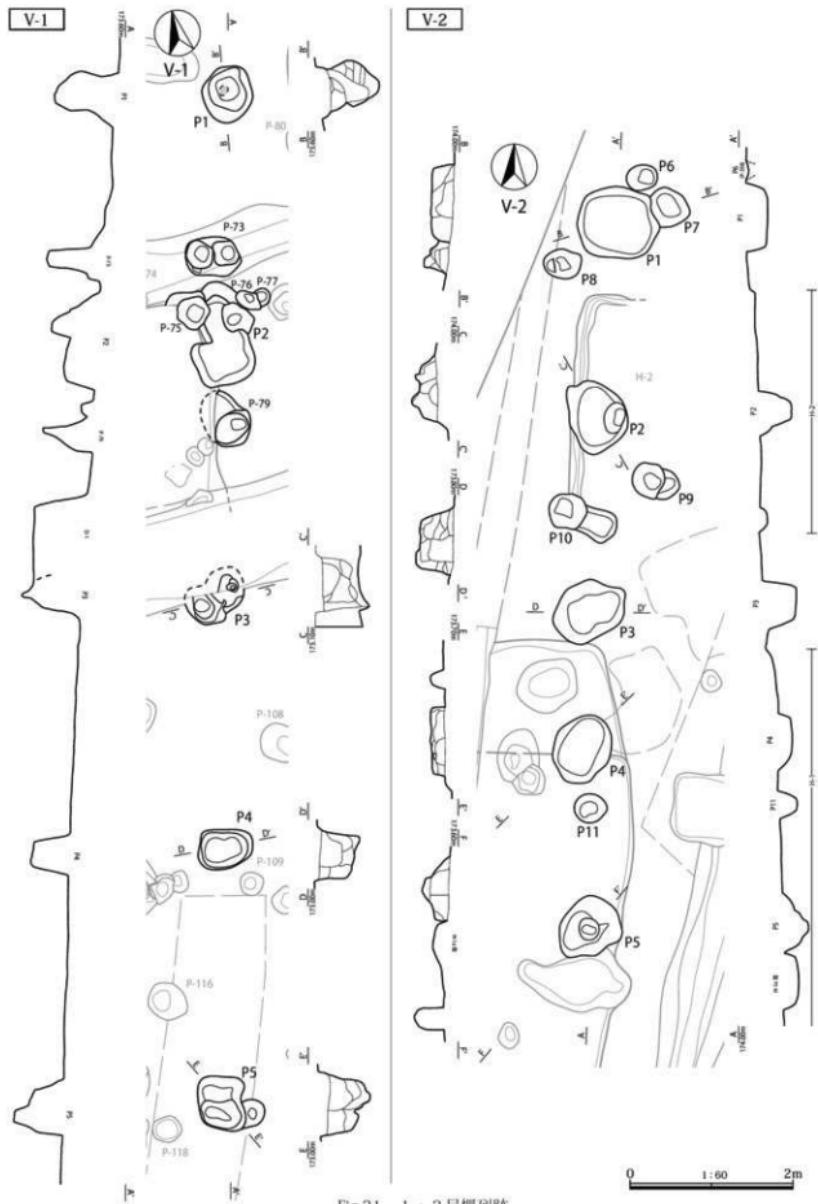
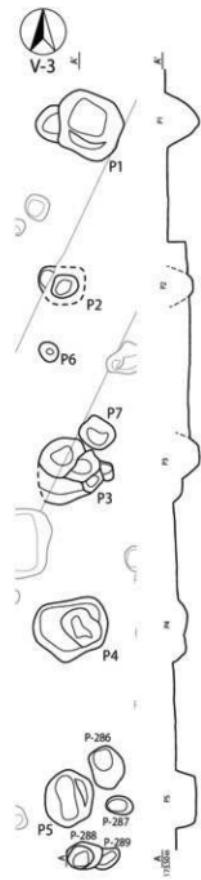
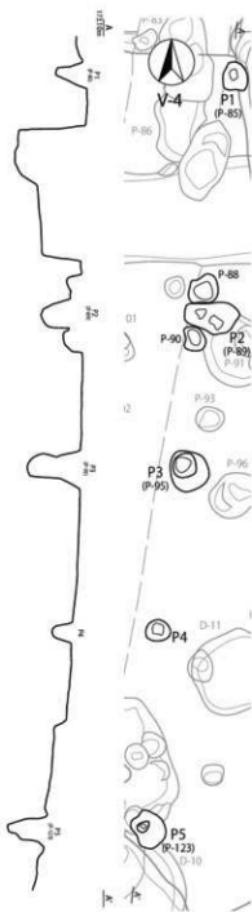


Fig.31 1 • 2号槽列跡

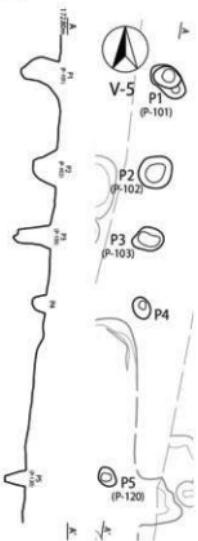
V-3



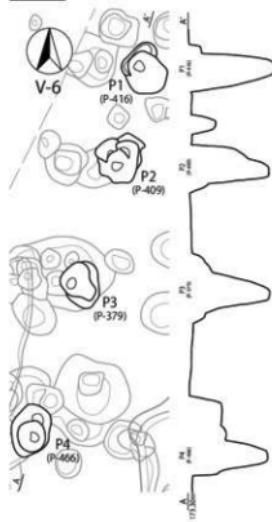
V-4



V-5



V-6



0 1:60 2m

Fig.32 3~6号柵列跡

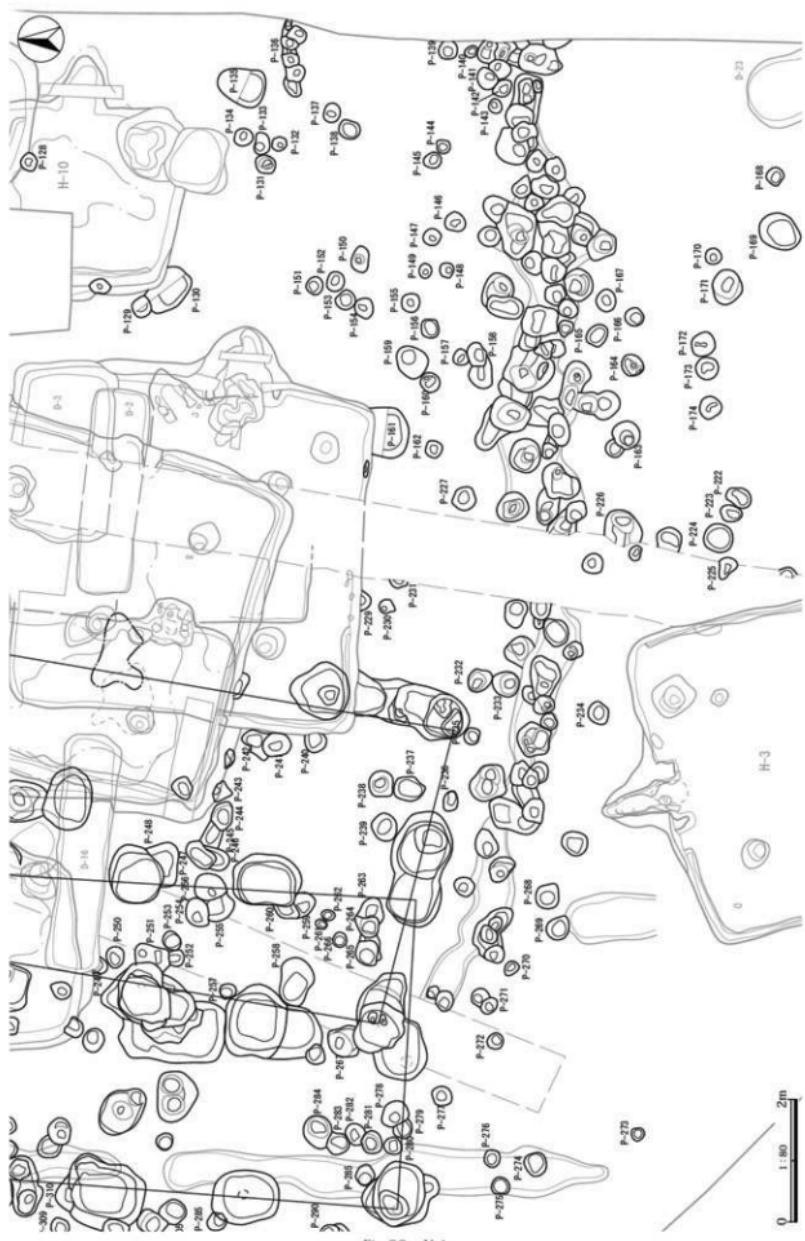


Fig.33 X-1

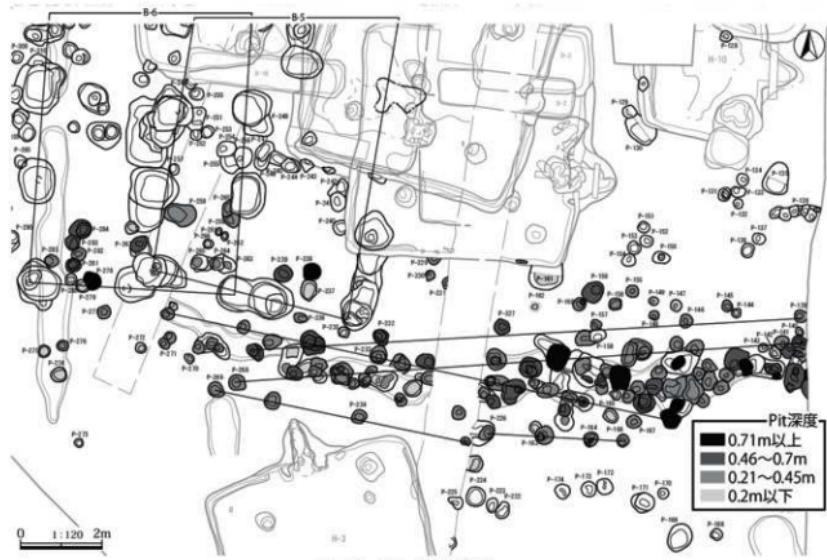


Fig.34 X-1 (柱列推定)

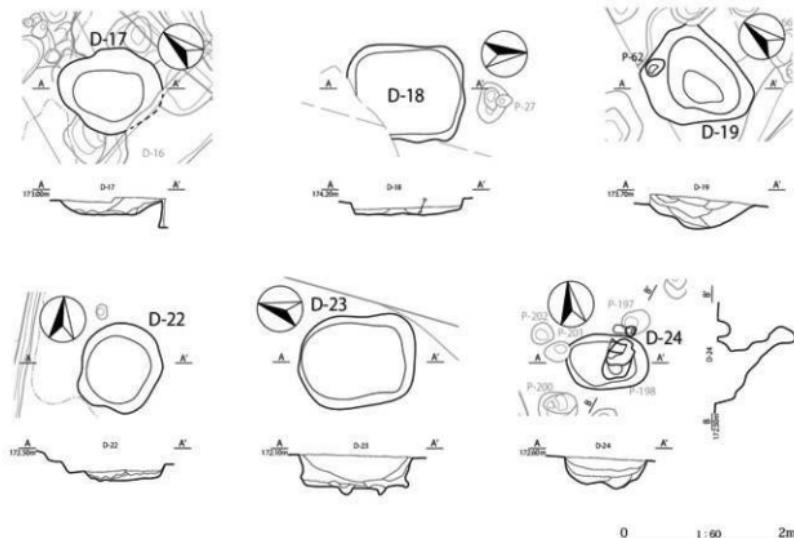


Fig.35 17 ~ 19 • 22 ~ 24号土坑



Fig.36 Pit分布図(1)



Fig.37 Pit 分布図 (2)

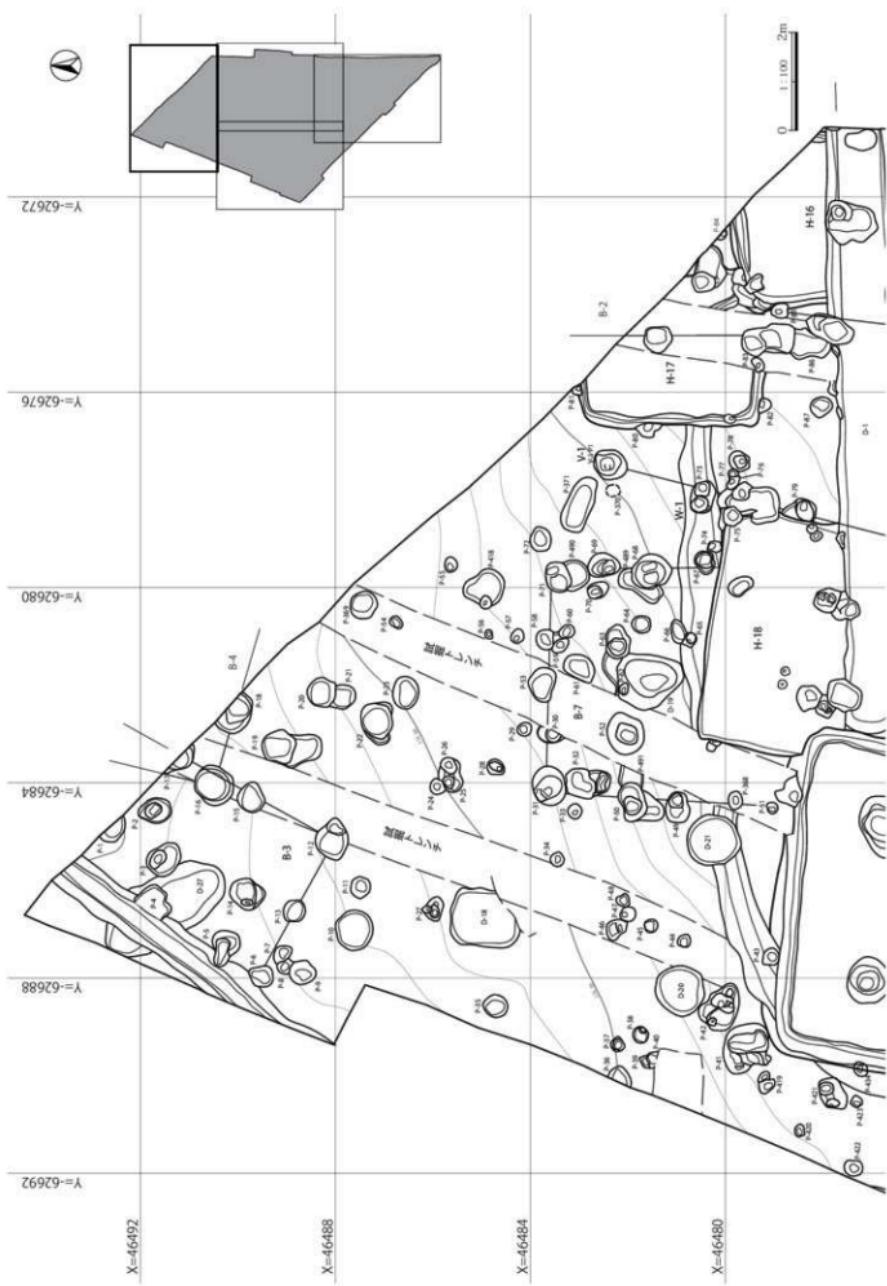


Fig.38 Pit分布図(3)

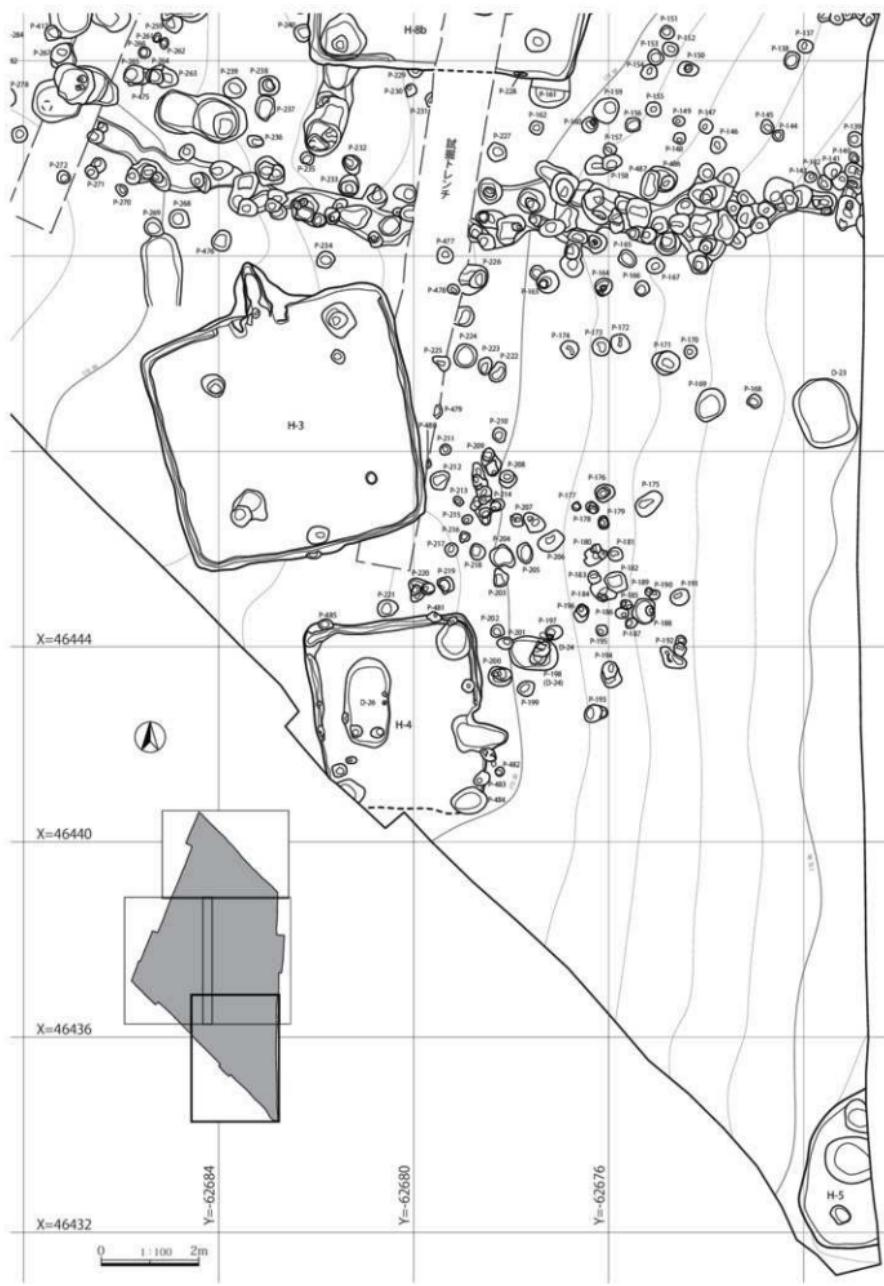


Fig.39 Pit 分布図 (4)

**奈良時代の 19 号竪穴建物跡出土遺物群** 出入口と思われる南壁中央下から龜の間に、土師器・須恵器の壺類が多く遺されていた。これらは完形品を含む比較的の残存状態の良いものではあるが、接合できない破片資料も床面上から出土している為、使用状態や組成がそのまま遺棄された訳では無い。とは言え壺類に比べて壺類が多いという特徴は、本遺構が大形竪穴建物であるという事とは無縁でないようと思われる。つまり壺を鋲々器とした場合、利用人数の多寡を反映しているとも理解される。また、北壁直下の床面から、棚状施設から転落したかのような状態で出土した完形の須恵器平瓶（164）と、そのすぐ隣から出土した銅片（181）は注目される。平瓶は肩を有し、櫛歯状工具による刺突文を巡らす優品で、古墳時代のものと異なる小型品である。恐らくは酒器としての使用より、墨を磨る際に用いられる水滴のような用途が想定される。銅片は不明製品の破片と思われ、可能性としては仏像か鏡と思われる。円形に整えられたような破片形状、出土時に周囲を詳細に探索したもの的一点のみの出土であったことから、それなりの意味をもつ物として平瓶と共に棚上に保管されていたものと考えられる。また、出土した土師器壺の外底面に、「大」の墨書きが 3 点確認された。端正な文字で、一般的に墨書き土器の少ない時期の資料という点で注意される。他に須恵器壺の内面に焼成前の「井」刻書もある（176・177）。

**3号竪穴建物の在地産暗文壺** 当該遺構からは、いわゆる北武藏型壺（16）、古墳時代からの模倣壺の系統（14・17・18）、自給制作された壺（13）と共に、在地産暗文壺（15）が出土している。これは田中広明によって「北島型暗文土器」とされたもので、7世紀後半の北武藏（利根川右岸の妻沼低地）を中心に分布している（田中 1991）。また、知久裕昭の検討によると、在地産暗文土器は武藏国幡羅郡衙の成立期に多量に用いられている（知久 2012）。本資料は胎土特徴から北武藏産と思われ、土器のもたらされた経緯を考えるに興味深い。

**計量壺の可能性がある須恵器** H-9 から出土したコップ型須恵器（77）は、完形ではあったが壁際に流れ込んだような出土状態で、本来は H-8a か 8b、あるいは B-5 に伴っていた可能性がある。とはいっても特異な器種で、埼玉県鳩山窯跡群出土例を検討した渡辺一は、平城京出土の「三合一タ」墨書きをもつ類例から計量に用いられた壺と考えている（渡辺 1990）。本例はやや浅身ではあるが、一応は壺として位置付けておきたい。

**平安時代中葉～後葉の白色土器** 平安時代中葉～後半とした遺構から、白色を呈する土師質焼成の高台壇・皿が散見された（30・48・78・134・138・139・210 等）。従来の理解では内面黒色処理の高台壇が一般的である中で異質な印象を受けるものだが、近年の上野国府城の調査で見出されつつある「白色土器」に類似している。国府城の白色土器についてはかつて扱ったことがあり、「ての字口縁皿」を作うことから平安京系の土器群と考えた経緯がある（永井 2019）。今回出土した白色の土器も同様の一群と見做すことが可能であるが、その場合、当該期における遺跡の性格（国府との関係性等）が問題となる。灰釉陶器の出土率が高い点も含め、検討をする。

**平安時代前半の鉄製品** H-6 出土の馬具（38）、H-10 出土の蔽手状の茎をもつ刀子（90）等、平安時代前半の出土遺物には注目される鉄製品が含まれている。馬具は鉄具で、その大きさから轡から鎧を繋いだものと推定される。蔽手の刀子は、茎を柄から抜き取った際の末端処理の可能性もあるが、蔽手刀との関係を思わせる。

**貝塚穴痕泥岩** 各遺構の調査時、火を受けて赤褐色になった泥岩の小片が目に付いた。これらには小さな円孔があり、貝塚穴痕泥岩と呼ばれるものである。坂本和俊の検討では礫で藻塩を生産した時に混入し、塩と共に内陸に持ち込まれたものとされている（坂本 2015）。可能な限り採集して持ち帰ったが、大半は不注意で水洗時に溶けて不鮮明となってしまった。図示したのは状態の良い資料である（114・182）。調査者の経験則ではあるが、県内における同時期の集落遺跡調査でこれほど貝塚穴痕泥岩が目立つ例を知らないので、本遺跡の出土量は他の遺跡よりも多いと思う。これ即ち塩の消費量の多さを示すと考えるのは、些か短絡的であろうか。坂本は埼玉県城北遺跡の事例に対し、馬骨の出土量の多さを根拠として馬匹生産との関係を説いている。つまり馬に与える塩という解釈だが、馬が必要とするのが塩なのか、或いは代替物としての塩なのか、検討の余地はあるだろう。

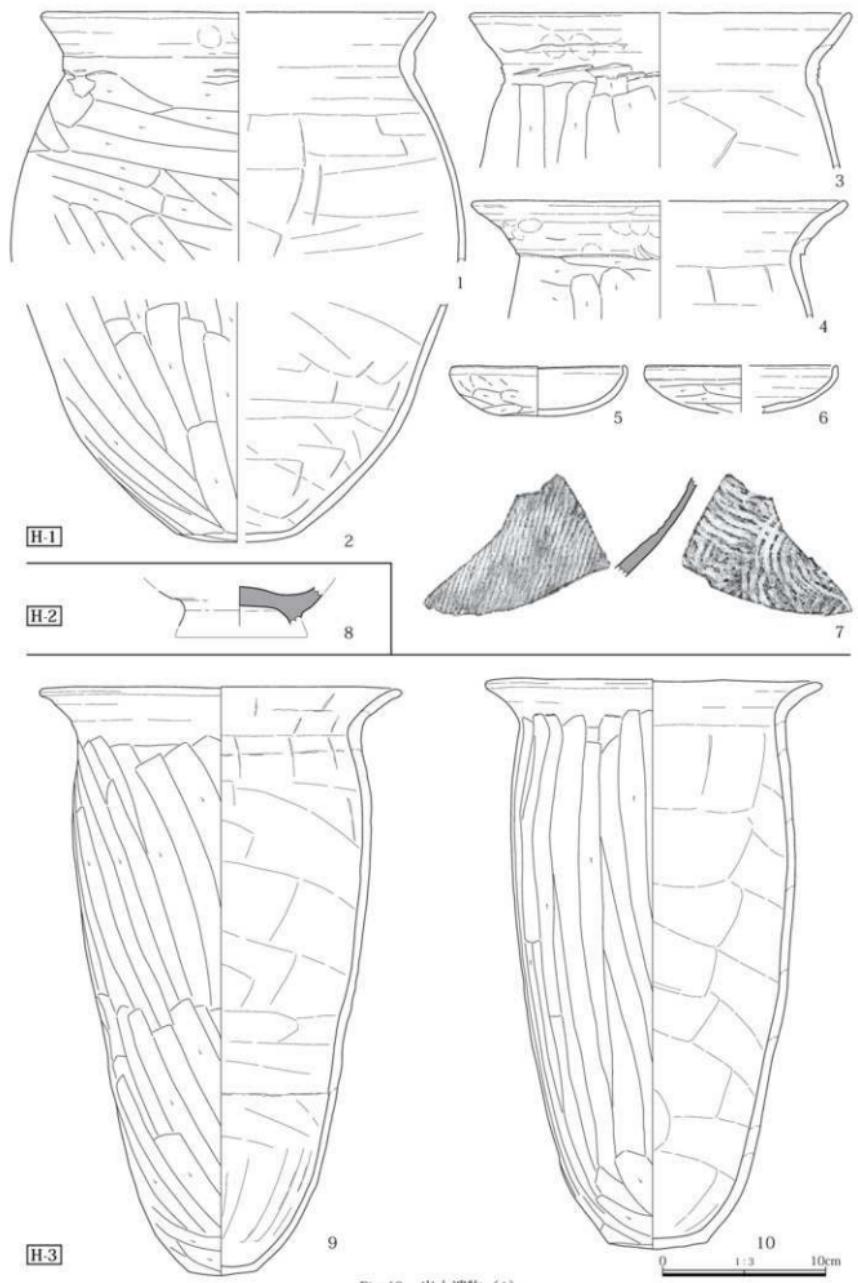
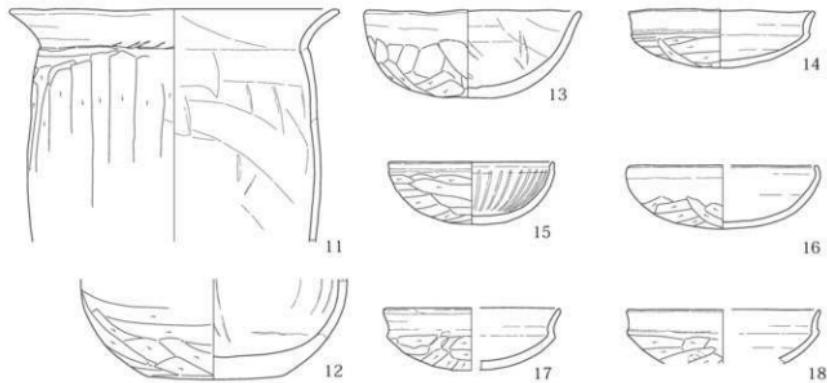
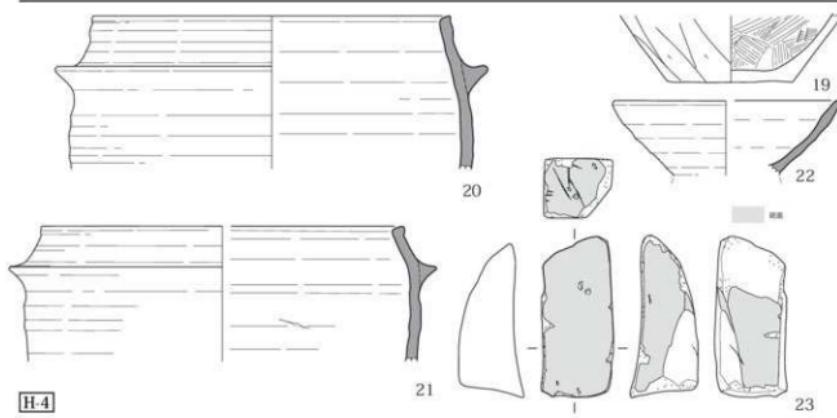


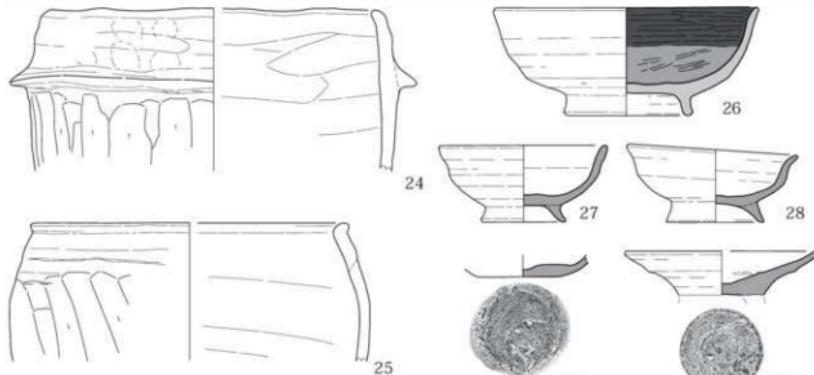
Fig.40 出土遺物 (1)



[H-3]



[H-4]



[H-5] 0 1:3 10cm

Fig.41 出土遺物 (2)

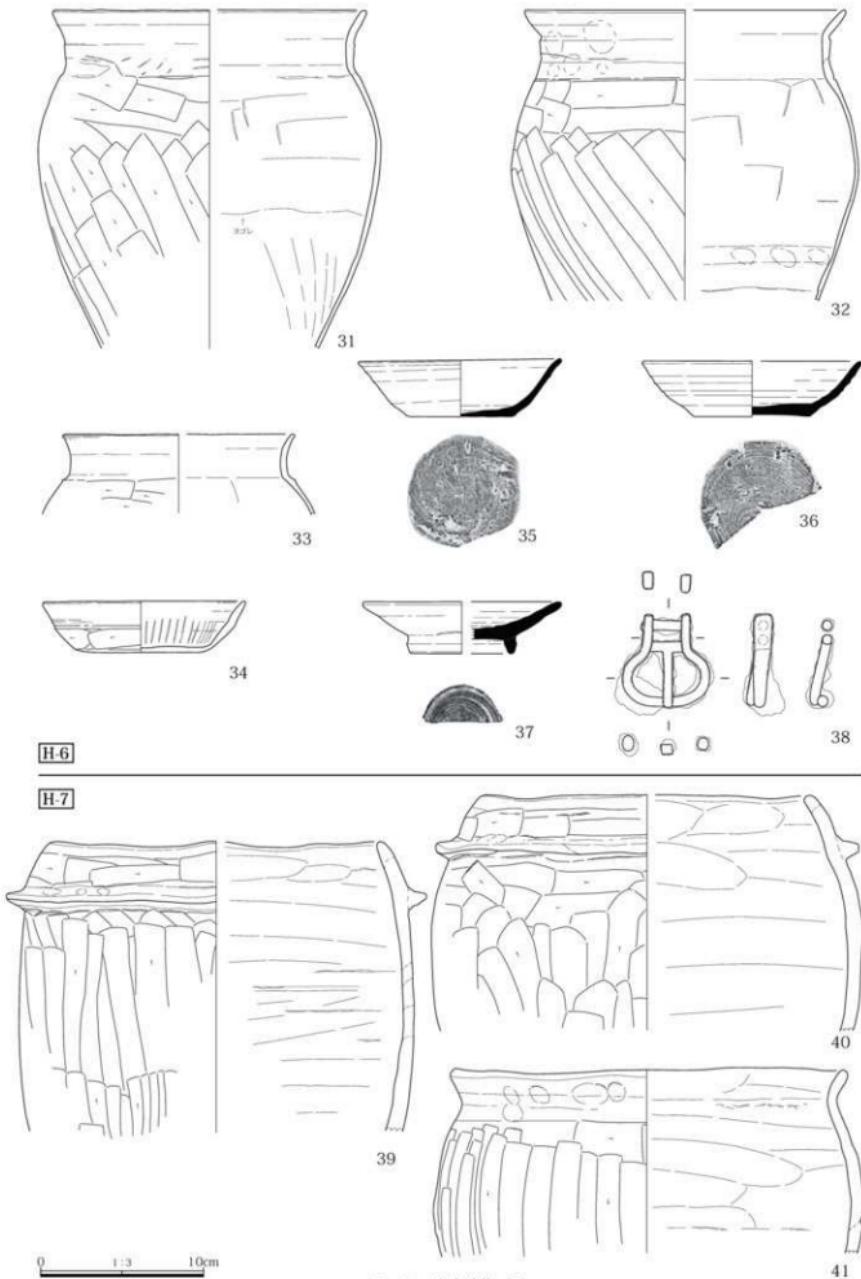
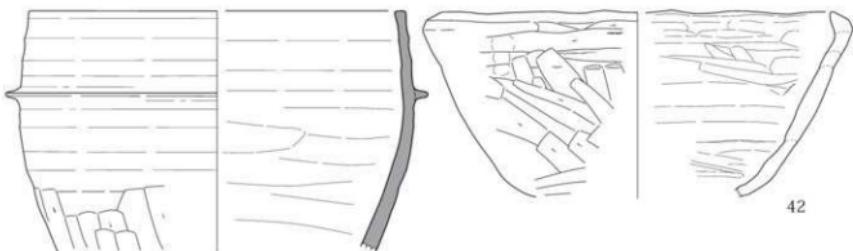
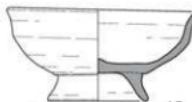


Fig.42 出土遺物 (3)

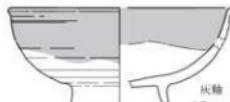


43

42



45



46



44



47



48

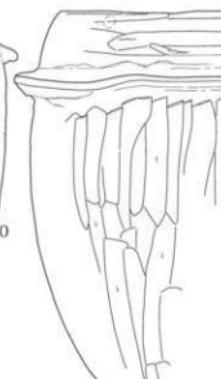


49

H-7



50



51



H-8a 0 1:3 10cm

Fig.43 出土遺物(4)

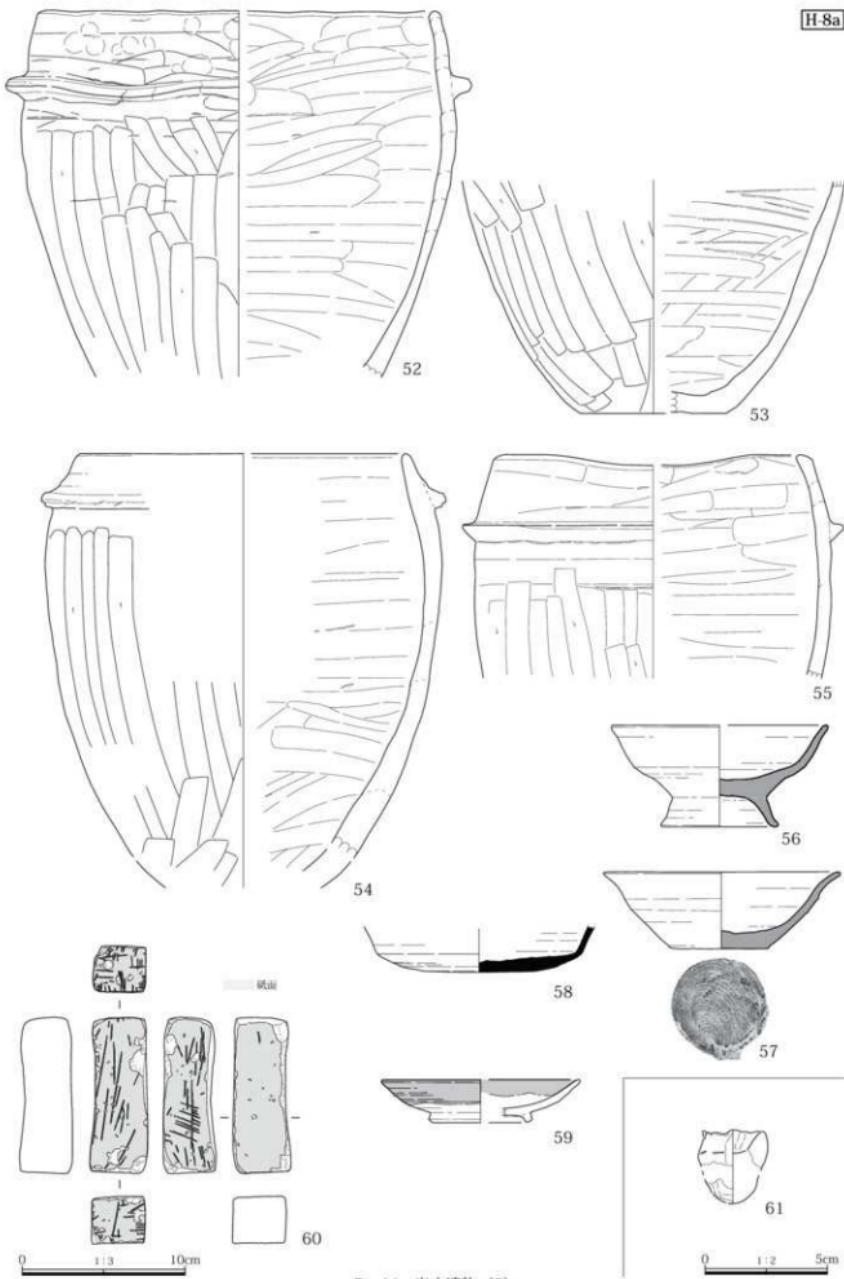
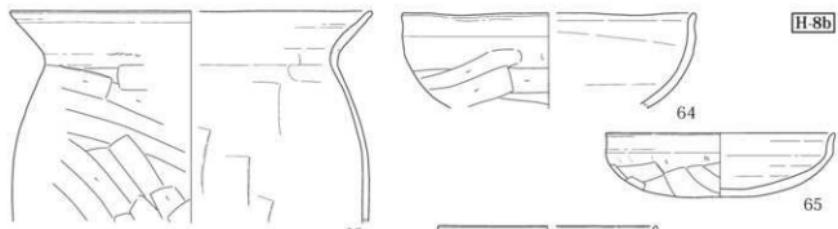
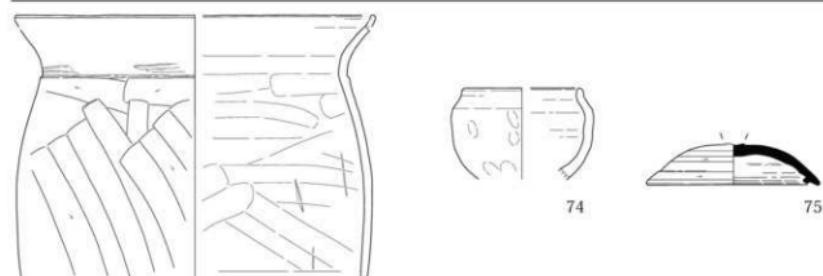
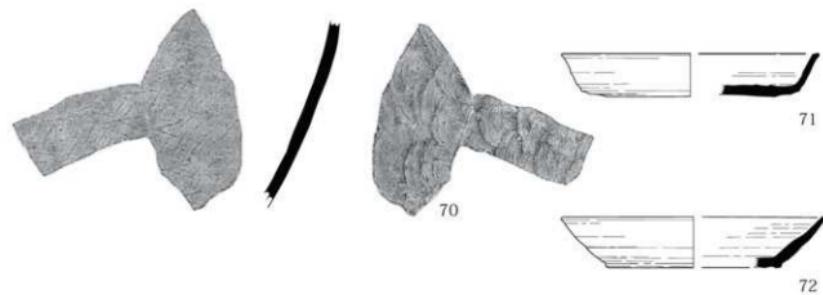
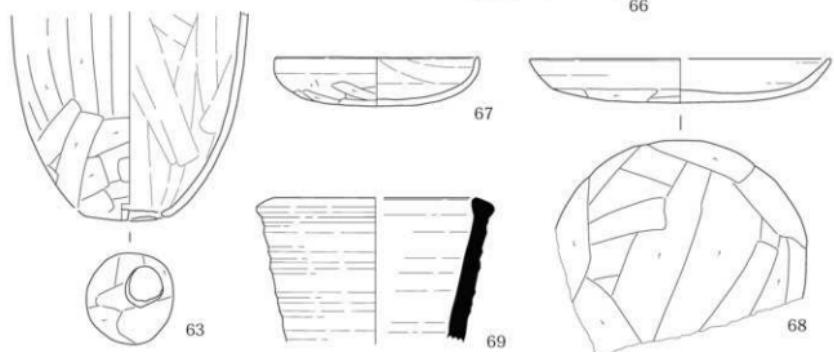


Fig.44 出土遺物 (5)



[H-8b]



[H-8c]

Fig.45 出土遺物 (6)

H.9

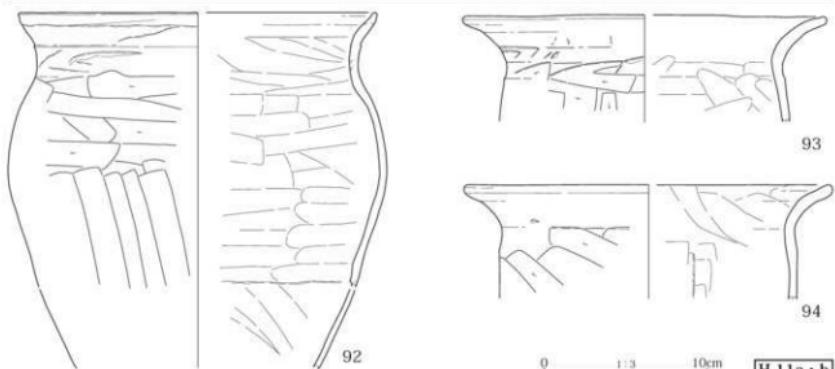
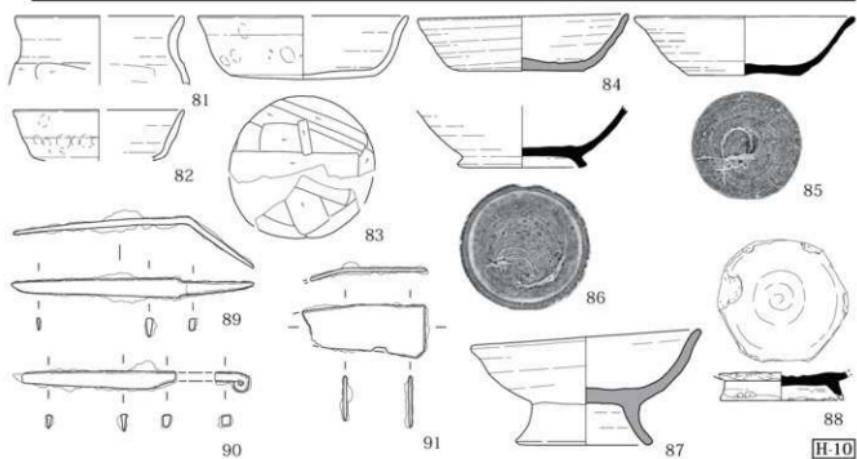
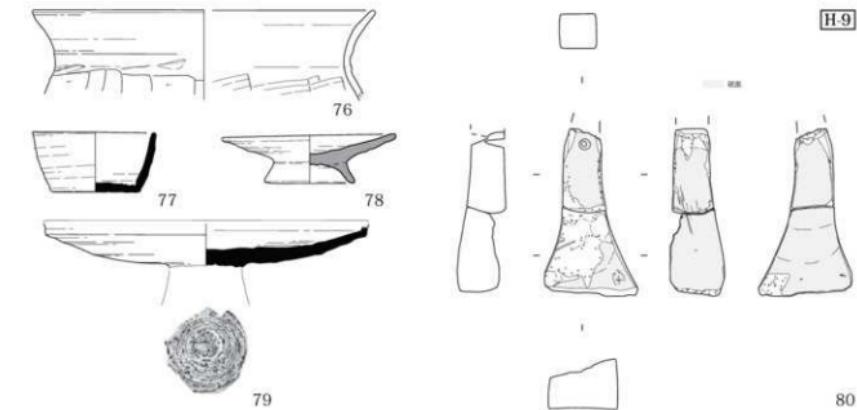
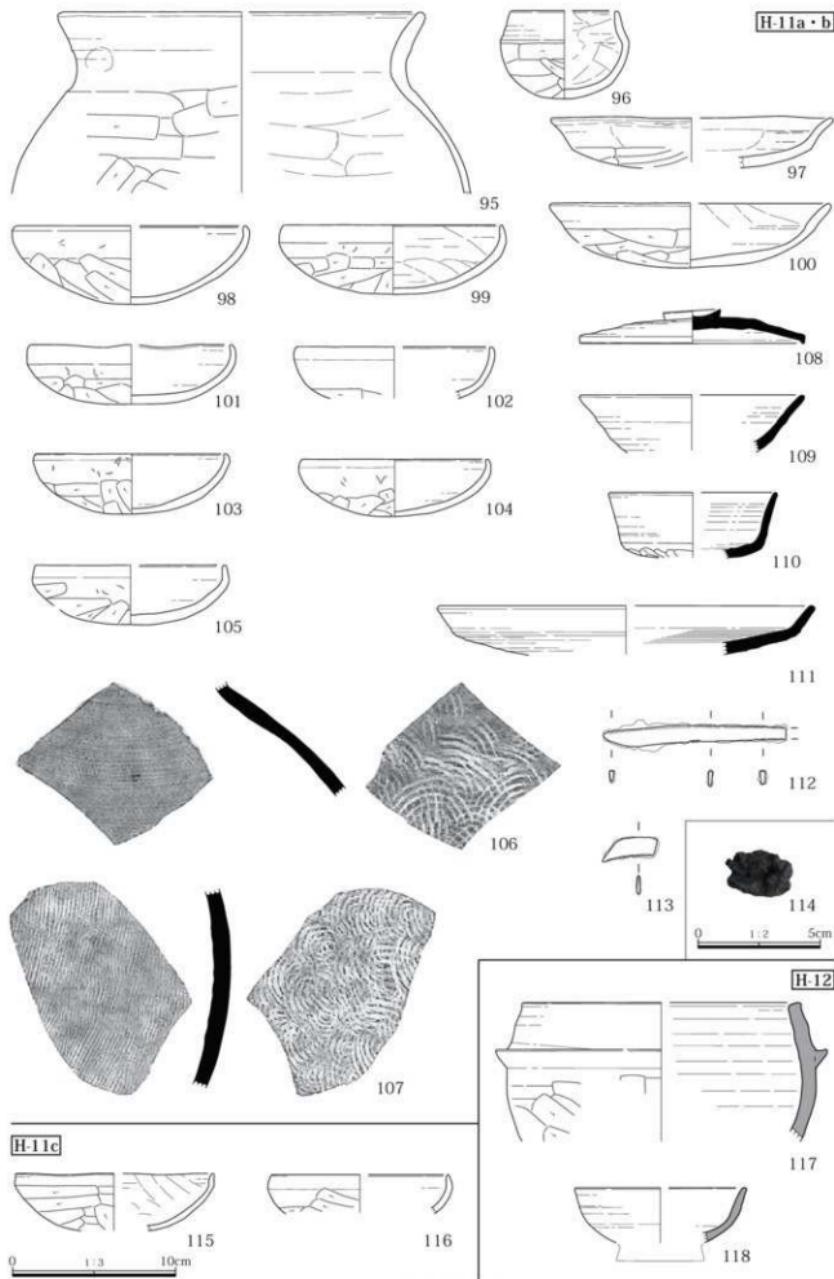


Fig.46 出土遺物 (7)



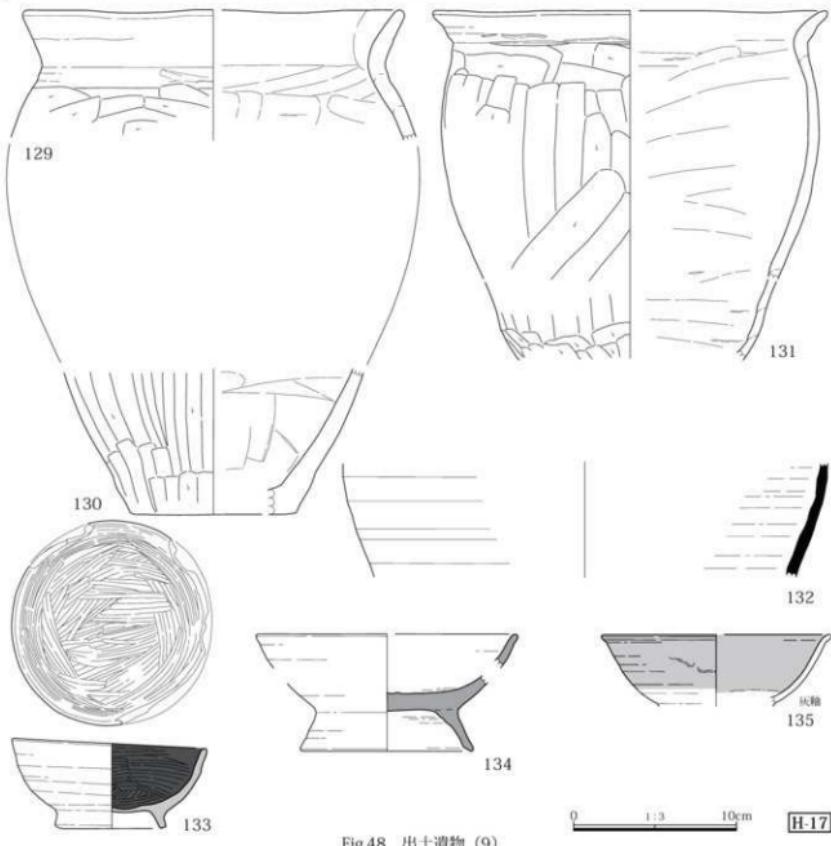
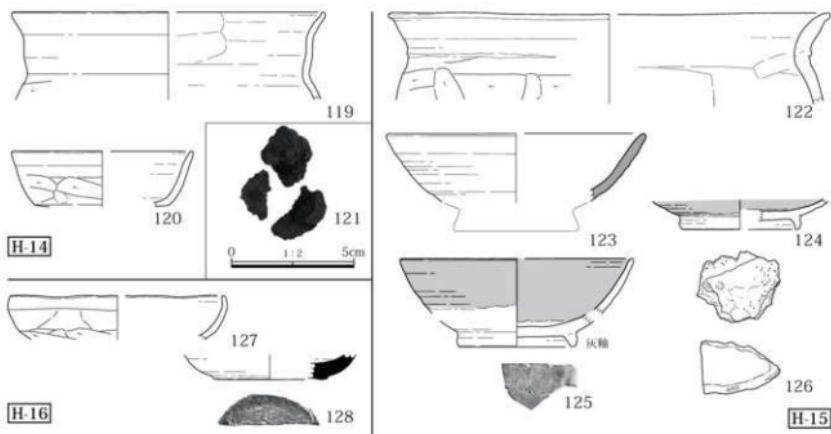
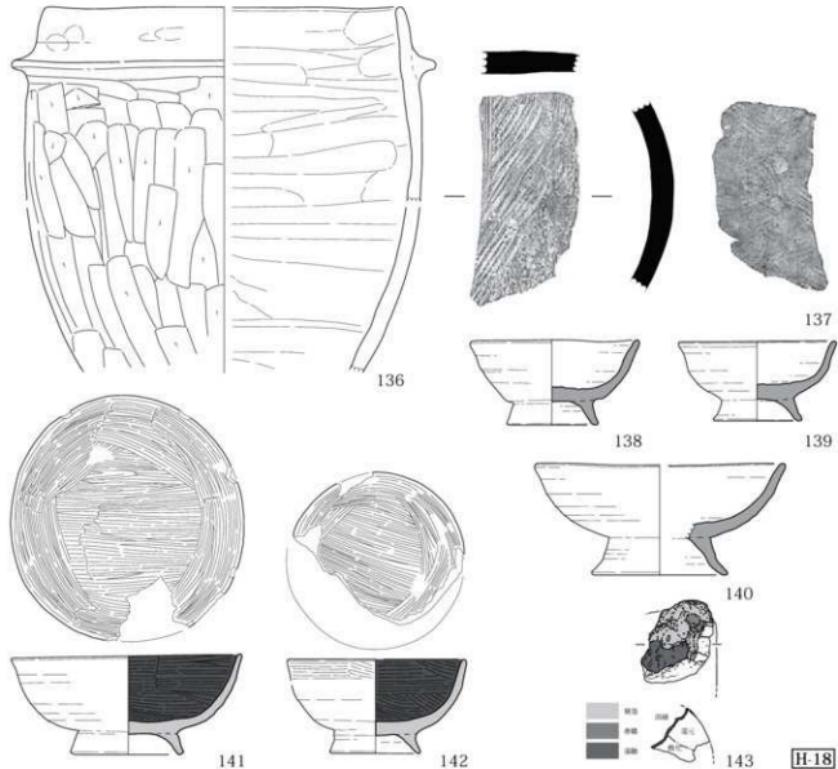
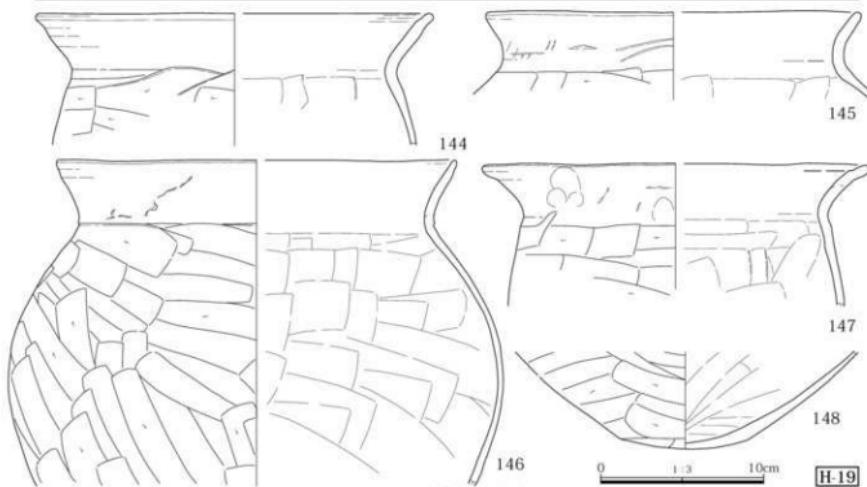


Fig. 48 出土遺物 (9)



H-18



H-19

Fig.49 出土遺物 (10)

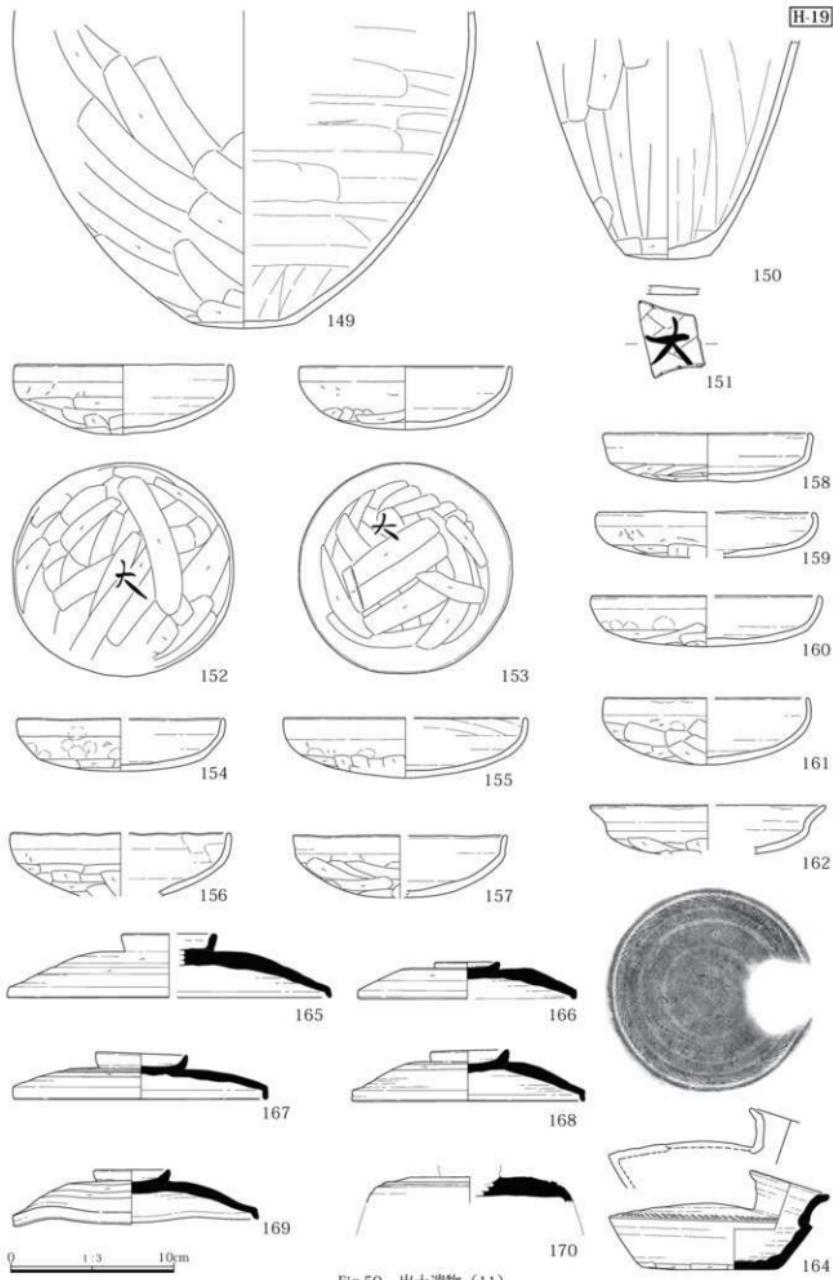


Fig.50 出土遺物 (11)

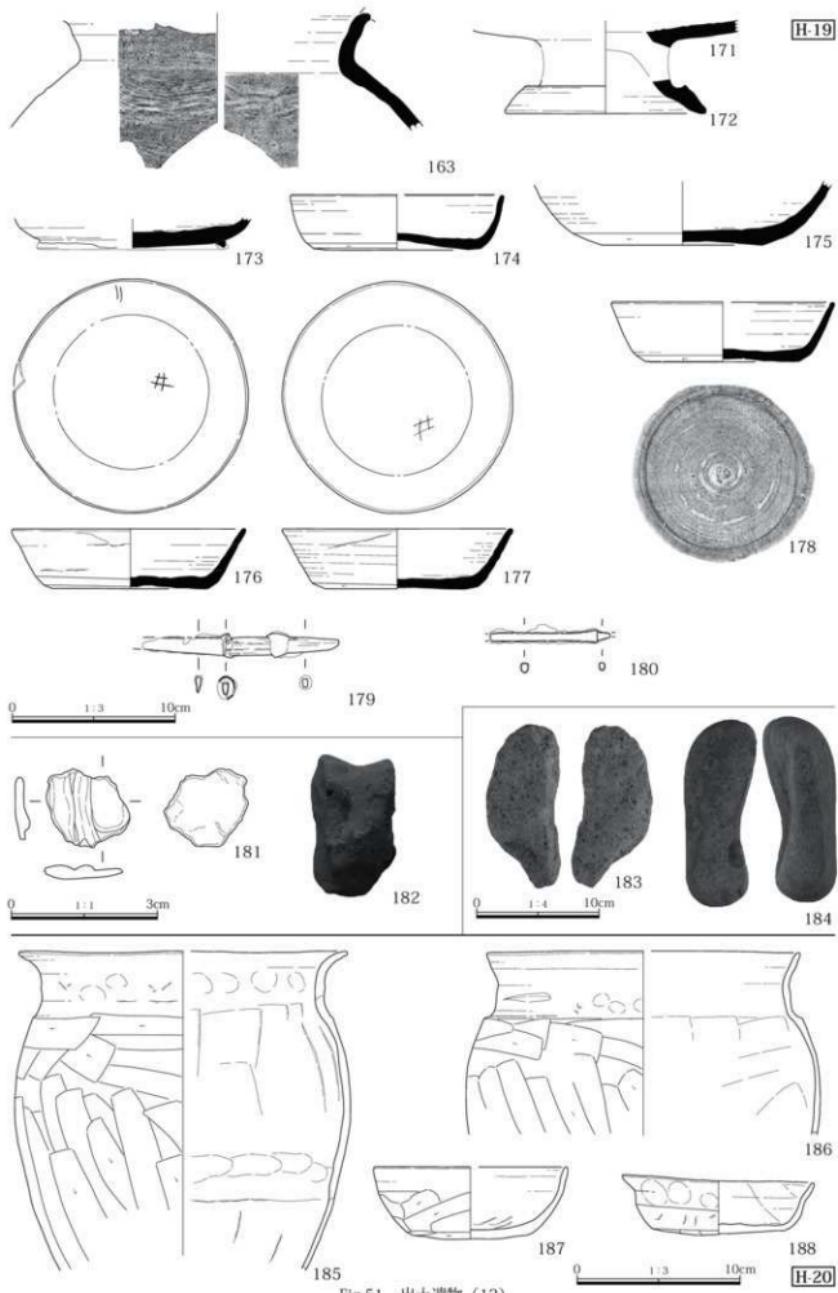


Fig.51 出土遺物 (12)

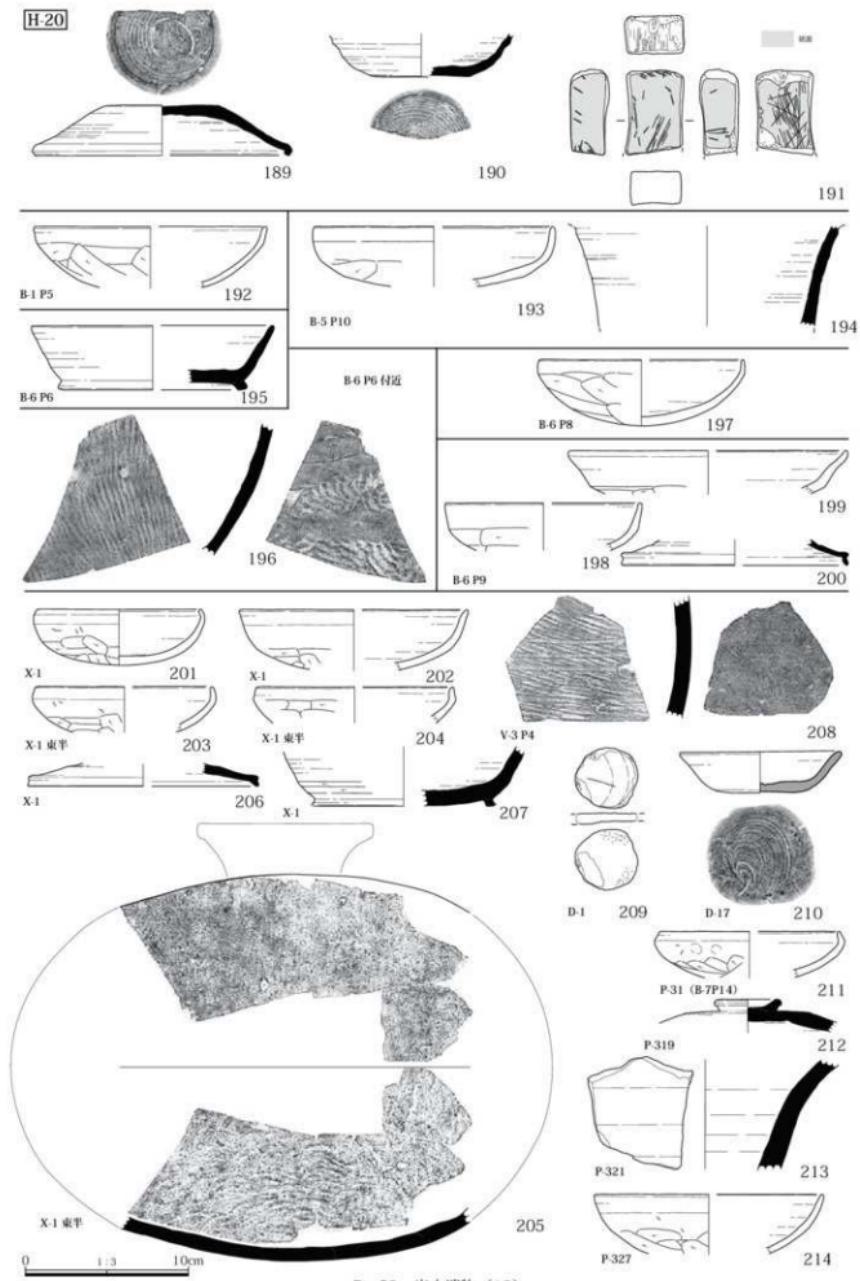


Fig.52 出土遺物 (13)

Tab.12 出土遺物觀察表(1)

番号	通名	出土	種類	目次	1回・復元・断面	地質	色調	加工	測量	備考
1	16a	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 21.8×1.4×15.3	泥炭	褐色	削痕・鋸刃・脚形(圓錐)	内・縫合テクスチャ 内・縫合テクスチャ	
2	16	廻上	土器	土器	削・削痕 1.6 7.4×14.0	泥炭	灰褐色	削痕・鋸刃・脚形(圓錐)	内・縫合テクスチャ 内・縫合テクスチャ	
3	16b	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 23.2×1.4×19.6	泥炭	褐色	削痕・鋸刃	内・縫合テクスチャ 内・縫合テクスチャ	
4	16c	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 23.0×1.4×17.5	泥炭	褐色	削痕・鋸刃・脚形(圓錐)	内・縫合テクスチャ 内・縫合テクスチャ	
5	16d	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 19.4×1.4×3.1	泥炭	褐色	削痕・鋸刃	内・縫合テクスチャ 内・縫合テクスチャ	
6	16e	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 11.4×1.4×2.9	泥炭	灰褐色	削痕	内・縫合テクスチャ 内・縫合テクスチャ	
7	16f	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 —×—×0.1	泥炭	褐色	脚形	内・縫合テクスチャ 内・縫合テクスチャ	
8	16g	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 —×—×0.4	泥炭	灰褐色	削痕・鋸刃・脚形(圓錐)	内・ロウリテクスチャ 内・ロウリテクスチャ	
9	16h	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 21.3×4.2×36.2	泥炭	褐色	鋸刃・脚形(圓錐)	内・縫合テクスチャ 内・縫合テクスチャ	
10	16i	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 20.0×6.0×30.6	泥炭	褐色	削痕	内・縫合テクスチャ 内・縫合テクスチャ	
11	16j	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 20.0×6.0×4.6	泥炭	褐色	削痕・鋸刃・脚形(圓錐)	内・縫合テクスチャ 内・縫合テクスチャ	
12	16k	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 —×—×—	泥炭	褐色	削痕・鋸刃・脚形(圓錐)	内・縫合テクスチャ 内・縫合テクスチャ	
13	16l	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 12.3×—×5.4	泥炭	褐色	削痕・鋸刃・脚形(圓錐)	内・縫合テクスチャ 内・縫合テクスチャ	
14	16m	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 11.0×—×3.6	泥炭	褐色	鋸刃・脚形(圓錐)	内・縫合テクスチャ 内・縫合テクスチャ	削痕・鋸刃に複数孔。
15	16n	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 9.9×—×3.8	泥炭	褐色	削痕・鋸刃・脚形(圓錐)	内・縫合テクスチャ 内・縫合テクスチャ	削痕・鋸刃に複数孔。
16	16o	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 11.0×—×3.8	泥炭	褐色	削痕・鋸刃・脚形(圓錐)	内・縫合テクスチャ 内・縫合テクスチャ	
17	16p	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 10.0×—×3.8	泥炭	褐色	鋸刃・脚形(圓錐)	内・縫合テクスチャ 内・縫合テクスチャ	
18	16q	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 11.0×—×3.8	泥炭	褐色	削痕・鋸刃・脚形(圓錐)	内・縫合テクスチャ 内・縫合テクスチャ	
19	16r	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 —×—×—	泥炭	褐色	鋸刃・脚形(圓錐)	内・縫合テクスチャ 内・縫合テクスチャ	
20	16s	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 —×—×—	泥炭	褐色	削痕・鋸刃	内・ロウリテクスチャ 内・ロウリテクスチャ	
21	16t	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 —×—×—	泥炭	褐色	削痕・鋸刃	内・ロウリテクスチャ 内・ロウリテクスチャ	
22	16u	廻上	土器	土器	1回・削痕 1.6 13.4×—×4.4	泥炭	褐色	削痕・鋸刃・脚形(圓錐)	内・ロウリテクスチャ 内・ロウリテクスチャ	
地質	通名	出土	種類	目次	重さ(g)	地質				備考
23	16v	廻上	土器	土器	—	石炭				
24	16w	廻上	土器	土器	21.8	泥炭				
25	16x	廻上	土器	土器	—	泥炭				
26	16y	廻上	土器	土器	—	泥炭				内底上の山字溝出地。
27	16z	廻上	土器	土器	—	泥炭				
28	16aa	廻上	土器	土器	—	泥炭				
29	16ab	廻上	土器	土器	—	泥炭				削痕・鋸刃(右側)・脚形(圓錐)
30	16ac	廻上	土器	土器	—	泥炭				削痕・鋸刃。
31	16ad	廻上	土器	土器	—	泥炭				内部・密着層有れ。
32	16ae	廻上	土器	土器	—	泥炭				内底位付地。
33	16af	廻上	土器	土器	—	泥炭				内底・密着層・脚形(圓錐)・脚部・密着層。
34	16ag	廻上	土器	土器	—	泥炭				堅丈あり。
35	16ah	廻上	土器	土器	—	泥炭				底削痕・脚切込。
36	16ai	廻上	土器	土器	—	泥炭				底削痕・脚切込。
37	16aj	廻上	土器	土器	—	泥炭				底削痕・脚切込。
地質	通名	出土	種類	目次	重さ(g)	地質				備考
38	16ak	廻上	土器	土器	—	泥炭				
39	16al	廻上	土器	土器	—	泥炭				
40	16am	廻上	土器	土器	—	泥炭				
41	16an	廻上	土器	土器	—	泥炭				
42	16ao	廻上	土器	土器	—	泥炭				
43	16ap	廻上	土器	土器	—	泥炭				
44	16aq	廻上	土器	土器	—	泥炭				
45	16ar	廻上	土器	土器	—	泥炭				
46	16as	廻上	土器	土器	—	泥炭				
47	16at	廻上	土器	土器	—	泥炭				
48	16au	廻上	土器	土器	—	泥炭				
49	16av	廻上	土器	土器	—	泥炭				
50	16aw	廻上	土器	土器	—	泥炭				
51	16ax	廻上	土器	土器	—	泥炭				
52	16ay	廻上	土器	土器	—	泥炭				
53	16az	廻上	土器	土器	—	泥炭				
54	16ba	廻上	土器	土器	—	泥炭				
55	16bb	廻上	土器	土器	—	泥炭				
56	16bc	廻上	土器	土器	—	泥炭				
57	16bd	廻上	土器	土器	—	泥炭				
58	16be	廻上	土器	土器	—	泥炭				
59	16bf	廻上	土器	土器	—	泥炭				
60	16bg	廻上	土器	土器	—	泥炭				
地質	通名	出土	種類	目次	重さ(g)	地質				備考
61	16bh	廻上	土器	土器	—	泥炭				
62	16bi	廻上	土器	土器	—	泥炭				
63	16bj	廻上	土器	土器	—	泥炭				
64	16bk	廻上	土器	土器	—	泥炭				
65	16bl	廻上	土器	土器	—	泥炭				
66	16bm	廻上	土器	土器	—	泥炭				
67	16bn	廻上	土器	土器	—	泥炭				
68	16bo	廻上	土器	土器	—	泥炭				
69	16bp	廻上	土器	土器	—	泥炭				
70	16bq	廻上	土器	土器	—	泥炭				
71	16br	廻上	土器	土器	—	泥炭				
72	16bs	廻上	土器	土器	—	泥炭				
73	16bt	廻上	土器	土器	—	泥炭				
74	16bu	廻上	土器	土器	—	泥炭				
75	16bv	廻上	土器	土器	—	泥炭				
76	16bw	廻上	土器	土器	—	泥炭				
77	16bx	廻上	土器	土器	—	泥炭				
78	16by	廻上	土器	土器	—	泥炭				
79	16bz	廻上	土器	土器	—	泥炭				
80	16ca	廻上	土器	土器	—	泥炭				
81	16cb	廻上	土器	土器	—	泥炭				
82	16cc	廻上	土器	土器	—	泥炭				
83	16cd	廻上	土器	土器	—	泥炭				
84	16ce	廻上	土器	土器	—	泥炭				
85	16cf	廻上	土器	土器	—	泥炭				
86	16cg	廻上	土器	土器	—	泥炭				
87	16ch	廻上	土器	土器	—	泥炭				
88	16ci	廻上	土器	土器	—	泥炭				
89	16cj	廻上	土器	土器	—	泥炭				
90	16ck	廻上	土器	土器	—	泥炭				
91	16cl	廻上	土器	土器	—	泥炭				
92	16cm	廻上	土器	土器	—	泥炭				
93	16cn	廻上	土器	土器	—	泥炭				
94	16co	廻上	土器	土器	—	泥炭				
95	16cp	廻上	土器	土器	—	泥炭				
96	16cq	廻上	土器	土器	—	泥炭				
97	16cr	廻上	土器	土器	—	泥炭				
98	16cs	廻上	土器	土器	—	泥炭				
99	16ct	廻上	土器	土器	—	泥炭				
100	16cu	廻上	土器	土器	—	泥炭				
101	16cv	廻上	土器	土器	—	泥炭				
102	16cw	廻上	土器	土器	—	泥炭				
103	16cx	廻上	土器	土器	—	泥炭				
104	16cy	廻上	土器	土器	—	泥炭				
105	16cz	廻上	土器	土器	—	泥炭				
106	16da	廻上	土器	土器	—	泥炭				
107	16db	廻上	土器	土器	—	泥炭				
108	16dc	廻上	土器	土器	—	泥炭				
109	16dd	廻上	土器	土器	—	泥炭				
110	16de	廻上	土器	土器	—	泥炭				
111	16df	廻上	土器	土器	—	泥炭				
112	16dg	廻上	土器	土器	—	泥炭				
113	16dh	廻上	土器	土器	—	泥炭				
114	16di	廻上	土器	土器	—	泥炭				
115	16dj	廻上	土器	土器	—	泥炭				
116	16dk	廻上	土器	土器	—	泥炭				
117	16dl	廻上	土器	土器	—	泥炭				
118	16dm	廻上	土器	土器	—	泥炭				
119	16dn	廻上	土器	土器	—	泥炭				
120	16do	廻上	土器	土器	—	泥炭				
121	16dp	廻上	土器	土器	—	泥炭				
122	16dq	廻上	土器	土器	—	泥炭				
123	16dr	廻上	土器	土器	—	泥炭				
124	16ds	廻上	土器	土器	—	泥炭				
125	16dt	廻上	土器	土器	—	泥炭				
126	16du	廻上	土器	土器	—	泥炭				
127	16dv	廻上	土器	土器	—	泥炭				
128	16dw	廻上	土器	土器	—	泥炭				
129	16dx	廻上	土器	土器	—	泥炭				
130	16dy	廻上	土器	土器	—	泥炭				
131	16dz	廻上	土器	土器	—	泥炭				
132	16ea	廻上	土器	土器	—	泥炭				
133	16eb	廻上	土器	土器	—	泥炭				
134	16ec	廻上	土器	土器	—	泥炭				
135	16ed	廻上	土器	土器	—	泥炭				
136	16ee	廻上	土器	土器	—	泥炭				
137	16ef	廻上	土器	土器	—	泥炭				
138	16eg	廻上	土器	土器	—	泥炭				
139	16eh	廻上	土器	土器	—	泥炭				
140	16ei	廻上	土器	土器	—	泥炭				
141	16ej	廻上	土器	土器	—	泥炭				
142	16ek	廻上	土器	土器	—	泥炭				
143	16el	廻上	土器	土器	—	泥炭				
144	16em	廻上	土器	土器	—	泥炭				
145	16en	廻上	土器	土器	—	泥炭				
146	16eo	廻上	土器	土器	—	泥炭				
147	16ep	廻上	土器	土器	—	泥炭				
148	16eq	廻上	土器	土器	—	泥炭				
149	16er	廻上	土器</							

Tab.13 出土遺物觀察表 (2)

指定值  残存值

Tab.14 出土遺物観察表(3)

登録 No.	遺物 名	高さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ(g)		備考
					上部	下部	
121	H-14 魔玉	一	直溝	15			
122	H-15 魔玉	直溝	圓溝	直溝	1.9×1.9×1.9	27.0	内 ナラ
123	H-15 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	15.0	内 ナラ
124	H-15 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	17.0	内 ナラ
125	H-15 サブレ	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	25.4	内 ナラ
126	遺物	高さ	圓溝	圓溝	直溝	直溝	
127	H-15 魔玉	一	直溝	56			
128	遺物	高さ	圓溝	圓溝	直溝	直溝	
129	H-16 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	13.0	内 ナラ
130	H-17 カツリ	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	12.0	内 ナラ
131	H-17 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	22.0	内 ナラ
132	H-17 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	16.0	内 ナラ
133	H-17 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	11.0	内 ナラ
134	H-17 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	10.5	内 ナラ
135	H-17 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	14.0	内 ナラ
136	H-18 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	21.0	内 ナラ
137	H-18 カツリ	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	22.0	内 ナラ
138	H-18 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	10.5	内 ナラ
139	H-18 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	9.0	内 ナラ
140	H-18 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	13.0	内 ナラ
141	H-18 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	14.0	内 ナラ
142	H-18 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	10.0	内 ナラ
143	H-18 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	41	内 ナラ
144	遺物	高さ	圓溝	圓溝	直溝	直溝	
145	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	22.0	内 ナラ
146	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	24.0	内 ナラ
147	H-19 カツリ	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	22.0	内 ナラ
148	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	17.0	内 ナラ
149	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	12.0	内 ナラ
150	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	13.0	内 ナラ
151	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	12.0	内 ナラ
152	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	4.0	内 ナラ
153	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	2.0	内 ナラ
154	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
155	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
156	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
157	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
158	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
159	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
160	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
161	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
162	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
163	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
164	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
165	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
166	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
167	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
168	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
169	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
170	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
171	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
172	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
173	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
174	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
175	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
176	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
177	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ
178	H-19 魔玉	直溝	直溝	直溝	1.9×1.9×1.9	1.0	内 ナラ

&lt; &gt; 推定値 ( ) 残存値

Tab.15 土出土遺物觀察表(4)

遺物名	出土地点	種類	特徴	測定値	備考
179 H-19 墓1 石製品 万子	17	測定値			
180 H-19 墓1 石製品 鋼	9				
182 H-19 墓1 石製品 石磨刀?	2				
183 H-19 墓1 石製品 磨盤石	324			磨盤石	
184 H-19 墓1 石製品 砂打	496			多孔質アルカリ	磨盤に附着。
遺物名	出土地点	種類	特徴	測定値	備考
185 H-20 墓1 上部層 磐	1,048-1,050 1.0	20.0-21.0 磐石	丸形	磐石	
186 H-20 墓1 上部層 磐	1,048-1,050 1.2	19.9-22.1 磐石	楕円	磐石	丸形・ラウンドナード
187 H-20 墓1 上部層 磐	1,048-1,050 1.2	11.0-7.8+4.4	普通	磐石	磐石・丸形・楕円
188 H-20 墓1 上部層 磐	1,048-1,050 3.4	11.7-8.5+4.0	普通	小磯	丸形?
189 H-20 墓1 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	11.6-8.8+3.1	普通	小磯	丸形・磐石
190 H-20 墓1 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	-1.6.2-江田	普通	小磯	丸形・磐石
191 H-20 墓1 石製品 磐石	68				石製
遺物名	出土地点	種類	特徴	測定値	備考
192 H-1 P5 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	(14.2)-11.3 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
193 H-1 P10 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	(14.6)-11.3 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
194 H-1 P10 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	-11.5.1 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
195 H-1 P10 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	14.8-11.0+3.9	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
196 H-1 P10 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	-11.5.1 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
197 H-1 P10 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	(12.4)-11.4 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
198 H-1 P10 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	12.0-11.2 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
199 H-1 P10 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	12.0-11.2 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
200 H-1 P10 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	11.8-11.2 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
201 X-1 墓1 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	10.0-11.3 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
202 X-1 墓1 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	10.0-11.3 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
203 X-1 墓1 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	10.0-11.3 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
204 X-1 墓1 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	10.0-11.3 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
205 X-1 墓1 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	-11.3.1 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
206 X-1 墓1 磐	1,048-1,050 1.5	(14.0)-11.3 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
207 X-1 墓1 磐	1,048-1,050 1.5	-11.3.1 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
208 V-3 P4 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	-11.3.1 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
209 D-1 T-17 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	-11.3.1 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
210 D-17 墓1 磐	1,048-1,050 1.5	9.8-9.4+2.6 磐	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
211 P-31 墓1 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	(11.0)-11.3 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
212 P-319 墓1 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	-11.3.1 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
213 P-201 墓1 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	-11.3.1 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード
214 P-227 墓1 上部層 磐	1,048-1,050 1.5	(14.0)-11.3 磐石	普通	磐石	丸形・ラウンドナード

Tab.16 穴穴建物跡出土土器・陶器一覧表(重量比)

遺構名	土師器(g)		須恵器(g)		陶器(g)		小計(g)
	小型品 (坪・堆積)	大型品 (坪・堆積)	小型品 (坪・堆積)	大型品 (坪・堆積)	灰陶・綠 釉		
H-1	324	2,530	6	60	0	2,920	
H-2	8	0	106	0	0	114	
H-3	692	4,969	4	104	0	5,769	
H-4	88	360	158	1,114	0	1,720	
H-5	34	570	782	58	0	1,444	
H-6	620	1,588	530	544	0	3,282	
H-7	302	2,946	602	1,314	84	5,248	
H-8	1,796	6,212	1,030	3,180	18	12,236	
H-9	540	1,542	597	532	0	3,211	
H-10	1,442	2,037	920	266	0	4,665	
遺構名	土師器(g)		須恵器(g)		陶器(g)		
	小型品 (坪・堆積)	大型品 (坪・堆積)	小型品 (坪・堆積)	大型品 (坪・堆積)	灰陶・綠 釉		
H-11	2,370	5,867	478	636	8	9,359	
H-12	694	1,134	168	1,074	8	3,078	
H-13	0	8	0	0	0	8	
H-14	54	390	98	6	0	548	
H-15	26	189	56	42	55	368	
H-16	92	334	36	116	0	578	
H-17	88	1,742	420	144	76	2,470	
H-18	242	1,220	995	732	0	3,189	
H-19	3,310	5,204	2,418	1,164	0	12,096	
H-20	261	1,556	290	58	0	2,165	
合計(g)	12,983	40,398	9,694	11,144	249	74,468	

# VI 荻窪倉兼III遺跡から出土した炭化材の樹種

## はじめに

荻窪倉兼III遺跡の10世紀とされる焼失家屋から出土した炭化材について、用材選択を検討するための樹種同定を実施した。周辺地域では、7～9世紀の炭化材について樹種同定を実施した例があるが、10世紀の資料は調査した例がない。

この機会に7～10世紀における竪穴住居跡の建築部材の用材選択について概観する。また、その背景となる古植生についても検討する。

## 1. 試料

試料は、10世紀の竪穴住建物跡であるH-8aから出土した炭化材12点である。

## 2. 分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。炭化材の周囲を樹脂でコーティングして補強する。走査型電子顕微鏡（低真空）で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Wheeler他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

## 3. 結果

樹種同定結果をTab.17に示す。炭化材は、C-Na 9の1点が樹皮であり、他の11点は全て広葉樹のコナラ属クヌギ節に同定された。解剖学的特徴等を記す。

- ・コナラ属クヌギ節 Quercus sect. Cerris  
ブナ科

環孔材。孔圈部はほぼ1列、孔圈外で急激に道管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔孔は單穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、單列、1～20細胞高のもとの複合放射組織とがある。

Tab.17 樹種同定結果

遺構	時期	試料No.	形状	樹種
H-8a	10世紀	C-Na 1	芯持材	コナラ属クヌギ節
		C-Na 3	芯持丸木	コナラ属クヌギ節
		C-Na 4	半裁状	コナラ属クヌギ節
		C-Na 5	芯持丸木	コナラ属クヌギ節
		C-Na 6	破片	コナラ属クヌギ節
		C-Na 7	破片	コナラ属クヌギ節
		C-Na 8	破片	コナラ属クヌギ節
		C-Na 9	破片	樹皮
		C-Na 10	破片	コナラ属クヌギ節
		C-Na 11	破片	コナラ属クヌギ節
		C-Na 12	ミカン割状	コナラ属クヌギ節
		C-Na 13	半裁状	コナラ属クヌギ節

## 4. 考察

### （1）用材選択

H-8aから出土した炭化材は、元の形状が判断できない破片が多いが、芯持丸木、芯持材、半裁状、ミカン割状等を呈する資料があり、建築部材の中に芯持丸木材が含まれていたことが推定される。また、樹皮が1点確認されたことから、樹皮付きで使用された部材があったと考えられる。

炭化材は、樹皮1点を除く11点がクヌギ節に同定された。クヌギ節にはクヌギとアベマキの2種があるが、現在の分布をみると、クヌギが関東地方に広く分布するのに対し、アベマキは西日本を中心に分布し、関東地方

には分布していない。このことを考慮すると、今回のケヌギ節はケヌギの可能性が高い。ケヌギは、二次林や河畔等に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度が高い。材質を考慮すれば、建築部材は強度の高い木材を選択・利用したことが推定される。

## (2) 赤城山南麓における建築部材の用材選択

伊東・山田（2012）のデータベースによれば、赤城山南麓斜面で竪穴住居跡から出土した炭化材の樹種同定を実施した例は、長岡遺跡（旧柏川村）で7世紀後半、本遺跡にも近い堀越中道遺跡（旧大胡町）で9世紀、湯之口遺跡（旧柏川村）で平安時代の報告例がある。また、本遺跡の西方に位置する上泉下中峯遺跡でも7世紀代の竪穴住居跡から出土した炭化材の樹種同定が実施されている（高橋 2021）。

時期別にみると、7世紀では長岡遺跡の5点が全てケヌギ節、上泉下中峯遺跡の33点はケヌギ節32点、コナラ節1点であった。一方、9世紀では、堀越中道遺跡でケヌギ節やクリを中心として、コナラ節やウコギ属が混じる組成が報告されている。また、湯之口遺跡の平安時代とされる資料もコナラ節やクリを中心としてクマシデ属やイヌエンジュ属が混じる組成が報告されている。この結果から、7世紀ではケヌギ節を中心とした用材選択であるが、9世紀や平安時代とされる資料ではケヌギ節やコナラ節にクリが多く利用され、さらにクマシデ属、イヌエンジュ属、ウコギ属等が少量混じる等、7世紀とは異なる傾向を示す。

今回の結果では10世紀の建築部材にケヌギ節のみが認められ、7世紀の資料と似た傾向を示す。この結果から、9世紀にクリを多く含む組成に変化した建築部材が10世紀にはまたケヌギ節主体の組成に戻った可能性がある。10世紀の資料は今回他に知られておらず、今後各時期の資料を増やしつつ建築部材の時期別変化を検討することが必要である。

## (3) 赤城山南麓における古代の古植生

赤城山南麓では、花粉分析を実施した例がほとんど無いため、古植生の詳細は不明な点が多い。本遺跡に比較的近い遺跡では二之宮千足遺跡（前橋市）で古代を含む幅広い時期の堆積物が得られており、その花粉分析からコナラ亜属を主体とした古植生が推定されている（パリノ・サーヴェイ株式会社, 1992）。しかし、二之宮千足遺跡は標高も低く、地形的な立地等も考慮すると、赤城山の特に中腹以上の古植生を反映しているとは言えない。そこで、建築部材と同じく周辺植生を反映すると考えられる燃料材を中心とした樹種同定結果から古植生を検討する。

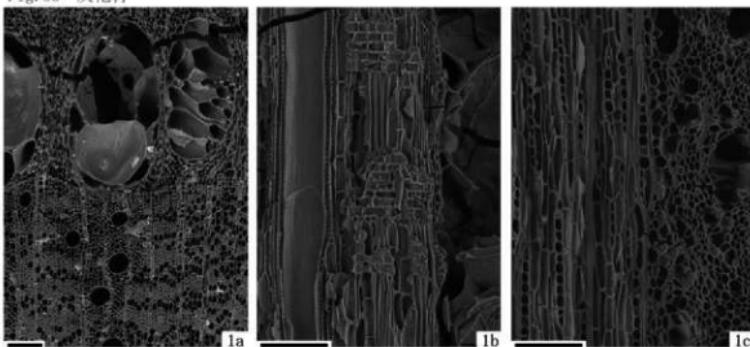
伊東・山田（2012）のデータベースの中から赤城山南麓地域における古代の調査例を抽出すると、燃料材の樹種同定を実施した遺跡として、乙西尾引遺跡（旧大胡町）、柏倉芳見沢遺跡（旧宮城村）、今井見切塚遺跡及び今井三騎堂遺跡（旧赤堀町）がある。乙西尾引遺跡は8世紀中葉～9世紀中葉の製鉄炉とそれに伴う炭窯出土の炭化材、柏倉芳見沢遺跡は平安時代の炭窯出土の炭化材、今井見切塚遺跡及び今井三騎堂遺跡は9～10世紀の炭窯出土の炭化材である。いずれの遺跡でもケヌギ節が圧倒的多数を占めている。ケヌギ節以外では、乙西尾引遺跡でコナラ節とエゴノキ属、今井見切塚遺跡でタケア科が確認されている。ケヌギ節が薪炭材として優良である点を考慮すれば、炭窯や製鉄炉出土炭化材にケヌギ節が選択的に利用されており、ケヌギ節が実際の分布以上に強調されている可能性がある。一方、圧倒的にケヌギ節が多い状況を考慮すれば、8世紀中葉～10世紀の赤城山南麓では、大量の木炭を生産できるだけのケヌギ林が継続して存在していたことが推定される。このことは、建築部材にケヌギ節が多い結果とも整合的である。建築部材や燃料材にケヌギ節と共に認められたコナラ節、エゴノキ属、クマシデ属、イヌエンジュ属、ウコギ属、クリは、ケヌギ節と共に二次林等を構成する落葉広葉樹であり、ケヌギ節と共に生育していたことが推定される。

なお、茨城県古河市や栃木県小山市などの山地に接していない河岸段丘上に位置する遺跡でも8世紀頃にクリ材の利用が増加する傾向が見られる（株式会社古生態研究所, 2021）。地形条件が異なる地域においても同様にクリ材利用が増加する傾向が見られること、クリが食用可能な果樹であること等を考慮すると、栽培によっ

てクリ材の利用が増加した可能性もある。

台地上の遺跡では花粉分析が可能な土壤試料が得られることが多い。一方、炭化材や炭化種実は台地上の遺跡でも分解されることなく出土することから、住居跡のカマドに残る炭化材や炭化種実の種類に関する資料を継続して集積していくことで、より詳細な古植生を明らかにできる可能性がある。(高橋 敦)

Fig. 53 炭化材



1. コナラ属クヌギ節(C-Na13)

a : 木口, b : 柱目, c : 板目

各写真的スケールは0.1mm

## 引用文献

- 林 昭三,1991.日本産木材 路微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料.31, 京都大学木質科学研究所.81-181.
- 伊東隆夫,1996.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料.32, 京都大学木質科学研究所.66-176.
- 伊東隆夫,1997.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料.33, 京都大学木質科学研究所.83-201.
- 伊東隆夫,1998.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料.34, 京都大学木質科学研究所.30-166.
- 伊東隆夫,1999.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料.35, 京都大学木質科学研究所.47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久, (編),2012.木の考古学 出土木製品用データベース. 海青社.444p.
- 株式会社古生態研究所,2021.鹿相地遺跡の自然科學分析. 鹿相地遺跡 斧石体育施設整備事業幸江崎2期地区に伴う歴史文化財発掘調査報告2. 古河市埋蔵文化財調査報告書第24集. 茨城県西農林事務所地土地改良事務所・古河市教育委員会・山下工芸株式会社.281-293.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,1992.「二之宮千足道路」の古墳地盤解説、「二之宮千足道路(自然科學・分析編)」,都島埋蔵文化財調査事業地盤調査報告第125集,建設省・群馬県教育委員会・財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団.61-111.
- 鳥地 謙・伊東隆夫,1982.岡説木材組織. 地球社.176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998. 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顯微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修). 海青社.122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

## VII 萩窪倉兼三遺跡の竈について

外山 政子

### はじめに

本遺跡は北側に展開する萩窪倉兼遺跡・同II遺跡、西の谷を挟んだ上泉下中峯遺跡とともに一体の遺跡群である。竪穴建物や竈構築の特徴において多くの共通事項が確認され、古代の当地域の中核的な遺跡である。

本遺跡の調査にあたって、近年私達が提唱している竈構造・構築技術について、以下の事項等を検証することも目標の一つとした（註2）。

- ① 構築にあたって、必ず空焚き作業を行っている。
- ② 本来の燃焼室は、空焚き痕跡の内側である（従って従来の燃焼室計測値を修正する必要が生じている）。
- ③ 燃焼ガスの排出方法によって倒炎・昇炎・還流の3方式が存在する（註3）。
- ④ 竈は左右どちらかを基準に設計されており、煙道も基準線に寄る。煙道空間を捉えるための工夫が必要である。

また、これらに加え本遺跡調査では、従来認識していなかった事象が二点明らかになった。

一点は、煙道途中で見られた焼土ブロックの存在である。幸い、本遺跡調査直後に取り組んだ上泉下中峯遺跡でも認められ、「煙道空間を保持する装置」であると解釈できた（註4）。竈構築技術についての新知見である。

もう一点は、調査が先行した本遺跡 H-19 等で、数次にわたる竪穴建物の改修痕跡が確認されたことである。これを受けて、上泉下中峯遺跡で検討の結果、建物の改修は竈改修も伴うことが明らかになった。竈移設を伴う例と移設せず改修する例があり、両例とも、柱穴や貯蔵穴位置、壁周溝の切り直し改修がなされていた（註5）。竈移設を行わない例においては、燃焼部のみ改修を行っていると解釈していたが、今回の再検討によって、煙道部にも改修がみられ、空焚き作業が行われていたことが明らかになった。

これらの二点も含めて、竈構築技術についての検討を行いたい。なお個々の遺構説明には便宜上、萩窪倉兼III遺跡にはOK、上泉下中峯遺跡にはKSの略号を付して示す。写真を多用したが、図面で示すより臨場感を持っていただけるかとの考え方である。

### I 本遺跡の竈の概要

#### 1 竈と建物

本遺跡では、竪穴建物跡 26軒のうち 19軒で竈が確認された。他遺構との重複や、調査区外で確認出来ない建物も、すべて竈が設置されていたと考えられる。竈の設置方向は建物の東辺が主流で、北辺は古墳時代後期のOKH-1b・3の2軒である。竈の設置方向については両遺跡とも同じ傾向を示す。

#### 2 燃焼部施設

焚口施設が確認できた建物は4軒で、古墳時代後期のOKH-3と平安時代後期のOKH-7・8a・17である。その他は燃焼室が壊された状態であった。構築材は灰白色粘土が主体である。上泉下中峯遺跡でも、燃焼室のほとんどが壊されており、両遺跡とも建物を放棄する際の一連の作業を想起させる。

#### 3 煙道部と煙道空間

燃焼室から燃焼ガスを屋外に排出する導き方によって竈構造を理解しているが（註3）、すべて倒炎方式である。燃焼室火床面から大きな段差を持たず水平、あるいは傾斜して屋外に排煙されている。平安時代後期の建物においても、倒炎方式が採用されていることが分かる（註6）。

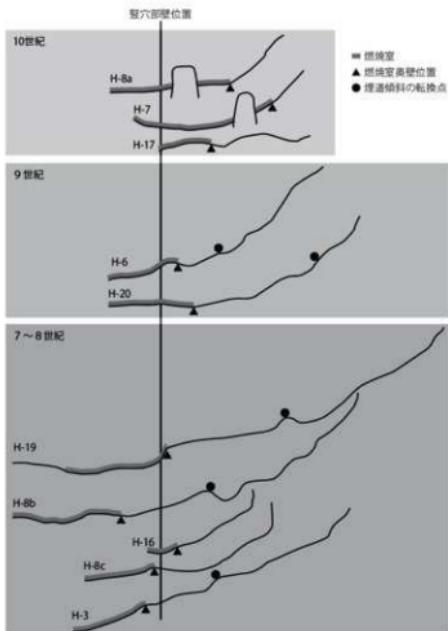


Fig.54 燃焼室と煙道の位置・傾斜角度断面図

火床面と煙道入口位置、および煙道形状を示したものがFig.54で、燃焼室奥壁位置は▲で示した。燃焼室の設置位置が時期によって変化することが確認できるが、この事象は関東地域においては普遍的に認められる。個々の事情によるものではなく、竪穴部の床面積減少や柱位置の変化、上屋構造、竪穴建物の役割変化とも関連する変化である。こうした変遷もありながら、一貫して倒炎方式であることは注目すべきである。上泉下中峯遺跡でもすべてが倒炎方式であった。

また、煙道傾斜の転換点で、焼土ブロックによる構造物が確認されている。これも図中に●で示した。

煙道部の構築方法には上部から掘るオープンカットと地山をトンネル状に削り貫く2種が認められるが、両遺跡ではすべてオープンカット方法が採用されている。この煙道の構築方法も注目すべきであろう。

#### 4 空焚き痕跡

ほぼすべての竪で確認されている。よって空焚きは竪構築の基本作業であることが確認できた。

## II 萩塙倉兼Ⅲ遺跡の竪構造と構築技術について (OKH-19 の検討から)

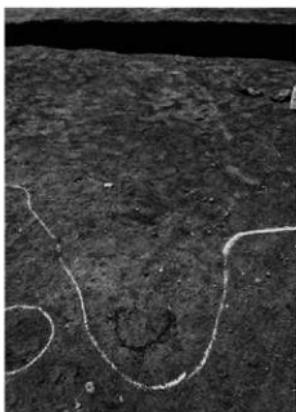


Fig.55 煙道出口の確認状況

竪構造と構築技術について、遺存状況が良好なOKH-19を詳細に検討したい。OKH-19は本遺跡中でも大形の竪穴建物で、確認面から床面までの残存高が約1mと深い。一部窓のある周堤帯も確認できている。また、数次にわたる建物改修の痕跡が認められており、建物と竪の改修の関連についての検討にとって良好な資料である。

### ① 燃焼室と煙道施設

OKH-19は、遺構確認段階で煙道出口が明確に認められ、大形の掘方に大量の粘性土を充填していると思えた (Fig.55)。この時点では、燃焼部側からある程度目安を立てて煙道出口中心へ縦方向の断面を切れば、想定していた燃焼部から煙道部の空間が把握できると思い込んでいた。しかし、予測は全く外れ、幾重もの強い被熱痕のある焼土ブロックと褐色土、灰褐色粘性土、黒色土などを確認した。煙道空間がどこか確定できなかった。

そこで、縦断面の切り直しと、煙道部中間の横断面を観察するこ

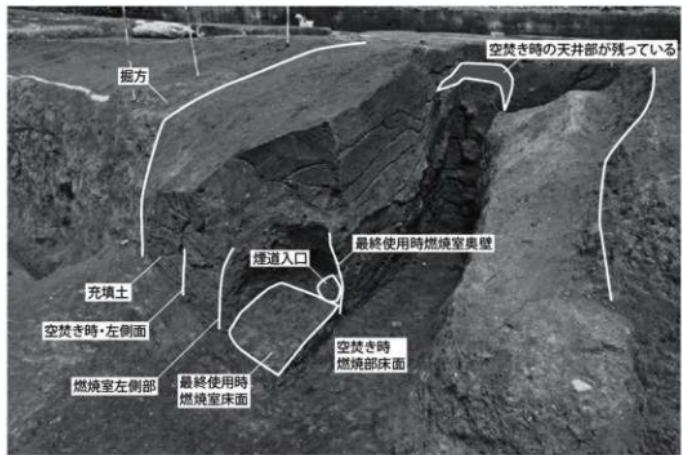


Fig.56 窟調査状況（縦セクションを優先した結果）

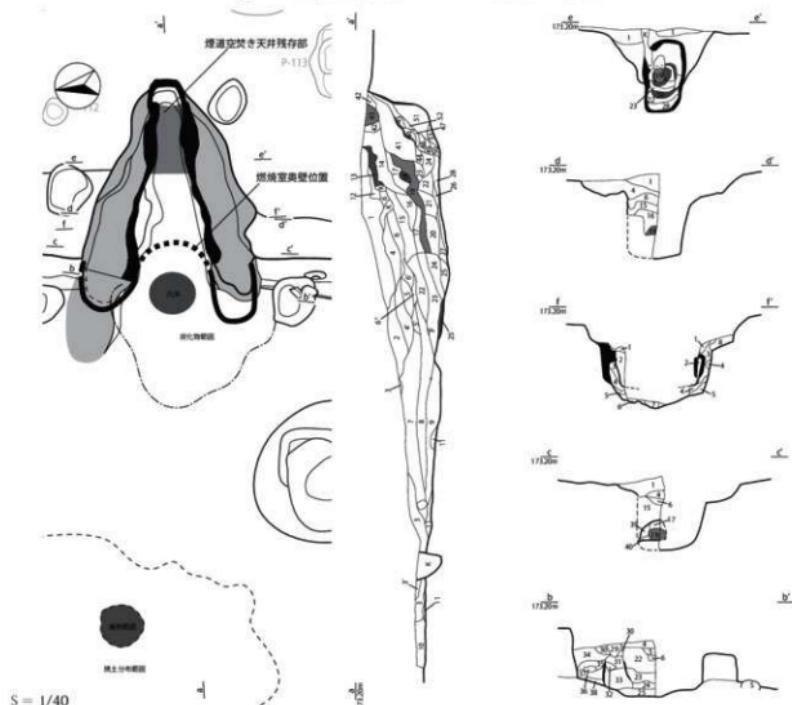


Fig.57 窟使用時の火床面と袖位置

とにした。横断面からは、空焚き時の天井部が残っており、上面の充填土と見えたところは、竈上部を被覆した土が残されていたことが分かってきた。多くの場合、空焚き時の煙道天井部は一度崩落させ、改めて煙道空間を作るイメージがあつたが、天井構造を残して造作を重ねる場合もあることが確認できた(Fig.56・57)。当初確認した焼土ブロックの多くは、煙道空間保持の痕跡であった。また、上面の成形盛土を持たせるために、広い階段状の掘方を作っていた(Fig.57・58)。燃焼室横断面(c-c')でも、煙道入口が確認されている(土層No.19)。空間を保持するように粘性土で固めた様子が見られた。燃焼室奥壁位置から水平に導かれる煙道は空焚き天井部が残るあたりで傾斜を変えるが、土層断面に焼土ブロックが観察されている。これは煙道空間のためのブリッジ造構であると解釈したい。

左側に残した横断面(b-b')の観察から掘方、充填土、空焚き痕跡、使用時の燃焼室側面位置を確認し、燃焼室火床、奥壁、煙道入口を確認できた(Fig.56・57)。燃焼室奥壁は縦土層断面(a-a')によって確認できた。位置は竪穴建物の壁ラインをわずかに切り込んでいる。煙道空間は奥壁の低い位置から、緩傾斜で屋外に伸びていた。Fig.57に示したが、煙道部天井が残っている範囲は煙突出口から50cmほどである。ちょうど平面形が長方形から焚口へ向かって開くあたりである。この位置は、次に検討する竈の改修作業との関連で注目される。燃焼室前面は壊されていて焚口幅等の計測はできなかった。断面から推定する燃焼室奥行きは50cmほどである。

### ② 構築の基準線 (Fig.58)

先にも述べたが、造構には設計基準があり、竈においても左右どちらかを基準線として構築している。主に平面形状と空焚きラインや煙道設置位置が判断材料となる。OKH-19の竈平面形は、右が直線的で左はより膨らみをもっていることや、充填土の厚さが左右で異なることから、右が構築基準線である。OKH-3・20も右基準である。

### ③ 掘方形状 (Fig.58)

当初、OKH-19は大きな掘方と充填の粘性土、及び煙突出口が明確に検出されていた。調査を進めるうちに、本体の掘方は方形であることがわかった。煙道部は方形で燃焼部は箱状であった(Fig.57・58)。特に煙道部の



Fig.58 燃焼部奥部第三次空焚きの様子



Fig.59 三重に残る空焚き痕跡・煙道部

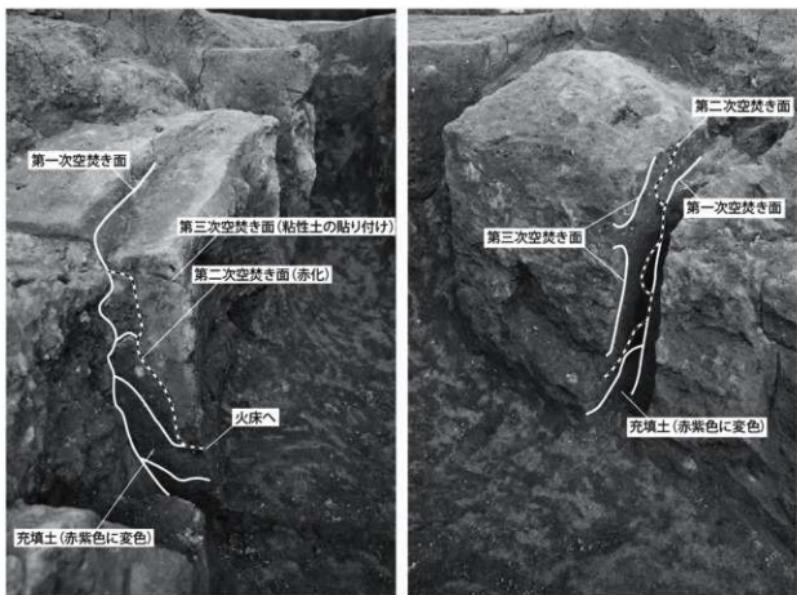


Fig.60 第一～三次空焚きの痕跡

Fig.61 右側面の貼り付け土と赤化の様子



Fig.62 貼付粘性土にみえる植物繊維痕

奥壁はほぼ垂直に地山を切り込んでいる。煙道奥から空焚き天井が残っているあたりまでは、全体を方形に切り、下部は地山を利用し、側面上部は粘性土を貼り付け空焚き用煙道を作っている。燃焼部においても下部は箱状で、上部はステップ状に掘り被覆土を持たせる構造である。地山に粘性土を貼り付けて空焚きのための構造を作っていたと解釈できる。9世紀のOKH-20も方形、箱状である。KSH-11のB竈が方形の掘方であった。掘方形状も構築規範の一つと考えられるだろう。

#### ④ 竈の改修 複数回の空焚き痕跡 (Fig.57 ~ 61)

OKH-19は、建物の改修痕跡があると担当の永井氏が指摘した。また、上泉下中峯遺跡でも同様の建物改修痕跡が確認され、当遺跡群においては普遍的な状況であったろうと見解を述べている。遺跡の性格を考察する上でも重要な視点である。

上泉下中峯遺跡では、建物改修と竈の改修は連動しており、竈位置を移動する場合の遺構の対応関係は明確であった (KSH-11・12)。しかし竈を移動せず改修を行う際の手順については認識が足りなかった。

##### ○ 燃焼部の改修痕跡 (Fig.60・61)

OKH-19においては、燃焼部の改修が複数回行われた痕跡と煙道部の改修痕跡が確認できた (Fig.57・58・60・61)。使用時の燃焼室は空焚き作業後、充填土によって規定のサイズに形成される。従って、充填土を外せば空焚き面が現れるはずである。そこで土層断面を切ってみたところ、一番外側の空焚き痕跡の内側に二面の空焚き痕跡が確認できた。粘性土を貼り付けて加熱し、さらに緩衝材（砂質土）を挟んで粘性土貼り付け、加熱している。貼り付けの粘性土は植物繊維を混入している (Fig.62)。粘性土の表面は強い被熱で焼土化が著しい。通常の煮炊きによる赤化とは被熱温度が異なり、土がこれほど赤化するには、およそ 800 度の高温が必要とされるそうである（註7）。この被熱土層は、強く均質な焼土化・赤化を呈しており、陶器や炭焼き窯にみられる空焚き時の壁面変化に似る。さらに被熱面では酸化し、外側では還元によって元来の色が脱色し青色ヘグラデーションがかかる。

Fig.60・61にみえる痕跡から、作業を復元すれば、イ：構築時に第一次空焚き後、充填して使用、ロ：第一回改修のため充填土等を取り除き、改めて砂質土を充填（その後の空焚きで赤紫色に変色）さらに粘性土貼り付け・空焚き（第二次）、充填・使用、ハ：第二回改修のため粘性土貼り付け・空焚き（第三次）、充填・使用、その後破棄したと推定できる。この燃焼部の改修回数は、柱穴の改修回数とも合致しているため、建物の改修と竈の改修は密接な関連性があると考えてよいだろう。なお、右側面と左側面では、貼り付け粘性土、充填土の厚さが異なっている。本体の設計基準線が右側にあるためである。

##### ○ 煙道部の改修痕跡 説明のつかない焼土

煙道部の空焚き天井部が残る横断面 (e-e') では、いちばん外側の空焚き痕跡がきれいに確認できる (Fig.59)。空焚き痕とした被熱土層は、典型的な赤化を呈し、通常の煮炊きで得られる被熱変化とは異なっている。この明確な空焚き痕の内側にさらに二重の焼土がリング状にみられる。空焚き痕の内側に黒色土混じりの充填土としている土、その内側にしっかりとした赤化土層が巡り、さらに充填土が入り、さらに内側に焼土リングが廻る。リングの中はやや柔らかい褐色土である。縦断面観察の煙道の土と近似する（土層 No.19）。リング状の焼土層ははっきりとした赤化を呈しており、内側から外側へ向かっての還元化も認められる。これを考慮すれば、こ

の二重の焼土リングは空焚き痕跡と考えられるだろう。燃焼部で示した工程と同じようにイ～ハが考えられる。燃焼部の改修回数とも合致するため、改修が竈全体で行われたと理解できる。このような作業が可能なかについては、復元実験を行う等の検証が必要と考えている（註8）。

同じように見えた焼土ブロックの施設も、空焚き痕跡の場合があった。ブリッジ状施設は大部分が土台にかかるように作られており、本例では充填土中に構築されている。竈改修の空焚き焼土と煙道空間保持の焼土は別の施設であると考えるべきだろう。

なお、KSH-2・3では第一次空焚きの後に、第二次空焚きを行っていると見てよいだろう。これらについては、改めて検討を行いたい。



Fig.63 竈構築材の流入範囲



Fig.64 竈構築材の流入様相（南から）

#### ⑤ 竈の外観について

H-19の検討結果から想定できる竈外観のイメージを示しておきたい（Fig.63～65）。

竈本体を形成する材は粘性の強い灰褐色土を中心で、そのほか褐色土、黒色土、黄褐色土を混合した土である。建物外周縁から流入した堆積土（覆土）とは明らかに異なる。建物内へ流入した竈材は、竈前面から建物中央部にまで広がり南東部では抜き取られた柱穴中に入り込んでいた。柱・屋根の解体・中央部での大量の焚火の後、竈焚口施設、鍋釜類の撤去によって、バランスが崩れ、あるいは故意に押され、上部に高く築かれていた竈材が建物内側に崩れたと推察できよう。竈材は建物解体に近い時点で壊されており、煙突部や竈本体の被覆土が一気に流入したイメージである。堅穴部壁位置で、障害となるような構造物もなかったのだろう。煙突部はか

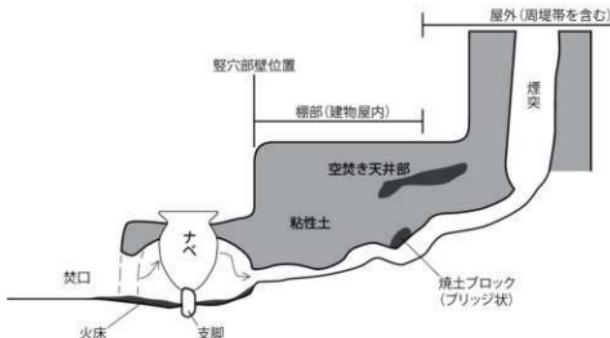


Fig.65 倒炎方式の竈模式図（OKH-19をモデルに）

なり高く設置されていたと考えており、実際に遺構確認時点で確認できる煙突出口は大きいことが多い（註9）。内側に小さな煙突口があるが検討したが、二重で確認できても大きさに差はない。おそらく燃焼室で圧力を高め、中間部では挟めて一気に排出せず、出口で高さと開口部を確保することで効率を上げているのではないだろうか。

Fig.65に示したように、竈は粘性土できれいに被覆され、建物内に露出する部分も大きかったのだろう。流入した建材は建物廃棄の作業によるものと屋内施設状況において引き起こされた、むしろ普遍的な現象として、認識しておくべきだろう。

### おわりに

荻窪倉兼Ⅲ遺跡は上泉下中峯遺跡と継続して調査したため、調査所見を対比して検討を行うことができた。二つの遺跡間で確認しつつ検討できたことは貴重な体験であった。

今回、新たに提示できたのは、建物と竈の改修が連動すること、部分的な改修作業ではなく竈全体に及ぶものであることの二点である。また、竈構築における空焚き作業の重要性が補強できた。

さらに、煙道部の傾斜角度転換点にみられる焼土ブロックの役割と、今回明らかになった空焚き痕跡の焼土状構造物とは、異なる施設として検討すべきと考えた。

堅穴建物の設計・構築は特有の技術系譜の上に成り立っているとされており、これらの規範・技術系譜を特定できれば、地域社会の構成がより具体的に提示できるだろう。また筆者は竈においても技術的な規範・規制があり、集団の出自に関わる技術系譜が存在するととも考えている。単に形態の差だけではなく、構築技術が鍵を握ると考えている。

竈調査に限らず遺構調査は、なるべく詳細な記録を遺していくことが再検討の段階において有用である。しかしOKH-19の竈調査は試行錯誤の連続であった。巻頭写真3-右下にあるような記録方法を試したが、残念ながら、理解しやすい方法ではなかった。理解不足による思い込みで判断したと反省している。竈に限らず、遺跡・遺構は調査によって原形が失われるため、より多くの情報を記録する必要があることは言うまでもない。その際には、様々な観点から検討し、後の再検討にも提供できるような調査に取り組みたいと考えている。

### 註

註1 参考文献は90pに掲載した。

註2 永井 他 2017・外山 他 2019・永井 外山 他 2021・外山 2018 等

註3 『上泉下中峯遺跡』62p

註4 『上泉下中峯遺跡』56～62p

註5 『上泉下中峯遺跡』57p

註6 梶高南八幡街道遺跡 等

註7 発掘担当者 永井智教氏御教示による。

註8 空焚き煙道内に、入子状態で煙道が作られている例は、安中市海童寺遺跡で確認したが、当時は時期的、かつ地域的な特徴と考えていたため、構築技法の特性解明に至らなかった。

註9 吹屋恵久保遺跡 等

## 余録 「上泉・荻窪遺跡群」の円形有段遺構をめぐって

先般報告書を上梓した上泉下中峯遺跡は、荻窪倉兼・荻窪觸塚遺跡等と共に「上泉・荻窪遺跡群」を構成する遺跡の一つである（永井ほか 2021）。

この上泉下中峯遺跡の調査では 7 世紀末以降の掘立柱建物群が確認され、何等かの公的施設であることが予想された。同一調査区の 1 号土坑は、主に栃木県域で円形有段遺構と称され冰室との推定がなされている（中山晋 1996）ものと同一形態で、その覆土中位からの「厨」墨書き器出土を根拠に、掘立柱建物群を勢多郡別院に伴う厨家ではないかと推定した。その際、円形有段遺構の類例をいくつか示したもの、紙面の都合もあって未検討であった。今回、荻窪倉兼遺跡の報告に際し、遺跡群の評価に関わる遺構であるとの理解から、ここに群馬県内の類例を紹介しておきたい。

新型コロナウィルスが猛威を振るう時世であったが、手持ちの限られた文献を駆使した結果、最低 33 基を集めました。遺跡数としては 20 遺跡、広義の赤城山南麓の事例が大半で、西毛地域では明確な事例は確認できなかつた。以下、「上泉・荻窪遺跡群」以外ではどのような遺跡で確認されているのか、報告書から概略の知れる事例について触れてみたい。

**荒砥上ノ坊遺跡**は赤城山南麓の標高約 90 m に位置し、古墳時代後期以来、8 世紀前半にピークをもち 9 世紀代には衰退する集落遺跡で、7 基の円形有段遺構の時期別数推移もこれに比例する。遺跡南方には式内社で上野国二宮でもある二之宮赤城神社が鎮座し、勢多郡衙も近くに推定されるような、地域の中枢を成す遺跡の一つと考えられる。

Table 18 群馬県内の円形有段遺構（円形大型土坑を含む）

遺跡・遺跡名	所在地	時期	出土遺物	備考	参考文献
1 上泉下中峯遺跡 1 号土坑	前橋市上町	8 世紀前半	土師器环・环、須恵器环・碗・長颈瓶・「厨」墨書き器	「厨」墨書き器	永井ほか 2021
2 荻窪上ノ坊遺跡 1 区 35 号土坑	前橋市二之宮町	8 世紀前半	土師器环・須恵器环・环	五芒星線刻土器	小島敦子 1996
3 荻窪上ノ坊遺跡 1 区 36 号土坑	前橋市二之宮町	8 世紀	須恵器环・铁製	穂の投棄	小島敦子 1996
4 荻窪上ノ坊遺跡 1 区 37 号土坑	前橋市二之宮町	8 世紀前半	土師器环・須恵器环	小島敦子 1996	
5 荻窪上ノ坊遺跡 1 区 38 号土坑	前橋市二之宮町	8 世紀前半	土師器环・須恵器环	ビット多い	小島敦子 1996
6 荻窪上ノ坊遺跡 1 区 45 号土坑	前橋市二之宮町	8 世紀後半	土師器环・須恵器高台环・不明鉄器	浅い	小島敦子 1996
7 荻窪上ノ坊遺跡 1 区 52 号土坑	前橋市二之宮町	9 世紀後半	土师器环・环	穂の投棄	小島敦子 1996
8 荻窪上ノ坊遺跡 2 区 8 号土坑	前橋市二之宮町	9 世紀前半	土师器环・须恵器环	环の出土数多い	小島敦子 1996
9 上西遺跡 8 号井 <sup>#1</sup>	前橋市大原町	9 世紀後半	内里土器	上西原現存・墨書き「處」空印	松井・猪 1999
10 柳久保遺跡 1・2 号井 <sup>#2</sup>	前橋市荒子町	8 世紀中葉	土師器环・环・瓶・須恵器長颈瓶・环・盖	覆土中位に焼土多量	間根ほか 1988
11 柳久保遺跡 1・3 号井 <sup>#2</sup>	前橋市荒子町	8 世紀前半	土师器环・須恵器器	間根ほか 1988	
12 柳久保遺跡 1・5 号井 <sup>#2</sup>	前橋市荒子町	8 世紀か?	無	間根ほか 1988	
13 柳久保遺跡 D-2 号土坑	前橋市荒子町	9 世紀中葉	須恵器环	弱原純一 1988	
14 日光東遺跡 丹行狀土坑	前橋市日光忍町	平安か?	無	壁面被熱 碑記認?	山上康穂 1994
15 荻窪古墳群 BD-1 号土坑	前橋市荻窪町	9 世紀中葉	土师器环・瓶・須恵器环		小島純一 1981
16 西原古墳群 C 四方形土坑	前橋市西原町	9 世紀中葉	土师器环		小島純一 1985
17 荻窪古墳群 D-2 号土坑	前橋市荻窪町	9 世紀後半	須恵器高台环		小島純一 1989
18 荻窪古墳群 D-3 号土坑	前橋市荻窪町	平安	無	非有段	小島純一 1989
19 白幡古墳群 D-4 号土坑	前橋市荻窪町	平安	無		小島純一 1989
20 寒峠遺跡 1 号大型土坑	桐生市新里町武井	9 世紀前半	土师器环・瓶・須恵器环・长颈瓶・环		内田憲治 1981
21 天岱古遺跡	桐生市新里町山上	平安か?	土器	詳細不明 3 基	内田憲治 1985
22 元好敬遺跡 第 2・7 地点	足利市吉原町向左方	9 世紀		詳細不明 1 基以上?	秋谷子明 2015
23 南原遺跡	伊勢崎市赤堀今井町	平安か?	土器、房舟	詳細不明 5 基	松村一昭 1980
24 丹上遺跡 1 号土坑	伊勢崎市赤堀今井町	8 世紀前半	土师器环・須恵器环・瓶・铁製罐	浮世燒土 墓蓋土器	松村一昭 1979
25 丹上遺跡 2 号土坑	伊勢崎市赤堀今井町	8 世紀後半	土师器环・台付小瓶・須恵器高台环	浮世燒土器	松村一昭 1979
26 女籠觸塚下廻 円筒形状土坑	伊勢崎市赤堀今井町	9 世紀	土师器香炉?・瓶・須恵器高台环	浮世燒土器	松村一昭 1979
27 多摩山東遺跡 1 号土坑	伊勢崎市赤堀今井町	古代	土师器、須恵器	底面被熱	松村一昭 1981
28 下附六井遺跡 4 号土坑	伊勢崎市下附町	古代	土师器环・須恵器	穂の投棄	松村一昭 1980
29 鶴來遺跡 2 号土坑	伊勢崎市下附町	古代			松村一昭
30 鶴來遺跡 4・13 号土坑	伊勢崎市下附町	8 世紀前半	土师器环	濃/季典雄 2015	
31 西太田遺跡	伊勢崎市安原町	8 世紀後半	土师器环・瓶・須恵器环・瓶・置き力マド	覆土下位に焼土多量	永井ほか 2017
32 見柳東遺跡 SE2	吉岡町大久保	古代		非有段 亂敷用大溝と重複	折原千一 2001
33 八方遺跡 J 区 1 号土坑	館林市御野町	古代	古墳後削土器多量（須恵器から蓋入り）	覆土中位に焼土多量	岡谷紀子 1998

**柳久保遺跡と頭無遺跡**は遺跡群として一括されるもので、荒砥上ノ坊遺跡の北方約1km、標高110mの開析谷に面する丘陵上に展開し、柳久保遺跡が8世紀、頭無遺跡は9世紀で、前者は掘立柱建物を伴う比較的大規模な集落、後者は竪穴建物数軒の閑散とした集落である。両遺跡は谷を隔てて対峙する位置関係で、谷底からは水田址が確認されている。円形有段遺構は、柳久保遺跡では谷底へと下る南斜面の掘立柱建物群周辺に3基、頭無遺跡では西面する斜面に単独に1基確認されている。

上西原遺跡は古代寺院として知られる遺跡で、柳久保遺跡のさらに北方1km、標高120mの南緩斜面に位置し、主要区画の南方から1基確認されているが、調査区の制約もあり複数の可能性はある。

**白藤古墳群**では古墳群北西端の西に谷を臨む南緩斜面から3基（内1基は無段）がまとまって確認されている。時期については、1基から9世紀後半の須恵器高台塊が出土しているが、他の2基は遺物が無く時期不明である。なお、3基の近傍には $3 \times 4$ m程度の長方形竪穴が1基あり、8世紀前半の土師器壺が出土している。カマド・柱穴が無いことから一般的な建物とは考え難く、円形有段遺構に伴う何らかの施設とも考えられる。

**南原・川上・女塙遺構下層・鷹巣・向井・多田山東遺跡**も赤城山南麓の事例だが、旧赤堀町域の比較的狭いエリアに集中し、同一遺跡群内の事例と言える。この遺跡群は「郷」の中核をなすものと理解され、東日本では類例のない靈廟や小規模寺院・官衙的な掘立柱建物群を作り、「中臣」墨書き土器や奈良三彩小壺の出土が知られている。唐三彩陶枕を出土した多田山古墳群等の終末期古墳も近い。（永井 2014）。

**小結** 以上、群馬県内で円形有段遺構が確認された遺跡の中から、詳細のわかる事例について説明してきた。円形有段遺構が赤城山南麓に多いこと、数基がセットとなるであろうことは自明であるが、それ自体の性格について明確に示すような出土遺物も無く、遺跡の性格についても様々なのが実態である。今回の集成はまだ途上で、特に西毛地域の事例が乏しいことはそれに起因する可能性がある。高崎市田端遺跡や前橋市元總社地区等、疑わしい事例が散見されたのも事実である。今後も折に触れて集成作業を進みたい。（永井）

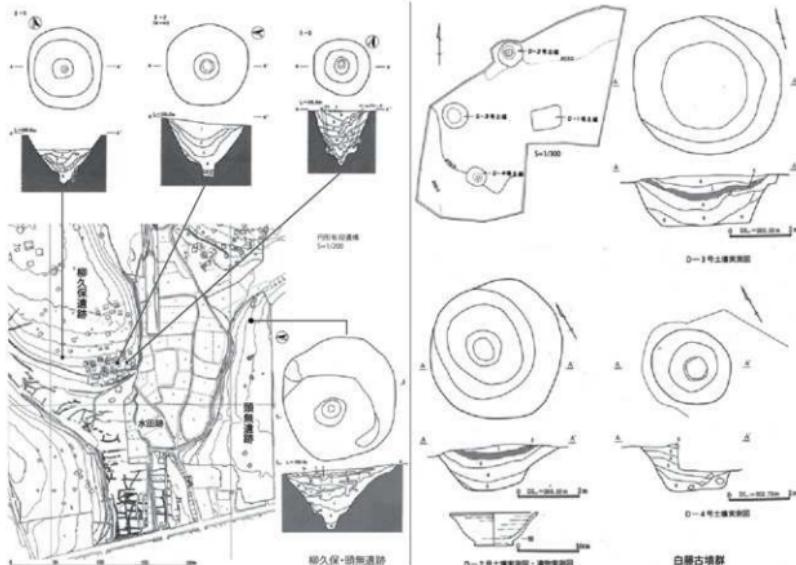


Fig.66 円形有段構造の諸例（各報文を元に作成）

## VIII 成果と問題点

今回の調査では、古墳時代末～奈良時代にかけての大規模な掘立柱建物跡と大形竪穴建物跡、柵列跡を中心とした遺構群等を確認し、注目される遺物の出土もあった。遺物についてはV-⑧で触れたので、ここでは平成13・14年度の調査成果も含め、荻窪倉兼遺跡の遺構変遷を整理し、近傍の荻窪鱈塚遺跡や上泉下中峯遺跡を含めた「上泉・荻窪遺跡群」の性格について素描しておきたい。

### ① 遺構の変遷

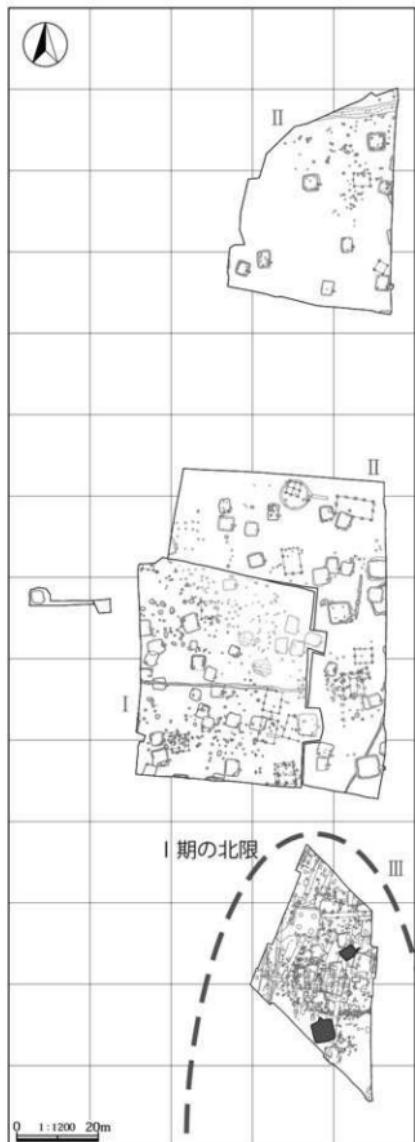
今回の調査で確認された遺構は、中近世の溝や繩文時代の陥穴を除き、古墳時代後期末、古墳時代末～奈良時代、平安時代前半、平安時代中葉～後半の、大きく4時期に亘る。これら各時期をI～IV期とし、各時期の様相について説明する。なお、遺構分布についてはFig.67・68を参照されたい。

**I期（7世紀後半）** 今回調査区で確認された2軒の竪穴建物のみで、平成の調査区では確認されていない。おそらく今回調査区付近を北限とするようで、中心は南方の標高の低い方にあると考えられる。本遺跡西方の上泉下中峯遺跡（永井ほか2021）では該期の竪穴建物跡が7軒確認されており、最も古いもので7世紀前半だが、6世紀まで遡る事例は周辺同標高地では確認されていない。標高が高いという点以外、建物形態や規模は平野部の同時期の集落遺跡と差して異なる訳ではないが、土器の中に北武藏産と推定される在地産暗文土器が含まれている点は注目される。標高の高いエリアへの進出は、単なる小地域内における指向ではなく、後の上野・武藏国境を跨ぐような広域の動きの中で理解すべき事象と考えられる。

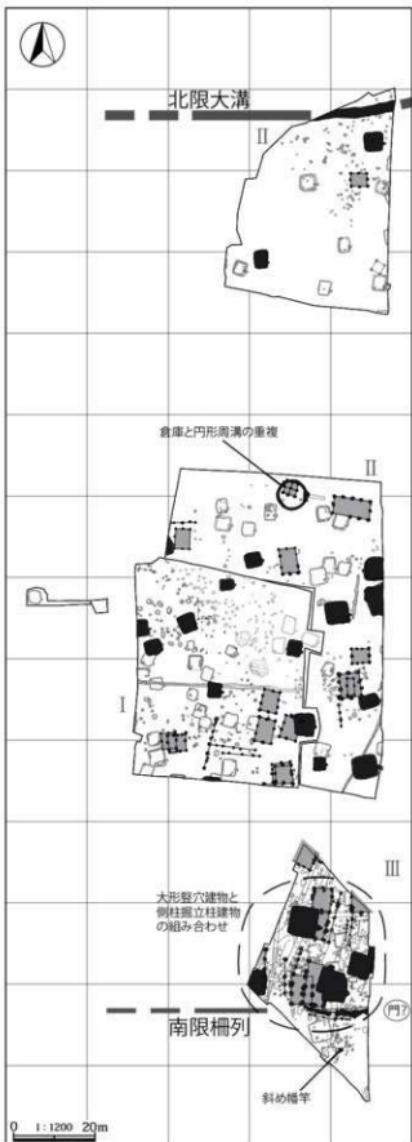
**II期（7世紀末～8世紀中葉）** 遺跡全域に竪穴建物・掘立柱建物・柵列・円形周溝状遺構が一挙に展開する。建物や柵の角度から内実は複数段階の累積であると思われるが、調査区や調査記録の制約もあって不鮮明な部分が多い。竪穴建物は小規模な通常サイズのものもあるが、一辻6mを超える「大形竪穴建物」もあり、特に大型の例は貯蔵穴を欠いている。掘立柱建物については、特に平成の調査区では時期不詳とされたものが大半であるが、ここでは暫定的ではあるが該期と考えておく。2×3間の側柱建物が主体であるが、2×5間の長舎もある（今回調査B-5）。掘立柱建物の多くは南北棟だが、標高の高い北半には東西棟もあり、遺跡中央付近にあるものは2×4間の長舎的なものであった。また、1棟のみであるが遺跡中央付近に2×2間の倉庫もあり、円形周溝遺構と重複（前後不明）している。柵列は遺跡南半に偏っており、今回調査区では掘立柱建物と直行・平行の関係で幾重にも巡る。特に今回調査でX-1とした東西方向の柵列累積は該期遺構群の南限をなしていた可能性が高い。また、遺跡の北限には東西方向の大溝があり、詳細は不明ながら南限の柵列に対する北限としての機能が想定される。その場合、該期の遺構群は南北220mの範囲内に展開していたと予想され、調査区外に東西を画する施設を想定すると一定の区画を伴っていたと思われる。区画の南には斜め幡竿が設置されており、門の存在を予想させる。なお、上泉下中峯遺跡には該期古段階の大形竪穴建物が複数あり、複数回改修を重ねている。荻窪鱈塚遺跡における遺構の出現も該期である。II期が「上泉・荻窪遺跡群」における大きな画期であったことは間違いない。

**III期（8世紀末～9世紀後半）** 遺跡内全域に分布するが散漫で、20軒程度の竪穴建物のみで構成されるようである。II期との間に多少の断絶が想定され、性格を異にした再興に近い印象を受ける。竪穴建物は周辺地域では一般的なサイズで、貯蔵穴も備えている。注目される遺物として馬具（鉸具）がある。

**IV期（10世紀～11世紀）** III期から連続的で、竪穴建物が30軒を超える。石組の竈が主体で貯蔵穴を備えるものも多いが、床下からが跡を確認した今回調査のH-18や鉄滓の検出されたH-7は竪穴部が長方形で、貯蔵穴もはっきりしない。鍛冶等の工房と考えられる。土器を見ると羽釜から土釜への移行期で、内黒の塊や灰釉陶器と共に白色を呈する土師質の塊・皿がある。白色の土師質土器についてはV-⑧で触れたが、灰釉陶器の出土量が比較的多い印象を受けることと並び、該期遺構群の性格を考える上で示唆的である。本遺跡の北方1.2kmにある堀越中道遺跡と並び、「牧」とその管理施設の一角に相当するものと考えたい。



I期 (7c 後半)



II期 (7c 末～8c 中)

Fig.67 萩窪倉兼遺跡の変遷 (1)

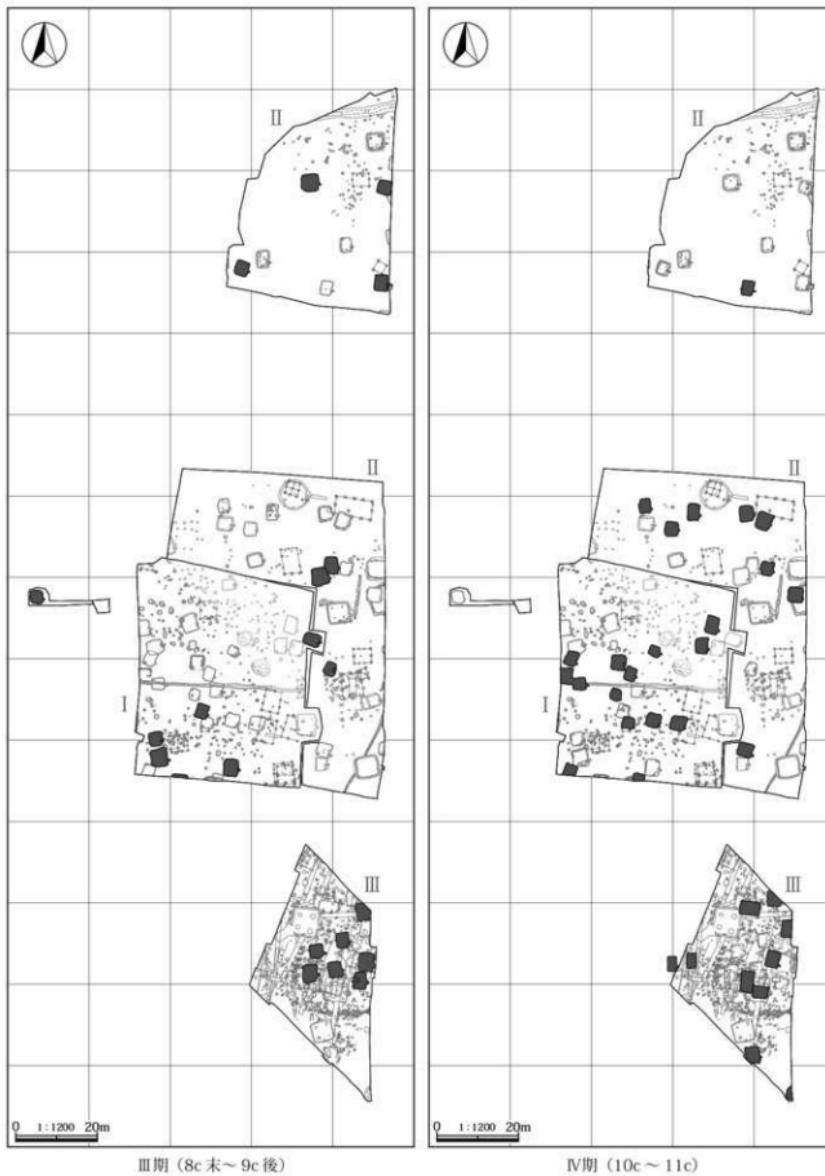


Fig.68 萩庄倉兼遺跡の変遷（2）

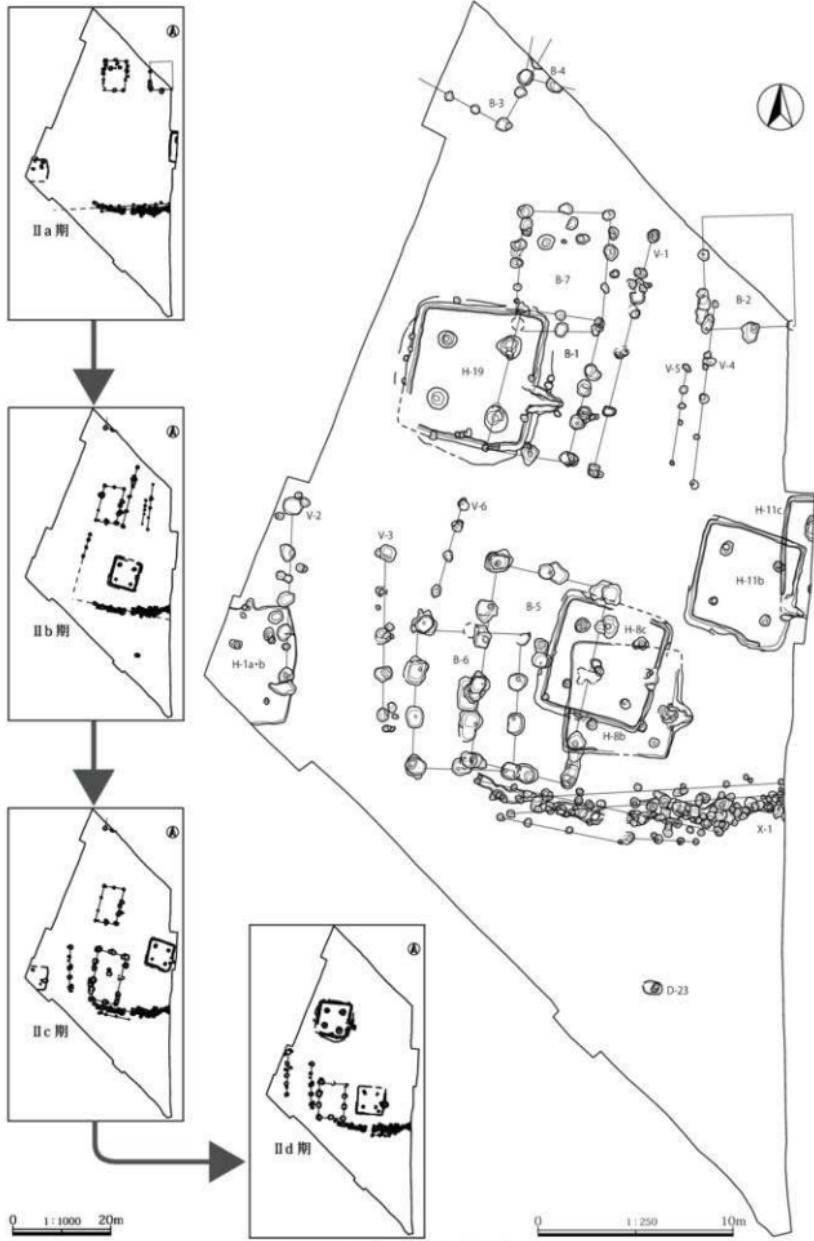


Fig.69 II 期の遺跡及び変遷案

## ② II期の遺構群について

今回の調査・報告の中で最重要遺構群であるが、時期を異にした遺構の重複が激しく、調査時の不手際、調査区自体の制約もあって明確な遺構の変遷は明らかにし難いのが現実である。

まず、II期とした遺構の中で、切り合い関係を以下に整理する。

新	古
H-19	→ B-7 → B-1
H-8b	→ B-5 → H-8c
B-6	→ B-5
V-2	→ H-1a・b

以上のうち、大形竪穴建物（H-19・8b・8c）と大形掘立柱建物（B-1・5・6）の重複は興味深い。これを単なる時期差と考えることも可能だが、H-8b→B-5→H-8cの重複が示すように、竪穴建物と掘立柱建物が反復されることから、位置をずらして竪穴建物と掘立柱建物の「組み合わせ」が数回建て替えられたと考えられる。その場合、竪穴建物は庵屋として掘立柱建物とは異なる機能を有していたことも想定できる。また、柵列についても、竪穴建物・掘立柱建物と軸を揃えて幾重もあり、建て替えに対応するのだろう。

埼玉県深谷市百濟木遺跡（村松 2003）では、柵列による方形区画内に大形竪穴建物と掘立柱建物が並んでおり、本遺跡II期の一場面を示す好例と考える。報告者は百濟木遺跡を「豪族の居宅」とし、その居住者を武藏国男衾郡の大領クラスと想定している。田中広明は遺跡名や、所在地の男衾郡が武藏国分寺の建立に力を注いだ渡来系氏族壬生吉志福正にかかる地域であることを考慮しつつ、森林資源を求めて台地内部に進出した小規模な豪族の「宅」とする（田中 2007）。

以上のような百濟木遺跡への見解を参考とすれば、本遺跡II期の性格は「豪族の居宅」や「宅」であると結論づけられる訳だが、その居住者（使用者）は具体的にどういった人物像が想定されるだろうか。

出土遺物の中で、特に注目したいのが、H-19で出土した須恵器平瓶と、仏像と推定される銅製品片である。平瓶を水滴とした場合は識字層を、銅製品は篤い信仰が想起される。また、同じくH-19の墨書き土器「大」は、居住者の名前に由来する可能性があり、現状一文字という点で根拠薄弱だが、上野三碑の一つである山上碑の「大児臣」は、大きなヒントになる。V-⑥で触れた斜め幡竿についても、威儀を示すに充分であったことだろう。

## ③ 古代赤城山南麓の開発と「上泉・荻窪遺跡群」（予察）

今回の荻窪倉兼Ⅲ遺跡の報告をもって、平成13年以来断続的に調査された荻窪倉兼・荻窪倉兼Ⅱ・荻窪鱗塚・上泉下中峯遺跡の発掘調査は一つの区切りとなる。広大な遺跡群から見れば既調査面積は狭小なもので、未だ材料不足の感は強い。とは言えここで遺跡群の大きな変遷と性格の推移を示し、本書のまとめとしたい。

**遺跡群成立前夜～古墳時代後期前半～** 古墳時代後期前半、遺跡群内では6世紀に遡る遺跡・古墳は現状で確認されない。遺跡群内に入り込む谷筋の開発は未だ及んでいなかったものと考えられる。西方の藤沢川流域の同標高には、小形前方後円墳であるオブ塚古墳（6世紀後半）があるのとは対照的である。

**遺跡群の成立～I期・古墳時代後期末～** 古墳時代後期末になると、遺跡群内には大小の竪穴建物が、遺跡群東方には古墳群が成立する。竪穴建物は、上泉下中峯遺跡では大形竪穴建物と普通サイズの竪穴建物が共存しており、大形竪穴建物は複数回の改修が重ねられており、通年居住では無いあり方が想定された。想像するに、それまで未開発であった谷筋を水田化した、最初の開拓者が廃したものと想像され、大形竪穴建物は季節労働として当地へ赴いた労働者の宿舎的性格を有していたのだろう。土器組成を見ると、有段口縁坏や在地産暗文坏といった、利根川流域や利根川以南の北武藏からもたらされた土器が含まれている点は注意される。開発が単に遺跡群下の集落単位で行われたのではなく、比較的広域から労働力が集散するようなあり方が想定



Fig.70 荻窪倉兼遺跡全体図

される。なお、遺跡群東方の古墳群は7世紀以降に累々と築造されたものと考えられ、遺跡群より高標高に展開する様からは、水源地を墓山化させるような意図を感じるものである。

**遺跡群最初の画期～II期・古墳時代末～奈良時代～** 萩塙倉兼遺跡において、柵列を伴う大規模な掘立柱建物群や大形竪穴建物が出現する。「豪族の居宅」と推定される遺構群である。居宅は前段階では無住であった一段標高の高い場所に新設されており、政治的・社会的に大きな力が原動力であったと考えられる。おそらく森林資源の獲得を目指した山の開発がその背景にあったと考えられ、塩の消費を物語る貝塚穴痕泥岩の出土は、本遺跡内において塩分補給を必須とするような労働が行われていた証と考えたい。そしてこの居宅を設営したのは、識字層かつ信仰に篤い豪族であったことが出土遺物から窺われ、「大」と墨書きされた食器を使用していた。遺跡東方の大胡39号墳から出土した獅噛環頭大刀、さらに東方の載石切組積みの精美な横穴式石室をもつ堀越古墳の存在も踏まえれば、山上碑の碑文に見える「大児臣」を充てることも、無理からぬ仮説と考える。萩塙跡の出現、上泉下中峯遺跡の勢多郡衙別院に伴うと推定される厨・水室と推定される遺構もこの時期である。

**遺跡の衰退と再興～III期・平安時代前半～** 前時期とはおそらく空白期を挟み、通常サイズの竪穴建物が展開し始める。竪穴建物構造は普遍的のものであるが、出土遺物に馬具があるという点は特筆される。やや短絡的だが馬匹生産に関係する印象で、近傍の堀越中道遺跡のような牧廻連と推定される遺跡と一帯の集落であった可能性が考慮される。近隣の遺跡様相から、生業は水田・畠地といった農耕以外に、製鉄・鍛冶が想定される。

**再度の盛行～IV期・平安時代中葉から後半～** 前時期の延長で竪穴建物数が増加し、生業として鍛冶等の手工業生産が一般的であった可能性が、工房的様相の建物から伺われる。灰釉陶器や白色土器の出土からは、比較的裕福な生活が想定されるが、その背景は前時期以来の馬匹生産や製鉄等の開発にあったのだろう。特に上野国府で特徴的な畿内指向の白色土器が少なからず出土する点は、寄進地系荘園等の仕組みの中で都と繋がっていた可能性を指摘しておきたい。

---

今回の調査報告では、これまで調査例の少なかった赤城山南麓の西部でも比較的標高の高いエリアにおける、古代初頭における土地開発の中核部とも言える「豪族の居宅」と、その後の姿を示すことになった。紙面の都合で断片的かつ不完全な検討となってしまったが、赤城山南麓における古代開発史研究の新しい扉を開いたという自負はある。自らの課題として将来的に報告者としての責を果たしたいと思う。(永井)

## 参考文献

- 新井順二他 1987 「小福岡遺跡」前橋市教育委員会地  
出編 岩 2016 「寺と移動」大室古墳の歴史 考古学講演会・講座の記録Ⅰ 前橋市教育委員会事務局文化財保護課  
伊藤順一他 2019 「海釣寺3号遺跡」安中市教育委員会  
井上慎也他 2011 「加賀塚跡2号」安中市教育委員会  
内田義治 1981 「天笠山遺跡」新潟市教育委員会  
内田義治 1985 「篆字跡跡」新潟市教育委員会  
尾崎義弘 1971 「五郎山古墳」前橋市史 第1巻  
野口一 1998 「八方山遺跡」前橋市史 第1巻  
野口一 2001 「足利山遺跡」吉井町遺跡調査会  
小島義一 1996 「福井山」安道、深谷村教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団  
小島義一 1981 「福井山」安道、深谷村教育委員会  
小島義一 1985 「西京山遺跡」前橋市教育委員会  
小島義一 1989 「白鷺山遺跡」前橋市教育委員会  
金子入人 1991 「横須賀郡群馬」前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
川合浩他 1988 「八芳賀山遺跡跡群」芳賀町遺跡群第2番 前橋市教育委員会  
木部立也他 1980 「富士見道路跡・西大寺遺跡跡・清里南面道路跡」前橋市教育委員会  
黒田晃他 2013 「宮谷山遺跡」高崎市教育委員会  
群馬県教育委員会事務局 文化財保護課 2017 「群馬県古墳記録」群馬県教育委員会  
飼食秀一他 1990 「猿田彦遺跡群」前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
小峰義他 2002 「猿田彦遺跡跡・狹庭倉庫跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
小峰義他 2013 「狩野山遺跡跡・井谷東古跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
坂口哲考他 1997 「鳥取縣高藏寺遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
坂本和廣 2015 「古墳時代・鉢口式土器を使わない製陶工芸の流通網跡」「埴考古」50 埼玉考古学会  
岡根吉晴ほか 1988 「和久保遺跡跡群」前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
岡口一他 2003 「中村殿1号遺跡・明神山遺跡・伊勢山遺跡・中島遺跡・西東山遺跡」群馬県教育委員会  
遠澤義雄 2015 「鹿児島県4・スカガラフ遺跡株式会社  
田中守明 1991 「越の在地産業文化」『埴考古』28 号 猪玉考古学会  
田中守明 2007 「地方官の「越」と豪族の「宅」古代豪族居宅の構造と機能」独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所  
知久義明 2012 「土器研究」『埴羅遺跡研究』 総括報告書1 市谷市教育委員会  
坂口哲考 1981 「柱正門櫛荷塙古跡」(群馬県) 資料編3 始始古代3(古墳) 群馬県  
内山義子 2018 「日本(?)の構造と構造要素再考—東西日本の炊飯の違いを考えるために」『物質文化』98 物質文化研究会  
内山義子 2018 「佐賀八幡山遺跡跡群3」高崎市埋蔵文化財発掘調査会  
中村義他 1981 「佐賀八幡山遺跡跡群3」高崎市埋蔵文化財発掘調査会  
中村義他 2014 「南郷山遺跡10・山ノ上遺跡6・合戸  
永井義他他 2017 「西大寺遺跡跡」有限会社社会考古研究所  
永井義他他 2000 「3. 斜傾地の横穴石室」群馬県内の横穴石室Ⅲ (中毛編) 群馬県古墳時代研究会  
永井義他 2019 「越前山青森道跡(127)」前橋市教育委員会  
永井義他, 外山義他 2023 「上貝下中宮跡」前橋市埋蔵文化財委員会  
長井義他他 2000 「五代花道跡・五代木桶山遺跡・五代伊勢宮1号跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
西田義彦 1991 「富士山1号古墳」春日井市教育委員会  
西田義彦 1997 「西大寺山遺跡跡」群馬県教育委員会  
萩谷千鶴 2015 「みどり山内遺跡跡」みどり市教育委員会  
林山信義他 1998 「鳥取縣高見寺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
藤坂千鶴他 1994 「乙原山遺跡跡・西天神遺跡跡・柴崎遺跡」群馬県勢多郡大胡町教育委員会  
前原義他他 1985 「勝原山遺跡跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
前原義他 1988 「郡久保遺跡跡群」前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
前原義他 1993 「前二子古墳」前橋市教育委員会  
前原義他 1993 「中二子古墳」前橋市教育委員会  
前原義他 1992 「二子古墳・小二子古墳」前橋市教育委員会  
前原義他 2006 「東前山遺跡跡・西前山遺跡跡・西久保遺跡跡」越浦南部遺跡群 前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
松本義他 1986 「上西郷・向原・谷」群馬県教育委員会  
松本義他 1999 「上西郷遺跡」群馬県教育委員会  
松村一昭 1979 「川上遺跡」女郷山遺跡発掘調査概報」赤堀村教育委員会  
松村一昭 1980 「下袖の井遺跡発掘調査概報」赤堀村教育委員会  
松村一昭 1981 「多山村東遺跡発掘調査概報」赤堀村教育委員会  
松島義治他 1991 「芳賀西山古跡跡」芳賀東部埋蔵地遺跡群 第1番 前橋市教育委員会  
松島義治他 1984 「芳賀東部埋蔵地遺跡」芳賀東部埋蔵地遺跡群 第1番 前橋市教育委員会  
松木義他 1981 「山王山古跡」(群馬県) 原始古代3(古墳) 群馬県  
村松 雄 2003 「古谷木遺跡」(川木) 遺跡調査会  
山下健他 1994 「古代地方官術遺跡の研究」群馬県  
山下健他 1994 「(川)光山古道跡・大胡町」教育委員会  
山下健他 1996 「姫井山古道跡」群馬県勢多郡大胡町教育委員会  
山下健他 1998 「姫井山古道跡・姫城」二本松遺跡・姫城向山遺跡跡・茂木二本松遺跡・大胡西北部遺跡群 群馬県勢多郡大胡町教育委員会  
山下健他 1986 「上大胡・種越地区遺跡群」群馬県勢多郡大胡町教育委員会  
山下健他 1997 「姫井山古道跡」大胡西北部遺跡群 大胡町教育委員会  
渡辺一 1990 「埴山空庭跡」Ⅱ 埼玉空庭跡遺跡調査会・埼玉山教育委員会



# 写真図版





南方から見た茨窪倉兼III遺跡と赤城山



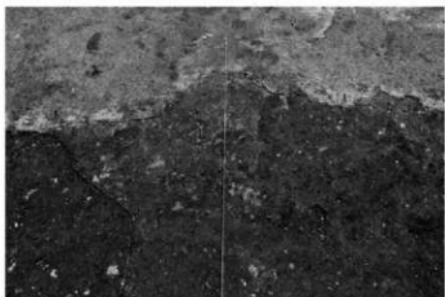
北方から見た茨窪倉兼III遺跡



获庭倉兼III遺跡 調査区垂直（北が上）



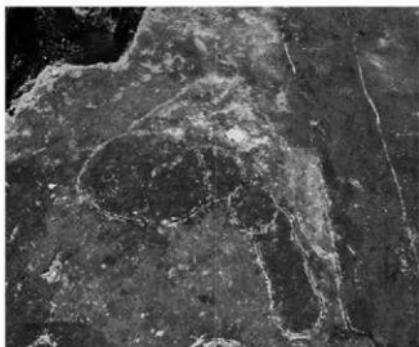
H-1a・b (左) と H-2 (右) (南東から)



H-1a 窯 (東) 検出 (西から)



H-1a 東西土層断面 (南から)



H-1b 窯 (東) 検出 (南から)



H-1b 窯 遺物出土状況 (南東から)



H-3 遺物出土状況（南東から）



H-3 窟貯藏穴 全景（南西から）



H-3 窓（南東から）



H-3 窓調査状況（南から）



H-4 (西から)



H-4 窟付近 遺物出土状況 (西から)



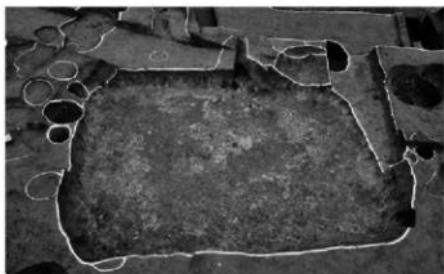
H-5 (西から)



H-5 遺物出土状況 (南から)



H-5 遺物出土状況 近接 (南から)



H-6 (西から)



H-6 掘方 (西から)



H-6 窟と貯蔵穴 (西から)



H-6 窟土層断面 (南西から)



H-6 窟煙道口 (南西から)



H-6 遺物出土状況・馬具 (北から)



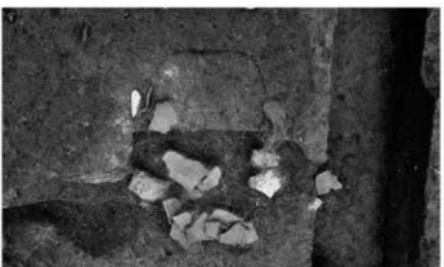
H-6 貯蔵穴上面遺物出土状況 (南から)



H-7 (西から)



H-7 窯 (西から)



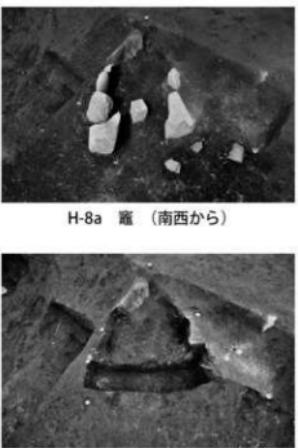
H-7 窯遺物出土状況 (東から)



H-8a 窯出土状況 (北から)



H-8a 炭化材検出状況 (南西から)



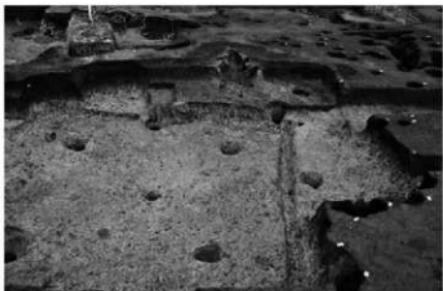
H-8a 窯掘方 (西から)



H-8b (西から)



H-8b 遺物出土状況 (南から)



H-8b (西から)



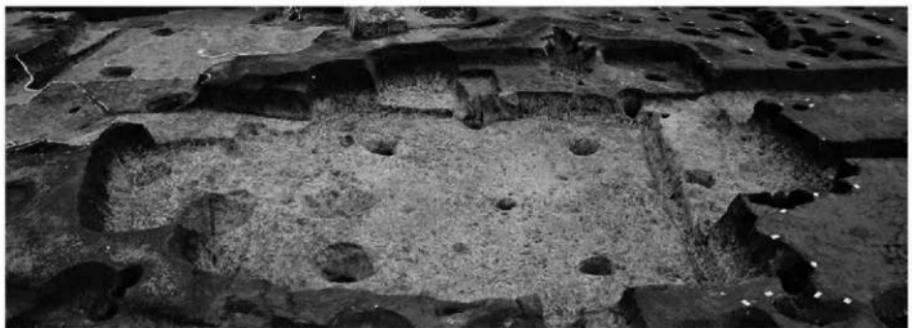
H-8b 罐 (西から)



H-8b 断ち割り (北西から)



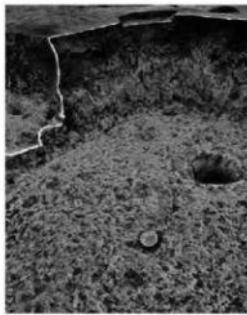
H-8b 断ち割り (南西から)



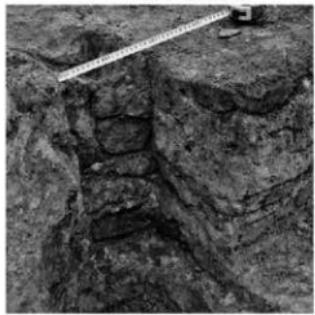
H-8b・8c・9 (西から)



H-8c (西から)



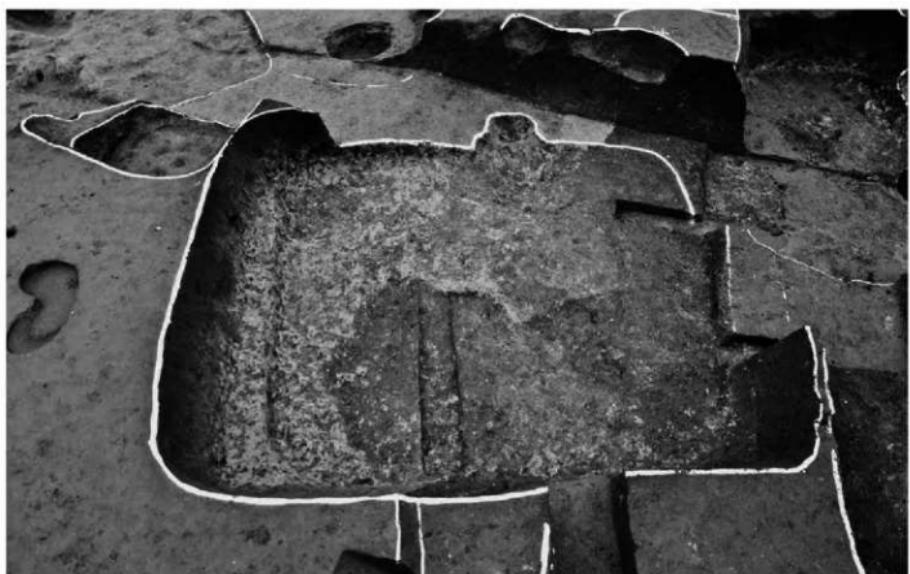
H-8c 遺物出土状況 (東から)



H-8c 窯土層断面 (北西から)



H-8c 窯主軸土層断面 (北西から)



H-9 (西から)



H-9 遺物出土状況（西から）



H-9 窟土層断面（南から）



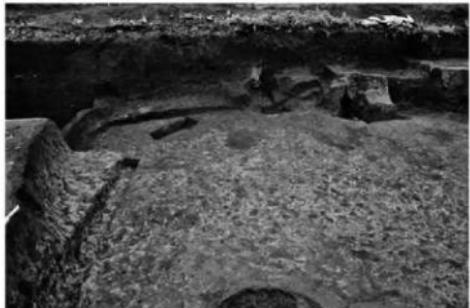
H-10 完掘（南から）



H-10 窟（西から）



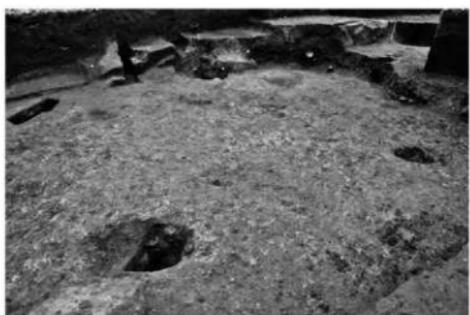
H-11a・11b (西から)



H-11a (西から)



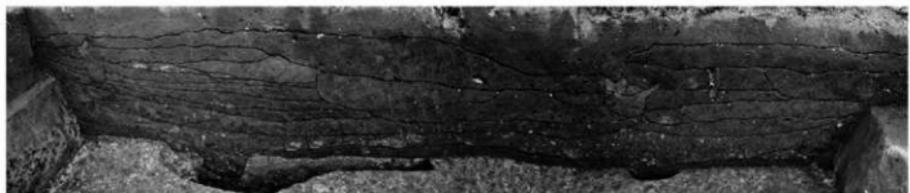
H-11a 窟 (西から)



H-11b 遺物出土状況 (西から)



H-11b 窟調査状況 (西から)



H-11c 土層断面（西から）



H-11c (北から)



H-12 完掘（西から）



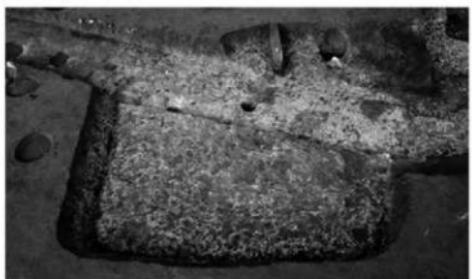
H-12 窯（南西から）



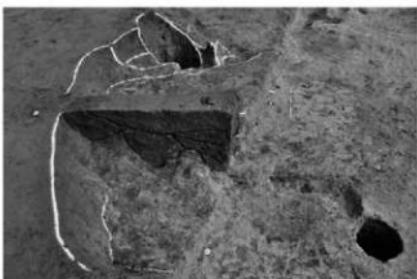
H-13 (南西から)



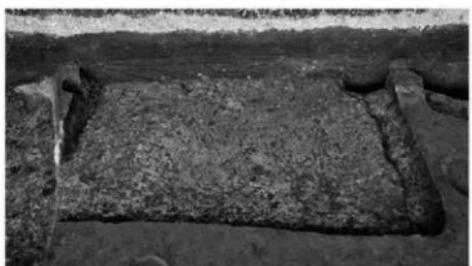
H-13 窯 煙道調査状況（南西から）



H-14 (西から)



H-14 窟土層断面 (北から)



H-15 (西から)



H-15 挖方 (北から)



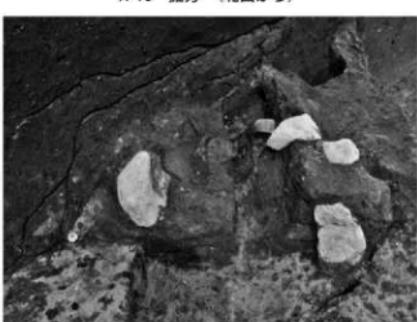
H-16 (西から)



H-16 挖方 (北西から)



H-17 (西から)



H-17 窟 (西から)



H-18 遺物出土状況 (南西から)



H-18 (西から)

H-18 挖方の被熱痕 (西から)



H-19 (西から)



H-19 遺物出土状況（西から）



H-19 遺物出土状況 近接（西から）



H-19 窟右側遺物出土状況 近接（西から）



H-19 遺物出土状況（平瓶・銅製品）（南から）



H-19 窟 その1（西から）



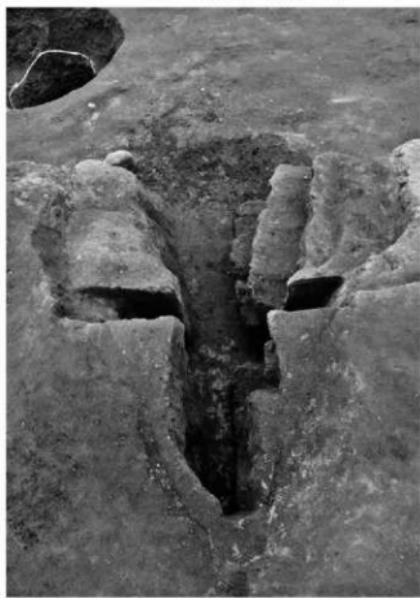
H-19 窟 その2（西から）



H-19 窟 左壁断ち割り（南西から）



H-19 窟 右壁断ち割り（北から）



H-19 窟調査状況（東から）



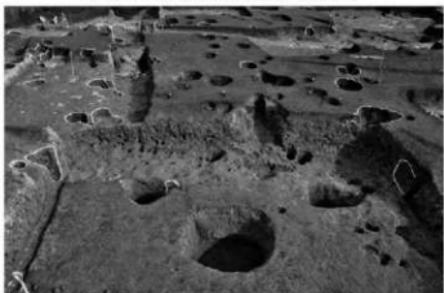
H-19 窟 煙道横断土層断面（西から）



H-19 挖方 南半（北東から）



H-19 床下土坑 土層断面 (西から)



H-19 挖方調査状況 (西から)



H-19 挖方調査状況 (北から)



H-20 (西から)



H-20 挖方 (西から)



H-20 調査状況 (西から)



H-20 貯藏穴上面遺物出土状況 (西から)



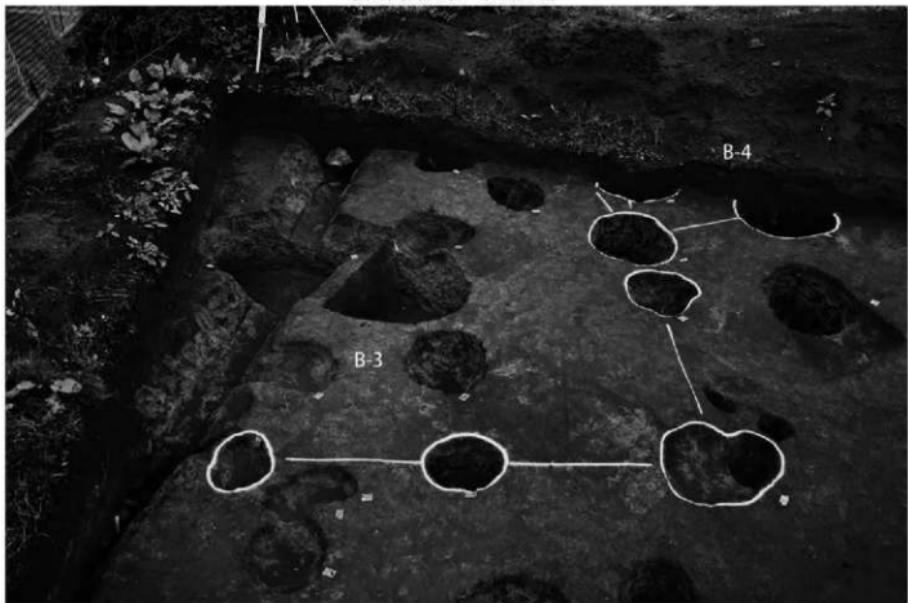
掘立柱建物跡群（北から）



B-2（南から）



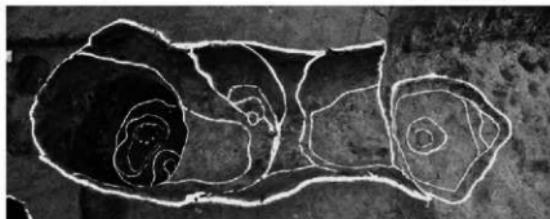
掘立柱建物跡群（北東から）



B-3・B-4（南東から）



B-5 (南から)



B-5 P5・6 (東から・合成)



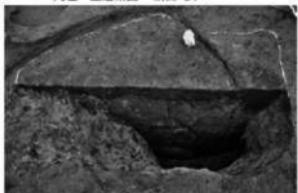
同左 土層断面 (東から)



B-5 P1 (手前) ~ P6 (北から)



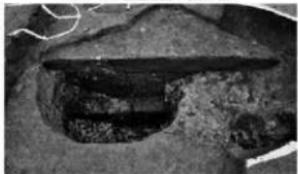
B-5 P9 土層断面 (北から)



B-5 P10 土層断面 (東から)



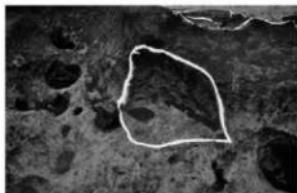
B-5 挖立 P13 土層断面 (南から)



B-5 P14 土層断面 (南から)



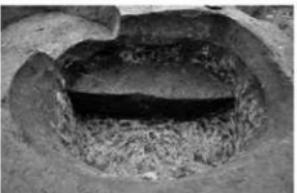
B-6 (南から)



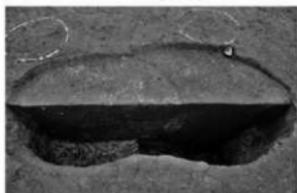
B-6 P1 (西から)



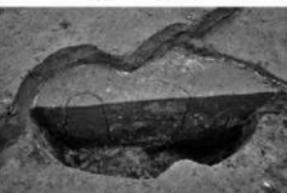
同左 P2 (西から)



同左 P3 (西から)



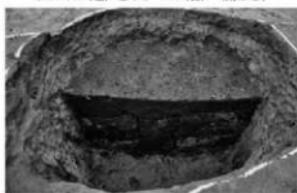
B-6 P4 (左) と B-5 P7 (右) (南から)



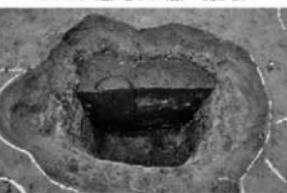
B-6 P5 (左) と B-5 (右) (南から)



B-6 P6 (南から)



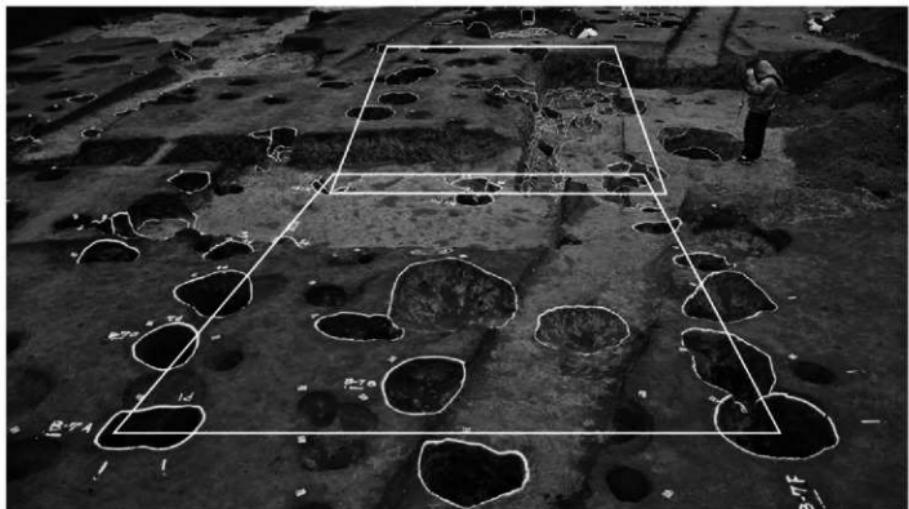
B-6 P7 (西から)



同左 P8 (西から)



同左 P9 (西から)



B-7 (手前) と H-18 (北から)



B-7 P6・7 と H-18 (南から・合成)



V-1 (北から)



V-2 (北から)



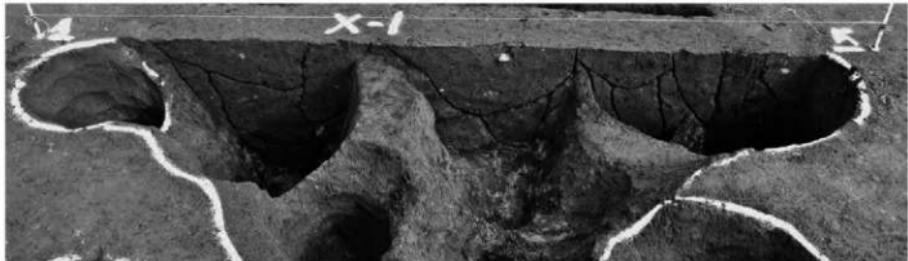
V-3 (南から)



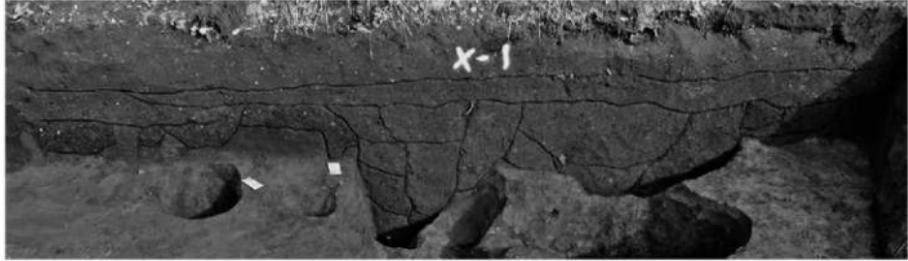
X-1 (西から)



X-1 (東から)



X-1 土層断面 (北から)



X-1 土層断面 (調査区壁・西から)



D-3 (東から)



D-4 土層断面 (南から)

D-4 (東から)



D-17 遺物出土状況 (南から)



D-22 土層断面 (南から)

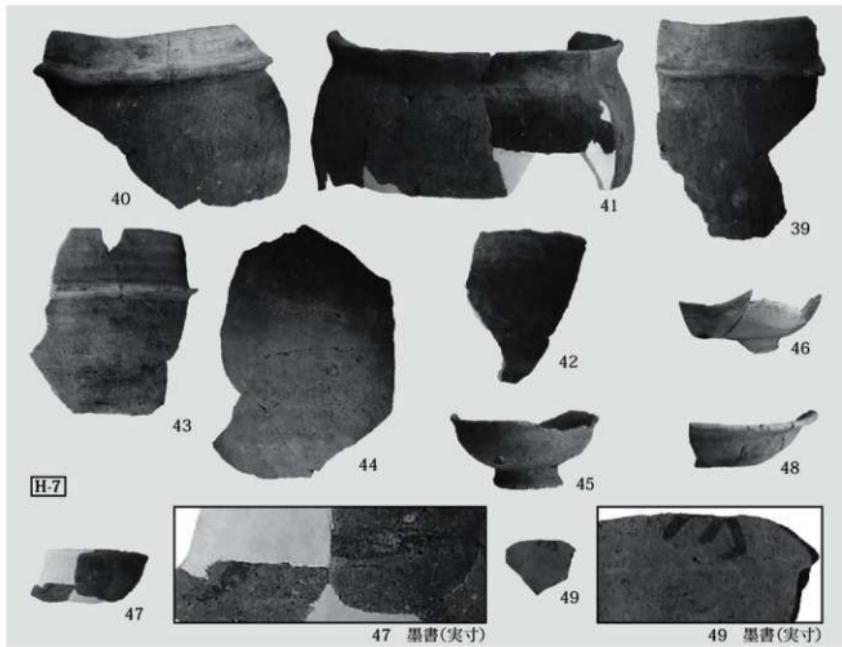
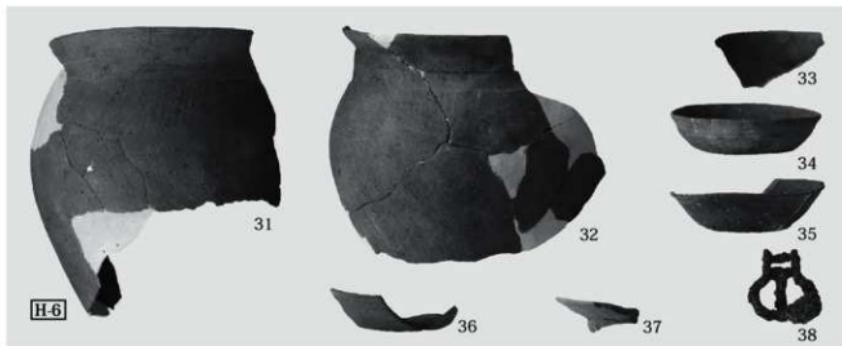


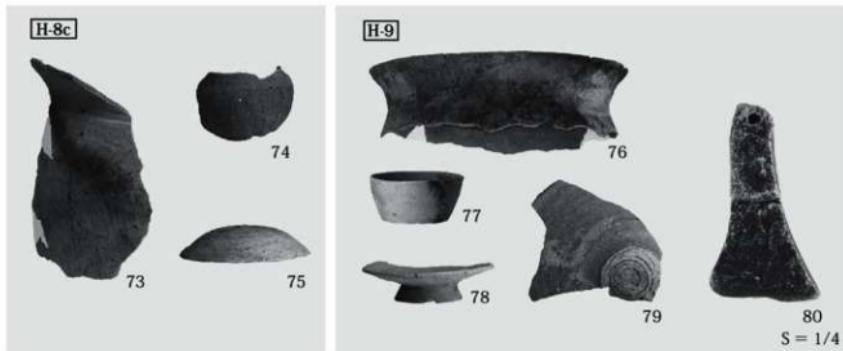
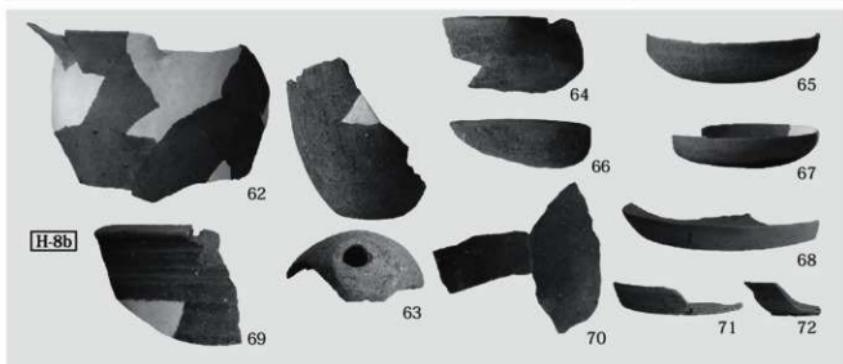
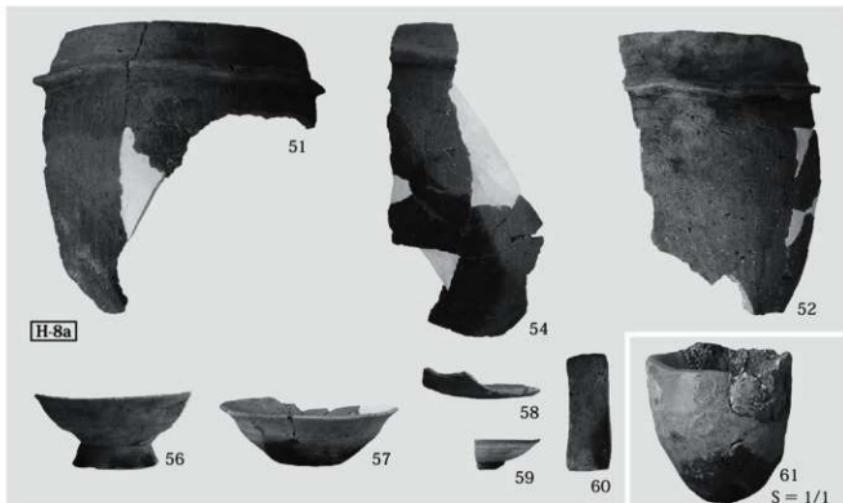
D-24 断ち割り (南から)

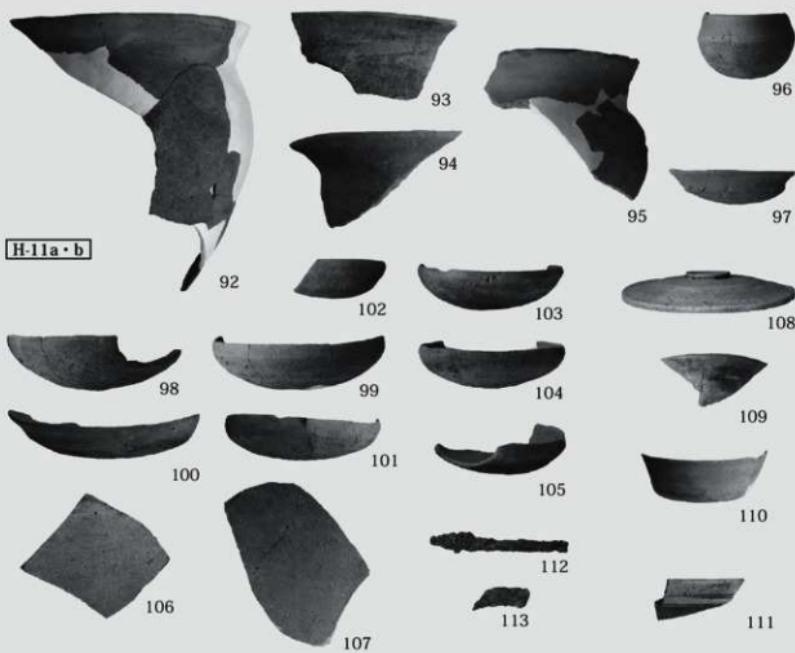


D-25 (北東から)

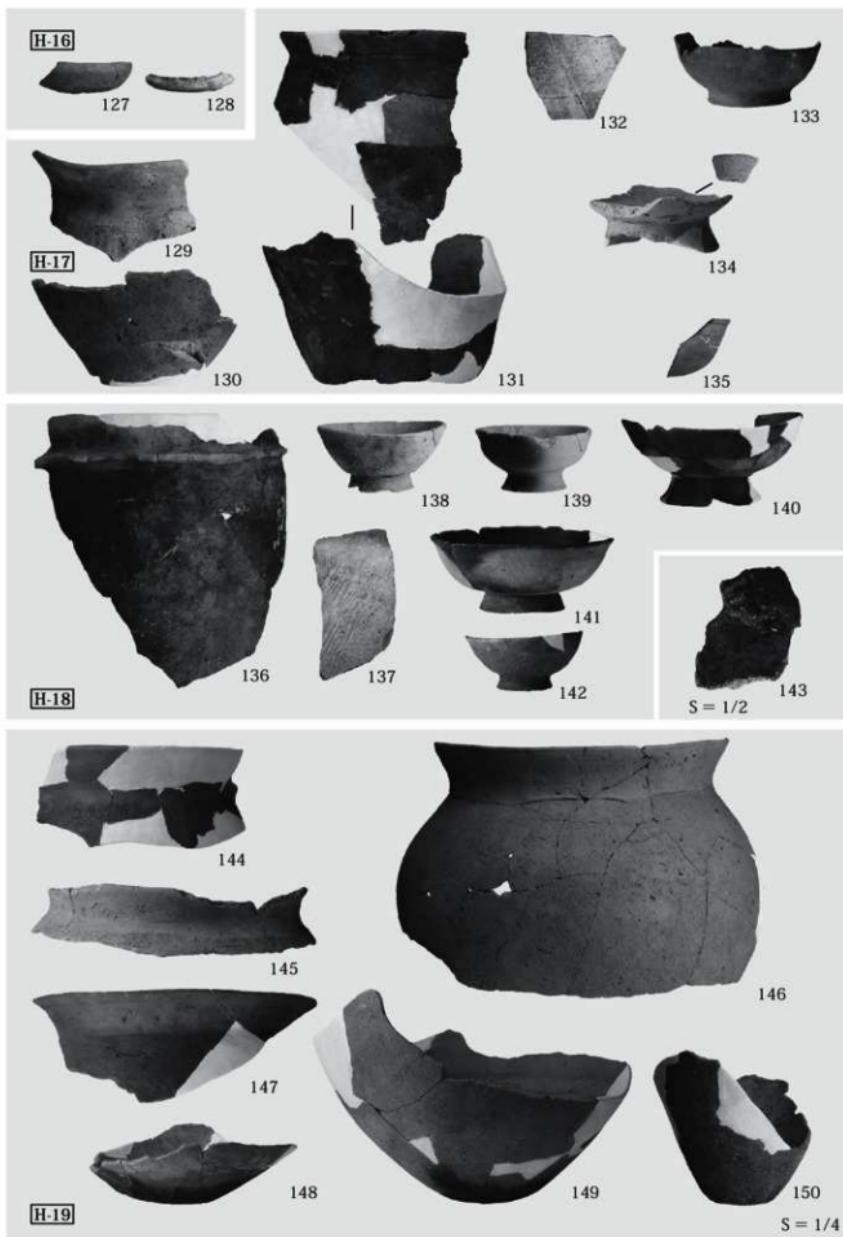






**[H-10]****[H-11a + b]****[H-11c]****[H-14]****[H-12]****[H-15]**

S = 1/4





152



152 墨書(実寸)



153

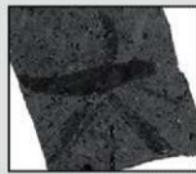


153 墨書(実寸)

H-19



151



151 墨書(実寸)



163



164



154



155



165



166



156



157



167



168



158



159



169



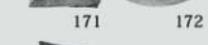
170



160



161



171



172



162



173



174



175



176



177



178



179



S = 1/1

181



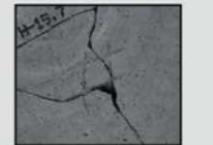
176



176 線刻(実寸)

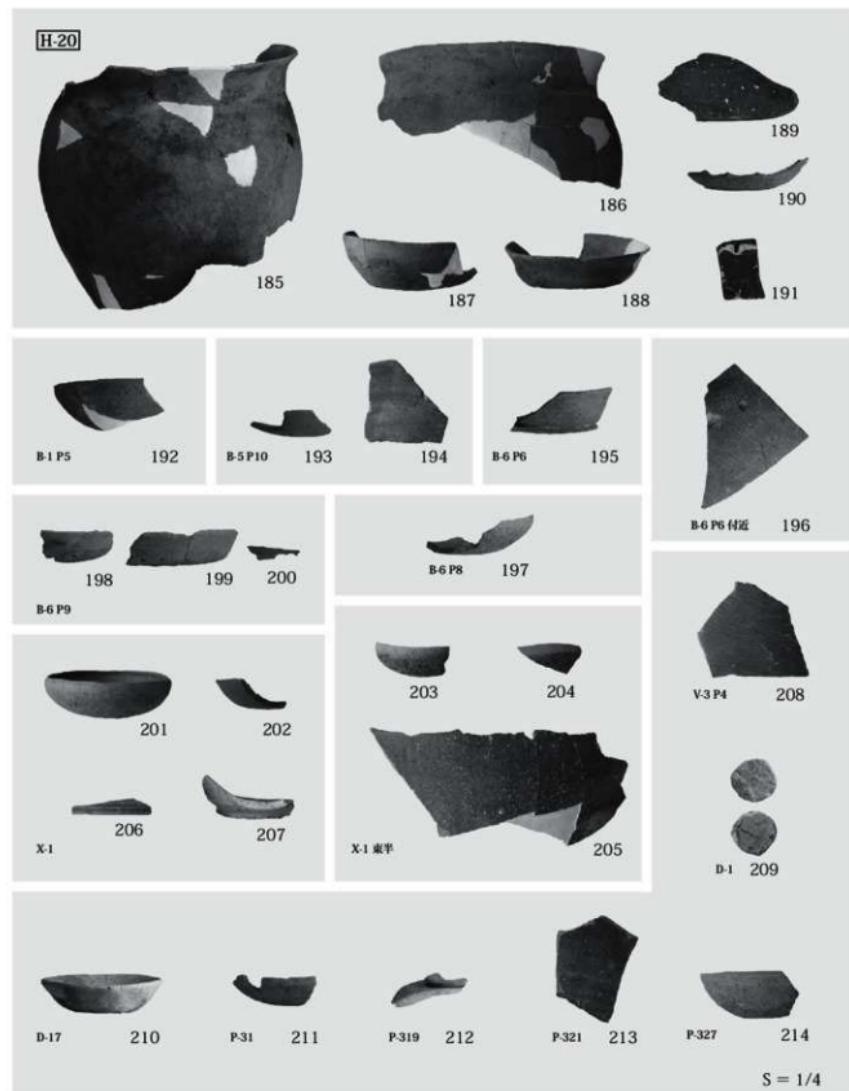


177



177 線刻(実寸)

S = 1/4

 $S = 1/4$

# 報告書抄録

ふりがな	おぎくぼくらかねさんいせき							
書名	荻窪倉兼Ⅲ遺跡							
副書名	荻窪受水場 配水池築造に伴う理蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	永井智教 外山政子 小峰篤 高橋敦							
編集機関	山下工業株式会社							
〒	371-0244 群馬県前橋市鼻毛石町 207-8							
発行機関	前橋市教育委員会 文化財保護課							
発行年月日	2021年5月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査対象面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
荻窪倉兼Ⅲ 遺跡	群馬県前橋市荻窪町 732番7、732番8	102016	0060 (2D30)	36°25'26"	139°8'51"	R2.5.10 R2.7.22	1,239m <sup>2</sup>	受水場配水 池築造
	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項		
縄文時代・古墳時代・ 奈良時代・平安時代	竪穴 竪穴建物跡 掘立柱建物跡 柵列跡 性格不明遺構	1 26 7 6 1	土器類：环、甕 須恵器：环、平瓶、コップ型 白色土器 銅製品（仏像破片か） 鉄製品（刀子・馬具）	7世紀末～8世紀中葉の「豪族の居宅」と推定される大形建物群と柵列を確認。 墨書き器「大」の出土から、山上碑に見える「大尻臣」との関係が考えられた。				
	溝跡 土坑 ビット	4 26 494	貝塚穴痕泥岩	居宅の後は空白期を挟み、馬匹生産に関わる集落となる。畿内志向の白色土器が出土する点からは、国府・都との繋がりを推定させ、莊園的な性格も想定させる。				

## 荻窪倉兼Ⅲ遺跡

—荻窪受水場 配水池築造に伴う理蔵文化財発掘調査報告書—

2021年 5月31日 印刷・発行

編集 山下工業株式会社  
発行 前橋市教育委員会  
印刷 朝日印刷工業株式会社